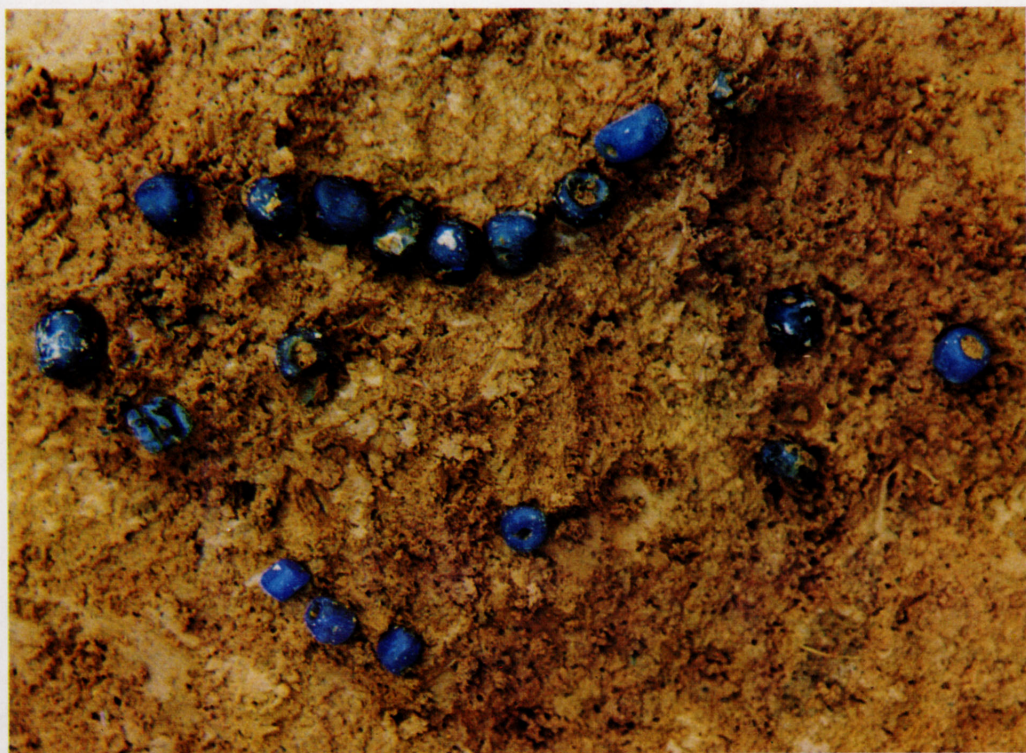


ツルネ遺跡発掘調査報告書

1 9 7 8

高山市教育委員会



方形周溝墓出土ガラス小玉



方形周溝墓全景

序

畑地として使用されているツルネ遺跡のある台地が、農業基盤整備事業を実施することになり、急ぎ発掘調査を迫られることになった。

しかし、教育委員会としては発掘調査のための調査費も意にまかせない状況にあり、どのようにしてこの発掘を実施すべきかは大きな問題であった。

このような厳しい状況の中であつたが幸いにして大野政雄氏をはじめ高山考古学研究会の各位並びに土地所有者、整備事業関係者の全面的協力と市内中学校生徒の奉仕によって発掘調査を行うことになった。

発掘にあたっては綿密な計画にもとづき周到な注意をはらって作業を進め、その結果として県内で初めての方形周溝墓をはじめ、考古学上の貴重な資料が発掘された。

時あたかも盛夏の炎天下にもかかわらず学究的熱意と誠意をもって調査にあられた担当者各位、厚いご理解をいただいた関係者各位に深甚の謝意を表しますとともに、進んで発掘作業に協力した中学生諸君の労をねぎらうものである。

ここに貴重な資料をまとめて報告することになったが、これが今後の研究の資となり、また文化財保護への関心を高めることへの一助ともなれば幸いである。

昭和53年3月

高山市教育長 長 瀬 正 三

本文目次

I. はじめに	1
II. 発掘調査の経過	3
III. 地形と地質	6
IV. 遺 構	8
1. 第1号住居跡	8
2. 第2号住居跡	11
3. 第3号住居跡	12
4. 第4号住居跡	14
5. ピット群	14
6. B区南方方形土壌	17
7. その他	19
8. 方形周溝墓	19
V. 遺 物	22
1. 石 器	22
2. 土 器	34
3. 自然遺物(特別寄稿)	47
VI. 考 察	51
1. 土器群のまとめと考察	51
2. 岐阜県縄文時代遺跡出土の植物遺体(特別寄稿)	53
VII. ま と め	57

挿 図 目 次

挿図1 遺跡の位置	1
2 遺跡付近地形図(ツルネ台地)	2
3 調査区域図	4
4 ツルネ面での地層柱状図	7
5 地形と地質説明模式図	7
6 ツルネ遺跡遺構平面図	9
7 第1号住居跡平面・断面・層位実測図	10
8 第1号住居跡石囲炉実測図	11
9 第2・3・4号住居跡実測図	13
10 第1ピット群及び第2ピット群実測図	16
11 第1ピット群P1内の炭化物出土状況	17
12 第3ピット群	17
13 方形土壇実測図	18
14 方形周溝墓実測図	19
15 方形周溝墓出土ガラス小玉実測図	20
16 磨製石斧実測図	27
17 打製石斧実測図	28
18 削器実測図	29
19 石鏃・石錐実測図	30
20 剥片・石錘実測図	31
21 剥片・塊状耳飾・異形垂玉実測図	32
22 凹石・磨石・敲石・石皿実測図	33
23 第1号住居跡出土の土器及び第1ピット群の土器	39
24 第2号住居跡出土の土器	40
25 第2号住居跡出土の土器	41

挿図 26	第 2 号住居跡出土の土器及び大ピット内の土器……	42
27	第 4 号住居跡出土の土器……………	43
28	第 4 号住居跡出土の土器……………	44
29	第 3 ピット群及び B 区南方方形土壇出土の土器……	45
30	第 2 ピット群, 第 3 号住居跡及び方形周溝墓内出土の土器	46
31	ピット内出土の植物炭化種子……………	50
32	本多静六氏による日本の植物帯図(四手井1974より引用)	54
33	岐阜県下における植物炭化種子出土の縄文遺跡……	56

付 表 目 次

第 1 表	ツルネ遺跡出土石器一覧表……………	23
第 2 表	第 3 号住居跡出土編物用おもり石形測表……………	24
第 3 表	各遺構の土器とその関連……………	52
第 4 表	ドングリ類分類表……………	54

写 真 目 次

写真 1	第 I トレンチ発掘風景……………	5
写真 2	B 区遺構作業風景……………	21
写真 3	B 区 遺 構……………	26
写真 4	B 区発掘風景……………	58

図 版 目 次

巻頭カラー図版 上、方形周溝墓全景 下、方形周溝墓出土ガラス小玉

図版1 ツルネ遺跡遠景	図版34 同 B-2a, 2b類
2 B地区発掘区域全景	35 同 B-3類
3 第1号住居跡	36 同 B-5c類
4 第1号住居跡, 炉跡	37 同 B-4類
5 第2号住居跡	38 同 B-5a類
6 第3号住居跡	39 同 B-5b, 5d類
7 第4号住居跡	40 同 B-6類 その他
8 第1ピット群	41 大ピット内 B-7類
9 第2ピット群	42 同 B-8類
10 第3ピット群	43 第2号住居跡 土器底部
11 方形土壌	44 第4号住居跡 C-1類
12 第2号住居跡 剥片の集積状態	45 同 C-1類
13 第2号住居跡の立石と第3号住居跡の編物用おもり石	46 同 C-2類
14 第4号住居跡 土器出土状態	47 同 C-3類
15 第4号住居跡 土器出土状態	48 同 C-3類
16 磨製石斧	49 同 C-4類
17 打製石斧	50 同 C-3類
18 各種削器	51 第1ピット群 D-1類
19 石鏃, 石錐	D-2類
20 塊状耳飾	52 同 D-3類
21 異形垂玉	53 第2ピット群 E-1類
22 石 錘	54 第2ピット群 E-1類
23 凹石, 磨石, 敲石	55 第3ピット群 F-1類
24 剥 片	56 同 F-1類
25 第2号住居跡の接合する剥片	57 方形土壌 G-1類
26 石 核	58 同 G-2類
27 編物用おもり石	59 第3号住居跡 土師器
28 石 皿	60 同 土 器
29 流紋岩角礫, 立石(左側)	61 方形周溝内出土弥生式土器
30 石棒頭部	62 同 高杯脚部
31 石冠形置石	63 同 4, 8, 9グリッド
32 第1号住居跡 A-1類	64 同 ガラス小玉
33 第2号住居跡 B-1類	65 炭化植物種子

例 言

1. 本報告書は、岐阜県高山市江名子町大字せいじ字ツルネ地内のツルネ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 圃場整備事業により、遺跡が破壊されるため緊急発掘調査を行なったものである。
3. 調査は昭和51年8月16日より9月26日に至る間、二次に亘って実施した。
4. 調査は下記の調査団によって実施したものである。

団 長	高山市教育長	蒲 接 蔵
調査主任	文化財審議委員	大野政雄（日本考古学協会員）
調 査 員	高山市考古学研究会員	石原哲弥 藤本健三 垣水富郎 寺地茂雄 野村宗作 吉朝則富
	高山市教育委員会 社会教育課課長	綱谷大輔
		係長 銅島大衍
		主事 坂本育男

作業協力者

高山市立日枝中学校 郷土研究クラブ員
高山市立大八中学校 郷土研究クラブ員
高山市立日枝、大八、松倉中学校有志生徒

この他に 市民有志、学校職員、教育委員会職員のご協力をいただいた。

5. 本報告書の挿図作図、図版の写真撮影、及び執筆は、高山考古学研究会員によって行なった。
6. 調査にあたり、ご指導、助言、協力を賜わった下記の方々に深く感謝の意を表します。
平安博物館 渡辺 誠氏、大阪府立大学 粉川昭平氏、富山県教育委員会 橋本 正氏
金沢美術大学 小島俊彰氏、信濃考古学会 神村 透氏、日本考古学会員 紅村 弘氏
岐阜県考古学会会長 大江 侖氏
7. 発掘にご理解とご協力をいただいた地主白川義則氏、今寺 章氏、中野茂夫氏、北村忠太郎氏、及び土地改良組合長小屋垣内勝次郎氏をはじめ工事担当の大地土木社長 富士田明氏に謝意を表する。

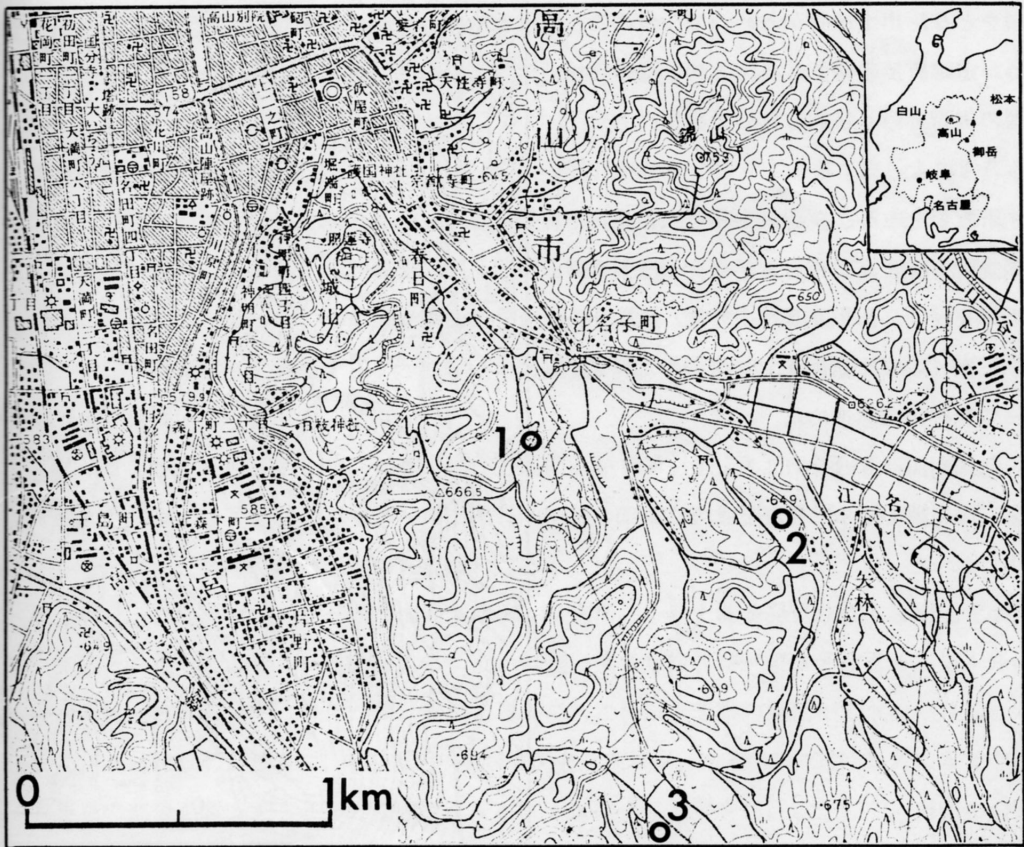
I. はじめに

高山盆地東部の江名子町一帯には、ひじ山、糠塚をはじめツルネ、保木、泉水、町上野、向畑、矢林など多くの縄文遺跡が分布し、「遺跡の丘」と呼ぶにふさわしい地帯である。

ツルネ遺跡が文献に初見されるのは、昭和10年に発刊された「飛驒石器時代遺蹟地名表」（飛驒考古土俗学会編）である。これは昭和3年に発刊された「日本石器時代遺物発見地名表第5版」（東京帝国大学理学部人類学教室編）を補正して編集されたものである。ツルネ遺跡の出土遺物としては、土器、石鏃、彫刻のある石皿が記載されている。

ツルネ遺跡は江名子町大字せいじに属し、後背の丘陵頂部平坦面から約40m低い、海拔約630mの舌状台地に位置している。舌状台地の突端部よりさらに約30m低い江名子川沿いの平坦地には、国学者田中大秀によって再興された荏名神社がある。県指定史跡の荏野文庫土蔵庫は有名である。ツルネという俗称には、尾根つづきの地形という意味があるといわれる。

ツルネ遺跡の南東約1kmにある「ひじ山遺跡」は、昭和9年～12年にかけて、赤木清によ



挿図1 遺跡の位置（1：ツルネ遺跡，2：ひじ山遺跡，3：糠塚遺跡）（2.5万分の1 高山）

り縄文早期の押型文土器及び弥生式土器の発掘研究がなされたことで著名である。またツルネ遺跡の南南東約1.5kmの「糠塚遺跡」は、昭和8年より14年にかけて、赤木清により縄文前期の一型式として「糠塚式土器」が提称されたことで知られている。

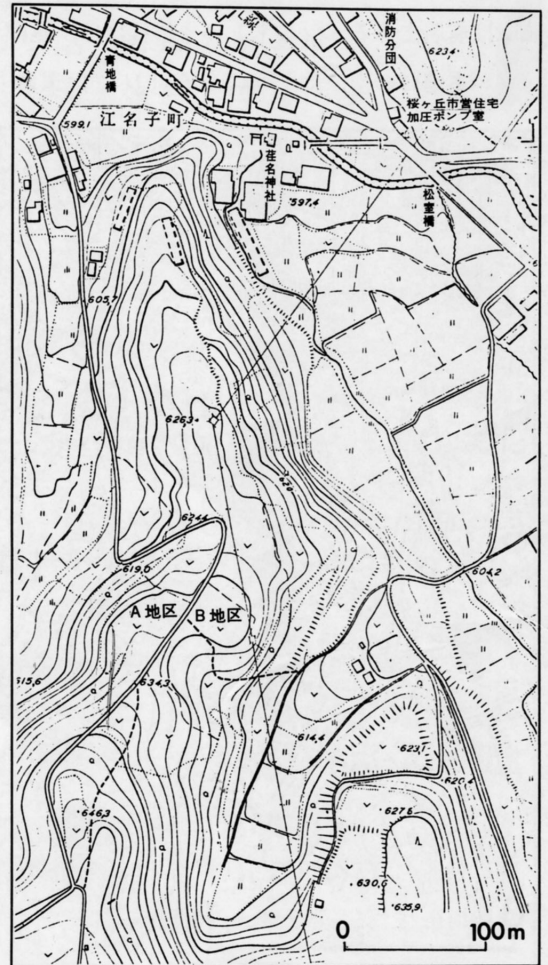
その後、この地域での調査研究はなされていない。戦後の土地開発によって、いくつかの遺跡が一部破壊され、或いは消滅した。「向畑遺跡」から採集された有舌尖頭器は、この地域でもっとも時代の古い遺物として知られている。（註 岐阜県史 先史編）

昭和51年3月には、「岐阜県遺跡地図」が県教育委員会により発刊された。遺跡地図作製に従事した野村宗作会員は、ツルネ遺跡地点の確認のため表採や、昭和10年当時の聞き込みにも努力した。表採では石鏃4点とチップ片、土器片（縄文中期）が少量認められる程度であった。

昭和51年4月、ツルネ地区一帯（約8.6ヘクタール）が野菜供給の安定を図るため、圃場整備作業が実施されることを知り、遺跡の中心と推定される地点が、約1.5mの深さまで削りとられる工事内容であるため、緊急発掘を実施する運びとなった。8月16日より工事着工の9月1日までの短期間の発掘手続をとり、出土遺物がきわめて少量のため、遺跡有無の確認と夏休みの社会科学習の実習という目的も含めて発掘にあたることになった。

市教委を中心に、調査主任を大野政雄、調査員として高山市考古学研究会会員が委嘱を受け高山市立日枝中学校、大八中学校両校の郷土研究クラブ員の参加によって発掘調査を進めた。

発掘期間は8月16日より、延長された第二次発掘終了の9月26日までの42日間であった。



挿図2 遺跡付近地形図（ツルネ台地）

II. 発掘調査の経過

昭和51年8月4日より(地質調査も兼ねて)予備調査を実施した。農道西側の畑に、第I、第IIトレンチ(それぞれ2m×10m)を設定して試掘を行った。深さ約20cmの耕作土の下部は黄褐色の粘土質ロームで、地表より50cmほど掘り下げたが、第IIトレンチでは遺物も殆んど出土しないため発掘を中止した。

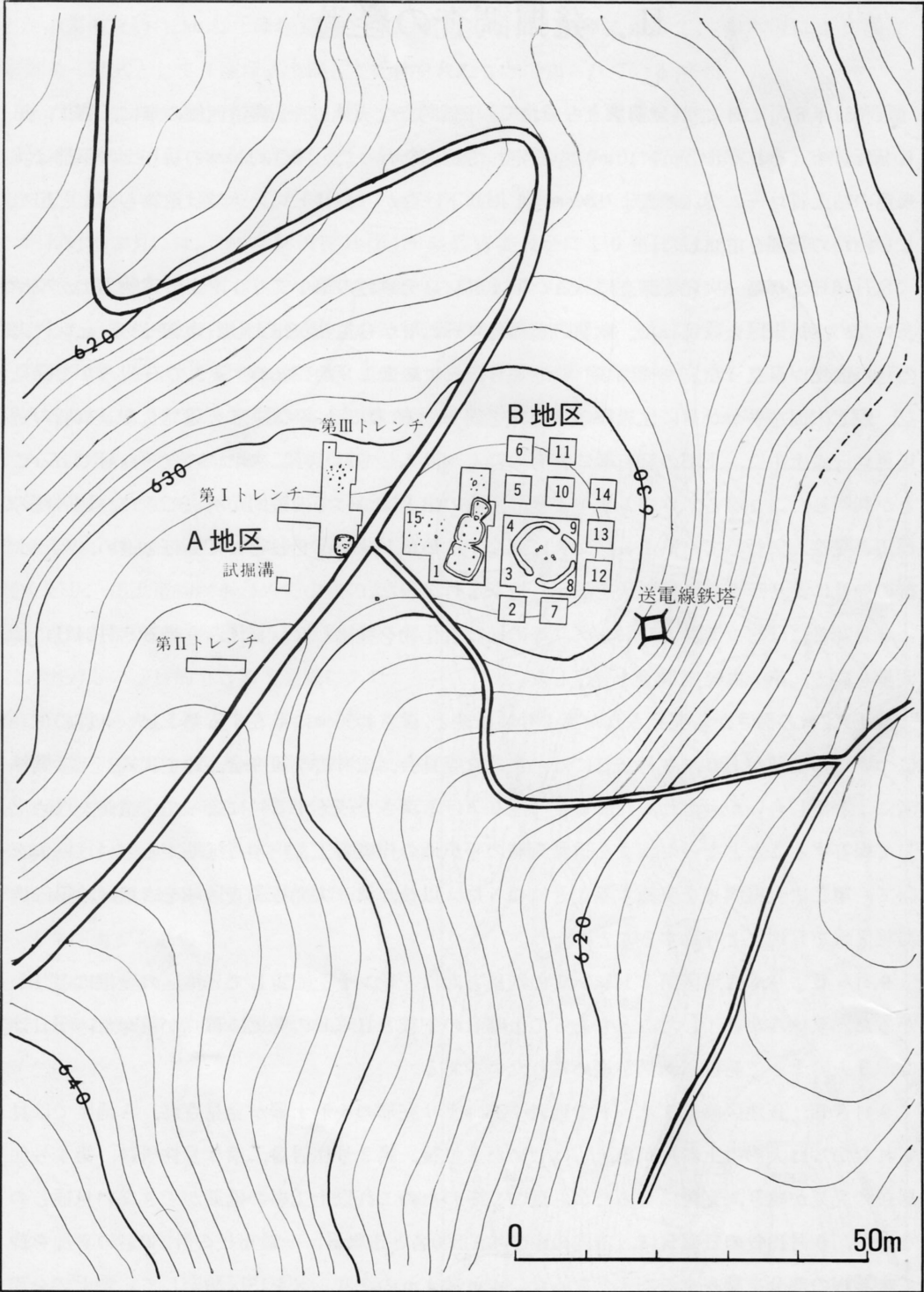
8月16日より第一次発掘調査に入る。第Iトレンチ東端の第1グリッドでの遺物出土がやや多いため、拡張区を設定した。軟質の黄褐色ローム層から遺物が出土し、東端セクションの土の色の変化が目立った。(挿図3) 8月19日に地表より約120cmの深さで石組み炉を発見し、炉と床面を手がかりに住居跡のプランを深った結果、3本の柱穴を確認した。軟質の黄褐色ローム土中に、下部の軽石層に特有の軽石が混入しており、二次堆積のローム層であることが判明したことから、ローム層中よりの遺物の出土についての疑問が解決できた。住居跡の周辺の発掘と併行して、第Iトレンチに直交する第IIIトレンチを設定して発掘を進め、ピット群の発見により、さらに拡張区を設定し追求を行なった。

8月22日にはピット群よりドングリ等の植物炭化物を検出した。夏休みも終る8月24日には、測量を終え、第一次発掘調査を完了した。

地下1.2mの深さから発見された第1号住居跡と、深さ約50cmに散在する第1ピット群の保存についての要望があり、8月26日には、市教育委員会、市考古学研究会、地主代表、工事関係者による話し合いがもたれ、設計変更(削り下げる深さを浅くする)によって、遺跡を埋め戻して保存することとなった。また道路東側の平坦地の作業着工を一ヶ月延期するという協力を得て、第二次発掘調査を実施することになった。以後、第一次発掘調査区域をA地区、第二次発掘区域をB地区と呼称することにした。

9月5日より、A地区第Iトレンチの延長方向にトレンチを設定してB地区の発掘にとりかかった。夏休みが終了したこともあって土曜日の午後と日曜日の発掘に重点が置かれ、平日は2、3人によって発掘、測量が進められたのである。

9月6日、B地区第1グリッドで地表下35cmより完形の小形土器が発見され、A地区では見られなかった大形の土器片が出土しはじめた。以後、第2号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡の発見が続き、完掘に努めたが、近づく冬のためこれ以上工事の延期ができない見通しのなかで、9月19日の日曜日に、市内の中学生約200名と市職員、一般市民の計230名の参加を得て未発掘の部分进行调查することとなった。4m×4mのグリッドを15区設定して、表土の全面除去を実施した。深さ約25cmの耕作土を除去したところ、第3、第4、第8、第9グリッドに



挿図3 調査区域図

広がって巾約60cmの方形に型どられた溝状ピットが出現した。更に土層観察用のベルトを除去する段階で、方形周溝のほぼ中心部の地表より24cmの位置からガラス玉18個が見つかった形のまま出土し、周溝内からも弥生後期の土器片が出土して、県下で最初の方角周溝墓の発見となった。この日は第2、第3ピット群の調査も同時に進行し、完掘された。

9月20日より、近づくブルドーザーの音にせきたてられるような思いで、測量、写真撮影の仕事を進め、9月26日に至り、第二次発掘を終了した。なお9月25日にはA地区の第1号住居跡と第1ピット群に対し、深さ約20cmの砂で覆った後、これを埋めもどす作業を実施した。

9月30日、B地区は約2m掘り下げられ完全に消滅した。

10月2日、B地区南の傾斜地の整地中に土器片が出土し、その付近の調査で方形の土壌が発見された。

出土遺物は、寺地茂雄会員の倉庫に収納し、以後ここを作業及び研究室として利用した。水洗い、接合と復元、整理番号の記入、実測と製図、拓本、写真撮影、図版、スライド整理など、日曜日を中心にしてこれらの作業を行ったため、予想以上に日時が経過した。この間、北陸、東海、信州との遺物の比較研究や、方形周溝墓に関する文献学習に努めた。

52年8月20日には、岐阜県考古学会研究会が高山市で開催され、「縄文中期」をテーマにして「ツルネ遺跡」の遺物を中心に研究交流を行い、橋本正氏による「北陸地方の先土器時代遺物及び縄文中期の編年」の講演を拝聴する機会を得た。

その後、12月9日の高山市教育委員会と高山市文化協会の主催する、「ツルネ遺跡報告会」をはじめとして、4回の説明会がもたれ、市民・小中学生に対する発掘の成果の公表と、文化財に対する意識の向上を計った。

また報告書の作製にあたっては、遺跡から出土した植物炭化物について、渡辺誠氏と、粉川昭平氏の分析結果の玉稿をいただくことができたのである。



写真1 第1トレンチ 発掘風景

III. 地形と地質

高山盆地南方に分布する古生層山地は、表日本と裏日本の分水嶺として海拔約1000mの直線上の山陵を連らねている。

この山地の山麓から北に向って、丘陵地が分布している。この丘陵地は江名子川、山口谷川等によって谷中広く開折されて、両岸には水田地帯がひろがっている。丘陵地の頂部は、海拔約670m位で定高性をもっている。丘陵頂部の平坦面を「天井面」と呼ぶ。この面より約40m低く、江名子川沿いの平坦面より比高約30mの段丘面が見られる。これを「ツルネ面」と呼ぶ。まとめると次のように地形が区分される。

高位面（天井面） 標高690～670m

中位面（ツルネ面） 標高650～630m

低位面（江名子面） 標高620～600m

この地域の多くの縄文遺跡は「ツルネ面」に分布している。

高位の丘陵の地質は、第四紀前期にこの地方一帯に噴流した両輝石安山岩質の熔結凝灰岩である。灰青色の比較的軟質の岩石でこの地域で厚さ約50mである。（註1）

この岩石が浸食されて残ったのが頂部に平坦面をもつ「天井面」である。丘陵北端の城山、錦山などは、盆地の基盤岩類である「濃飛リュウモン岩」の山体である。

天井面を残して浸食された谷に礫層が堆積して形成された段丘面が「ツルネ面」であり、その後、浸食されて現在の「江名子面」が形成されたと考えられる。

段丘を構成している礫層は、円礫は少なく南部の古生層山地より供給されたとと思われる砂岩類、チャートなどの角礫層である。温暖気候の化石ともいわれている赤色風化をした砂岩れきを多く含んでいるのが特色である。この「天井面」と「ツルネ面」を、火山性の碎屑物、いわゆる火山灰層が約2m位の厚さで覆っている。挿図5は以上の地形と地質を示す模式図である。なお火山灰層は挿図4のように区分されている。（註2）

町方ローム層は表層（腐食土とところによって黒ボク土）の下部の茶褐色粘土質ロームで、火山ガラスが多く、シソ輝石、角セン石の含有が多い。

高山ローム層は黄褐色粘土質ロームで下部の粗い軽石層に漸移している。磁鉄鉱と風化した角セン石、黒ウンモが目立ち、軽石層には多量の黒雲母が含まれており識別し易い。

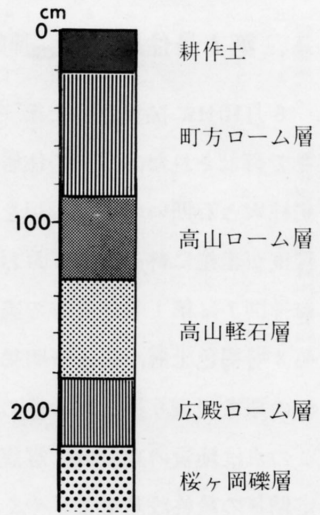
広殿ローム層は茶褐色粘土質ロームで、角セン石や風化鉱物が目立ち、うすい軽石層がはさまれている。「天井面」にも「ツルネ面」にも、この三層のローム層が堆積している。「天井面」では安山岩の風化帯の上に、「ツルネ面」では赤色風化礫を含む礫層の上に広殿ローム層

が観察される。「江名子面」には火山灰層は見られない。

A地区では、上記ローム層と二次堆積の火山灰層との識別が困難であった。黄褐色ローム層に土器片が混入しており、下位にしかみられない軽石や板状の褐鉄鉱（軽石層の底部にみられる）が混在していることから二次堆積と識別できた。これは高位の丘陵につづく段丘の基部という地形のためである。かつて赤木清の「ひじ山遺跡」の発掘報告文で「黄褐色土中より土器が出土する……」という注目すべき文章があるが、二次堆積のロームという観点から再検討をしてみる必要がある。

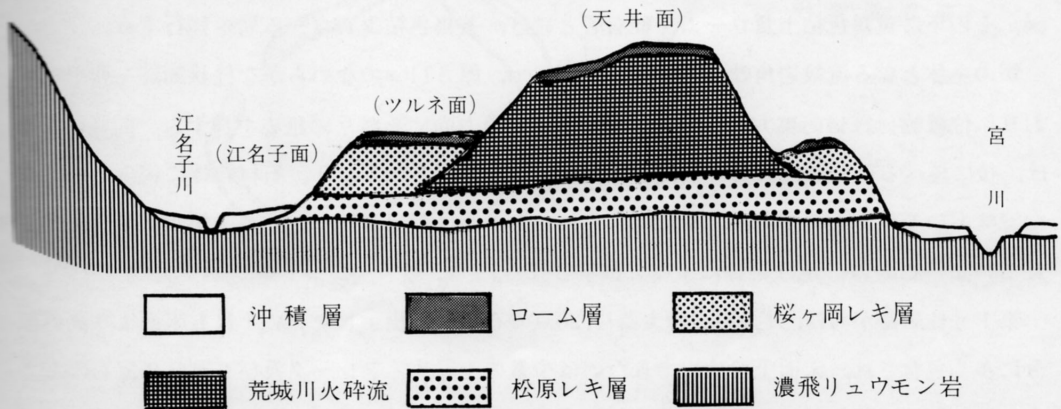
また第1号住居跡のセクションで、白色の風化土層が見られたが、これは高位の丘陵地を構成している両輝石安山岩質の熔結凝灰岩の風化礫を主体としたものである。

B地区が深さ約25cmの耕作土を除いたあとローム層の^{じやま}地山となったのに比べ、第1号住居跡の床が地表より120cmの深さであったことは、堅穴をつくった当時の地表面や、二次堆積のローム層に深く関連しているのであり同様な段丘での調査時にはこういった二次堆積について考慮をする必要がある。



挿図4 ツルネ面での地層柱状図

- 註1・地質図幅「船津」および説明書 地質調査書 磯見博, 野沢保 S31
 ・岐阜県東部の高原火山岩類および上野玄武岩のK-Ar年代 柴田賢, 山田直利 地球科学31巻1号 S52, 1
 ・岐阜県東部の2, 3の更新世火山岩類の自然残留磁気について 円治耕吉, 山田直利 齊藤友三郎 地質調査所月報 第28巻 別刷 S52
- 註2・飛騨ロームについて 石原哲弥 岐阜考古 4号 S50
 飛騨ローム研究ノートより(1), (2) 石原哲弥 岐阜県高校地学教育V O1, 11, 12 S50, 51
 ・高山市付近の第四系について 梶田澄雄, 石原哲弥 地質学論集 第14号 S52.2



挿図5 地形と地質説明模式図

IV. 遺 構

1. 第1号住居跡 (挿図7)

8月16日に開始された第一次発掘において、第Iトレンチ1区拡張区より地表下1.2mの深さで確認された、最初の住居跡である。南北3.3m、東西2.9mの規模をもつ隅丸方形で、3本の支柱穴と石囲いの長方形炉を伴う。発掘区域はあいにく農道にかかるため、住居跡の4分の1程度が未掘に終わったが、おおよその形は想定出来た。

挿図7に第1号住居跡の実測図及び層位図を示した。第1層黒色土層、第2層白色風化土層、第3層褐色土層、第4層明褐色流れ込み土層、第5層黄褐色ローム層で、住居跡は第5層に20cmの深さで掘り込まれ、他の地点と比較して床面までの深さが圧倒的に深いのが注目される。この点は地質の項で既に解説されているが、発掘時には種々の疑問と困惑をもたらし、発掘予定期日の最終段階でようやく出現した炉跡に対する感激には、ひとしおのものがあった。

床面下30cmには、軽石層が厚さ40cmで推積し、手では掘り進めない堅さを持っている。その下は茶褐色の粘土質ローム層が続く。

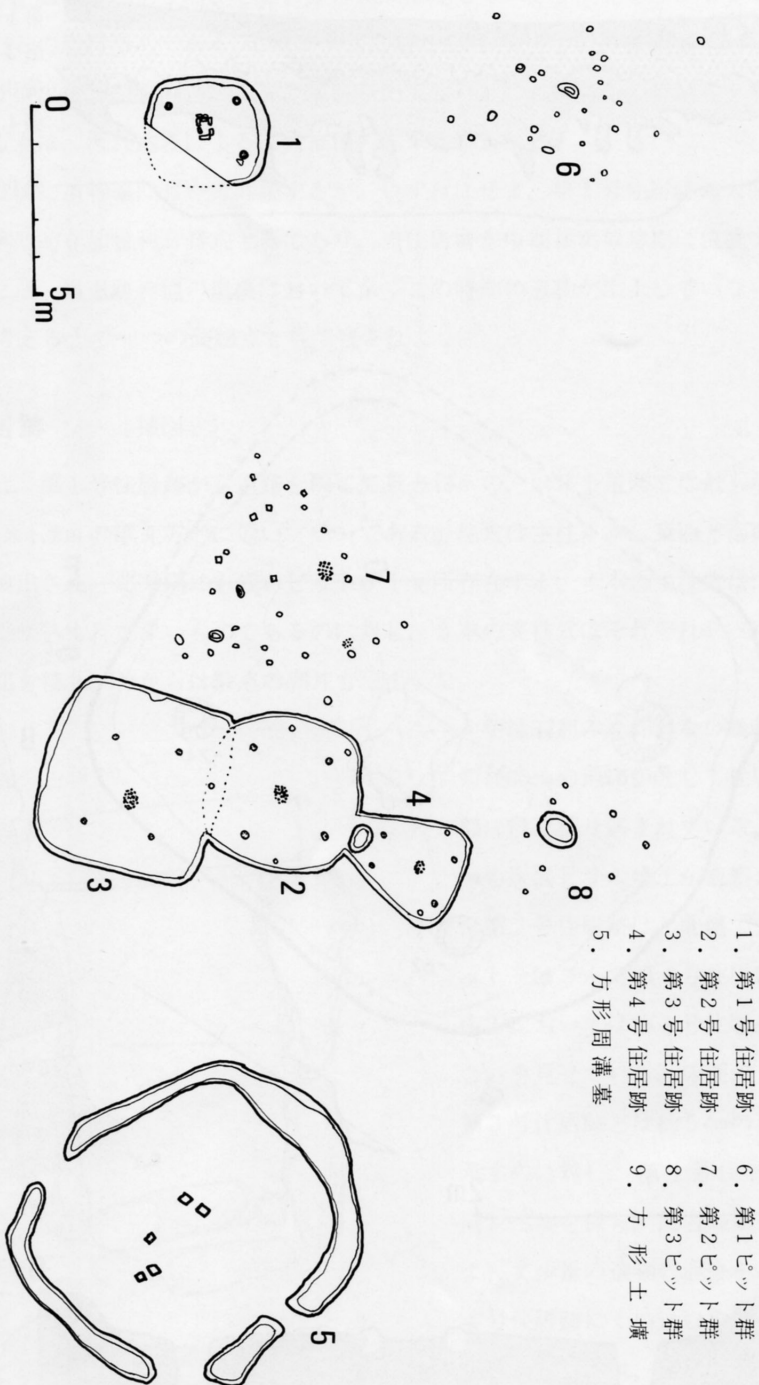
柱穴は真すぐに掘り込まれた深さ60~70cmの支柱が3本検出されたのみであった。直径25cm平均の円形で、最深部に進むに従ってかなり細まり、サラサラした砂状の土と共に少量の剥片と炭片が出土した。

炉跡は、挿図8に示したように流紋岩の柱状角礫を主体にして、チャートの礫を長方形に組んだ整った形を持つもので、計9個の石材が使用されている。個々の石材はしっかりとロームに組み込まれており、あらかじめ石材の大きさを想定して穴を掘り、はめ込んでいったと思われる。最大長68cm、最大巾55cm、内部の最大長42cm、最大巾33cmで、土器片を含んだ炭の層8cm、その下に黄褐色粘土質ローム、軽石層と続き、茶褐色粘土質ローム層へ移行する。

炉の主体となる流紋岩角礫は長さ39cm、巾9cm、厚さ11cmのなめらかな柱状節理を利用しており、位置的には炉の東方の一面をしめ、その直線方向に乗鞍岳の雄姿を拝する。同様の石材は、後に述べる第2号住居跡で検出された立石にも使用されており、石材自体に何らかの特殊な意味あいを持つものであるとすれば、これらの事例は看過し難い。なお、炉があまり使用されていないことは、焼け具合によって推察される。

第1号住居跡からは、約100点の土器片、20点の石器類が出土した。いずれも床面より高い部分に多く包含され、床面上で検出できたのは少量の土器片とフレーク及び石冠状の置石のみであった。石器に関しては、磨製石斧、打製石斧、石鏃、削器、磨石、敲石、石錘、凹石、石皿、

挿図6 ソルネ遺跡 遺構平面図



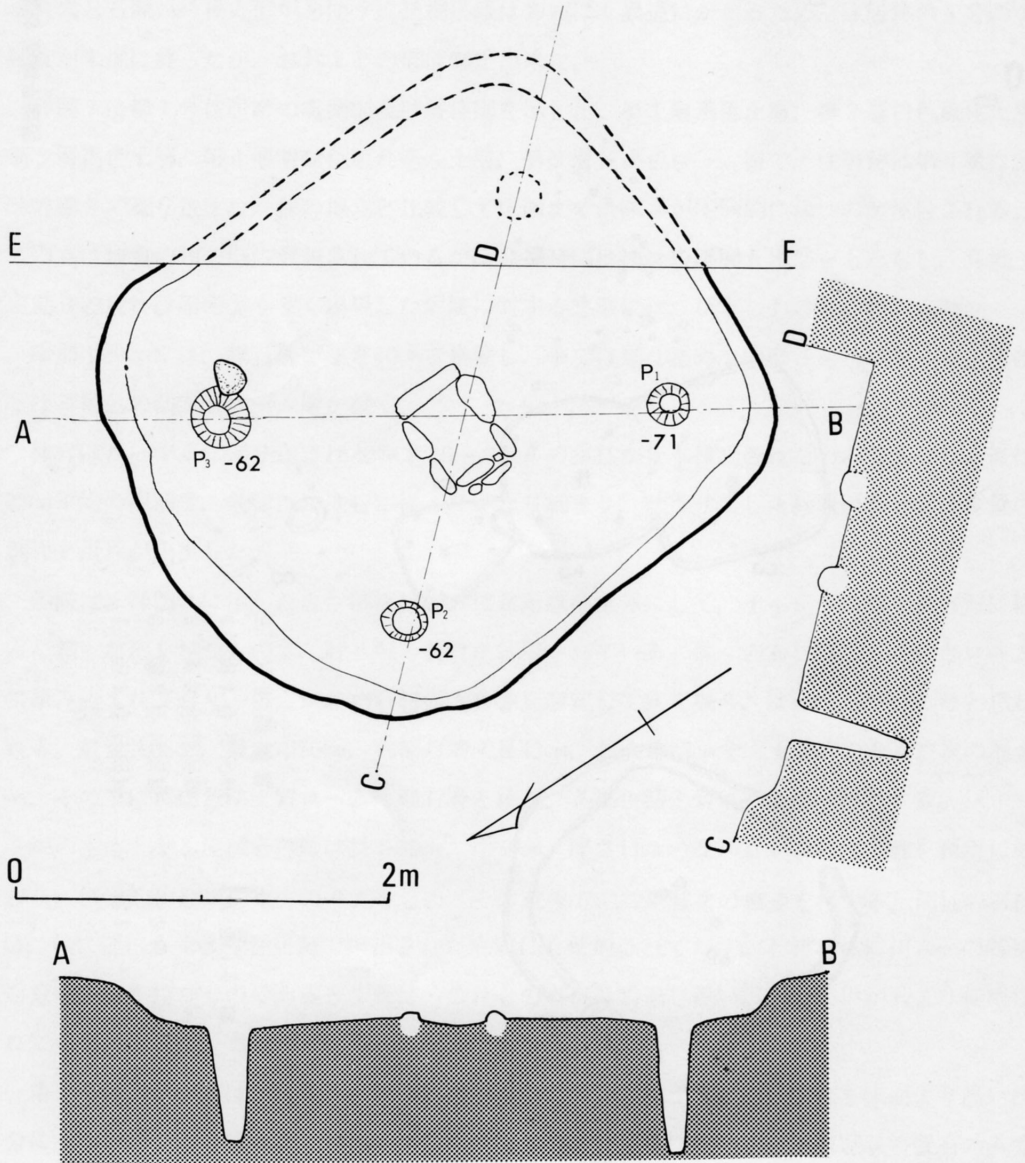
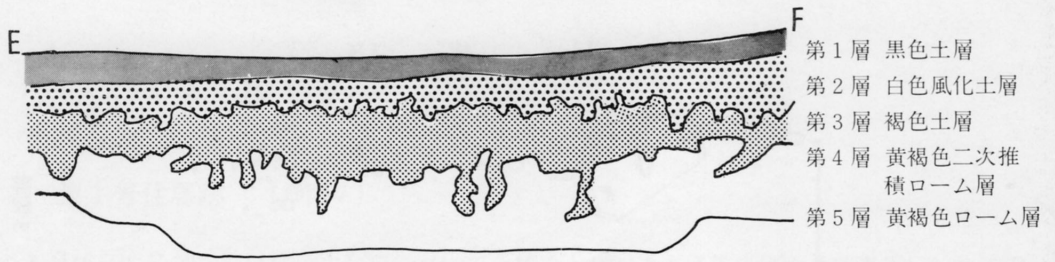


插图7 第1号住居跡 平面，断面，層位実測図

石冠状置石、剥片、石核が出土し、ひとつおりの組成はみせているが、完形品が少なく、風化の度合も進んでいるのが特徴的である。土器はすべて破片で、最大のもので10cm×9cm程度である。住居跡床面で検出されたものと、1～3層から出土したものととは若干の時期差をみせ、しかも逆転している点は、流れ込みによる二次推積の結果と思われる。

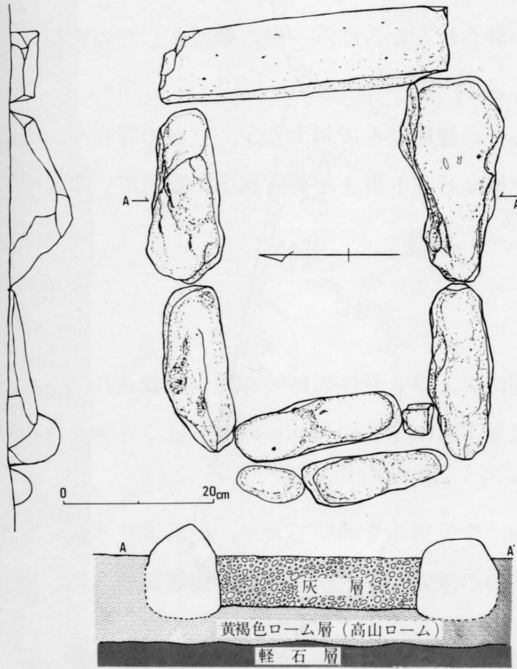
遺物については後に遺物編において詳説するが、いずれにせよ、第1号住居跡の床面上で得られた土器片は典型的な加曾利EⅡ式土器であり、当住居跡が中期後葉の時期に位置することは確実である。ただ、当遺跡の他の遺構において全くこの時期の遺物が出土していない点、中期の集落形態を考える上で一つの問題点として残されよう。

2. 第2号住居跡 (挿図9)

第2号住居跡は、第1号住居跡から道路を隔てて東方15mの、ツルネ遺跡では最も小高い部分に位置し、4.4×4.2mの隅丸方形に近いプランである。柱穴は主柱4本、東西と南の3ヶ所に支柱穴3本が検出され、北東隅にも浅いピットが1ヶ所存在する。4本の主柱穴は、46～50cmのまっすぐに掘り込まれた深いものであるのに対し、3本の支柱穴はそれぞれP539cm、P67cm、P712cmと変化を持ち、P5からは数点の剥片も出土した。

炉は石組みを伴わない長径70cm、短径60cmの地床炉として住居跡中央部に浅く掘り込まれている。厚さ8cmの炭混じりの焼土が観察された。

第2号住居跡は、北側で大きなピットをはさんで第4号住居跡と接し、南方においては第3号住居跡と切り合いを見せている。床面のレベルは、第3号住居跡とは約5cmの高低差を示すのに対し、第4号住居跡とは同レベルを保ち、両者の切り合いによって少量の遺物の混合をみる。第4号住居跡にくい込む形で存在する大きなピットは、径120×90cm、深さ94cmで、2重構造をもち、上部及び深部に多量の土器片を包含していた。上部の土器は第4号住居跡に所



挿図8 第1号住居跡 石囲炉実測図

属するものであったが、深部のものは第2号住居跡に同一個体をみるものであって、その所属性が明確となった。

層位は第1層黒褐色土層、第2層褐色流れ込み土層、第3層茶褐色ローム層（町方ローム）で、住居跡は第3層に約24cm切り込んで作られている。第1号住居跡に比べると、第1層と2層との間に白色の安山岩礫を含む風化土層が見られず、住居跡床面までの深度が浅い事に気付くが、これは天井部からの流れ込みがここまで及ばなかったものと考えられよう。

遺物は石器総数84点、土器は完形1、復元2、大破片1、破片300点以上の多きに達し、この他に立石、少量の植物炭化物がある。石器の内容は打製石斧、石鏃、石錐、削器、磨石、石錘、凹石、接合個体を含む剥片、石核である。土器は時間差を示すものとしての層位的に区分できる積極的な差異は特に認め得なかったが、住居跡覆土中に包含された、縄文と竹管を主体とした関西系の土器群と、床面出土の隆起文で構成される勝坂式比定の土器、そして恐らくはそれに付随するであろう、住居跡外の大ピット内に包含された平出3A式の土器等に、系統的な型式分類を与えることができる。

立石について触れるならば、第1層黒褐色土層において表土面から24cmの深さでその頭端を現わした、流紋岩節理の柱状石は、やや南方に70度の角度で傾きをみせながら床面まで続き、結局長さ37cm、巾4.5cm、厚さ3.8cmの立石が、住居跡の柱穴に接して下端は僅かに床面にめり込んで、立ったままの状態出土した。住居跡内におけるこの様な立石の存在は、長野県方面の遺跡にも類例を見るようであるが、推測が許されるならば、一種の祭壇としての性格を有したものであると考えるのが妥当であろうか。

第2号住居跡は、土器の出土量においても他の住居跡を凌駕するが、立石の存在や、床面に、集積した接合する剥片の検出、そして第1、第2ピット群をその所属下に置いている点等に、特色を見ることが出来よう。

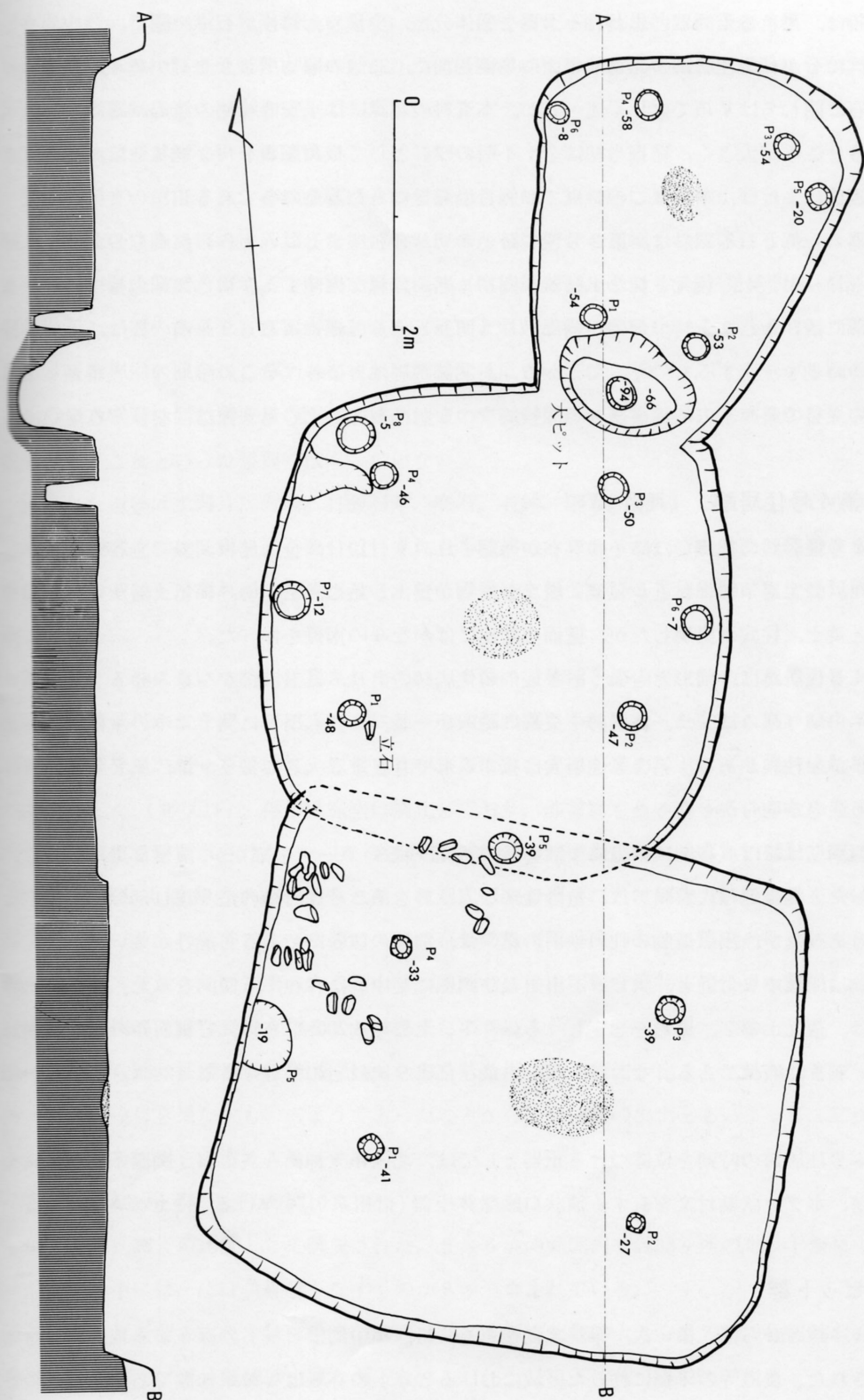
3. 第3号住居跡（挿図9）

第2号住居跡がほぼその全容を現わすと同時に、第3号住居跡の存在が確認され、9月17日この区域の全面発掘に移った。その結果、表層下21cmで4.4×4.8mの方形にくっきりと黒色土の輪郭があらわれ、更に19cmで床面に至った。

柱穴は4本で、深さ27～41cm、径16～25cm、やや角味を帯びており、内部より木炭片が出土した。西側の壁面中央部にも径59cm、深さ19cmの浅いピットが存在し、住居跡の入口の方向を示唆している。

炉は95×70cmの地床炉で、石組を伴わない。床面には多量の木炭片がみられた事から、火災にあった可能性も考えられよう。

插图 9 第 2・3・4 号住居跡実測図



遺物は、黒色の土師器と思われる土器一個体分と、少量の土器片、石鏃、削器、剥片、そして3群に分かれて住居跡の北東隅床面に集積された、25個の編物用おもり石がある。編物用おもり石に関してはⅤ項で詳しく述べるが、本資料の認識には平安博物館の渡辺誠講師の御教示によるところが大きく、発掘当初は全く不明の礫群として扱わざるを得ない状態にあった。また渡辺氏によれば、本例はこの時点で39例目の発見にあたるこの事である。

土器の一部と石器類には、第2号住居跡との切り合いによる混入とみられるものがある(挿図30-11~14)が、復元された土師器(同10)と、口縁が内傾する赤褐色無文土器(同8)及び頸部に浅い籐状文を持つ土器口縁部破片(同9)そして編物用おもり石の一群は、第3号住居跡の時期を決定するものとみてよかろう。北部飛騨地方におけるこの時期の住居跡としては最初の発見であり、方形周溝墓との間接的なつながりと共にその重要性ははかり知れない。

4. 第4号住居跡 (挿図9)

第2号住居跡の完掘でほぼその存在が確認され、9月19日の全面発掘調査で全容が明らかとなった。表土層下20cm付近から既に続々と遺物が出土し始め、第一層黒褐色土層から約50cmで床面と焼土、柱穴が出現したが、壁面の検出にはかなりの困難を伴った。

第4号住居跡は、扇形とも云うべき変形の住居跡であり、北方に広がりを見せる。茶褐色ロームへの切り込みは25cm、住居跡中央部に地床炉一基、これも扇形に開く4本の支柱穴と、2本の小さな柱穴がある。第2号住居穴に接する形で存在する大きなピットは、第2号住居跡に属することが明らかとなった。

東西両壁はほぼ直線的に南方にすばまり、北壁はゆるいカーブを描くが、南壁部分は確認しえなかった。発掘過程においては、その変形な有り方を第2号住居跡の造り出し部分と解釈する意見もあったが、出土遺物の比較検討の結果は、別個の住居跡である可能性が強い。

遺物は床面中央付近と、大ピット直上及び内部に集中的に存在する傾向をみた。出土遺物の内容は、復元土器2、原形を想定しうる破片1、土器片約200点、石鏃、打製石斧、削器、磨石、石錐、剥片、石核である。なお、大ピット最深部より流紋岩の節理片2本(28cm、26cm)が出土した。

第4号住居跡の時期を位置づける土器としては、北陸系天神山A式土器、関西系船元Ⅲ式土器及び、ボタン状貼付文を有する波状口縁深鉢土器(信州系?)を挙げることができる。

5. ピット群

ツルネ遺跡からは、第一次、第二次発掘を通じて、集中的にピットの存在する地点が3ヶ所確認された。農道等の未掘に終わった区域におけるピットの存在はなお未知数であり、個々のピ

ット群の面的な広がりには推測の域を出ないが、一応この3ヶ所に集約され得る。

なおピット群には焼土を伴うものもあり、住居跡の柱穴も含まれていると思われるが、プランを確認するには至らなかった。

①. 第1ピット群 (挿図10)

第1次調査の第Ⅲトレンチ拡張区において確認された、30ヶ所に及ぶ大小のピットを包括する。8月5日以降発掘の進められた第Ⅲトレンチからは何らの遺構も検出されなかったが、18日の壁面測量段階において、3区第2層最深部より石錘・剥片を伴うP7が発見され、東部へ拡張を行った。その結果6×5mに集約される範囲より、少量の土器片・石器等を伴って群集する30ヶ所のピットが出現した。各ピットの相関関係については、P1、P2、P3、P4がそれぞれ近似する深さと対称的位置を示し、住居跡の柱穴の可能性をみせているが、その他のピットは比較的浅く、これといった規則性はない。

出土した遺物は土器片、石鏃、打製石斧、磨石、石錘、削器、剥片、石核で、土器片は無文の深鉢土器破片(18×14cm)を除いていずれも小破片のみであった。時期的には隣接する第1号住居跡の遺物とは明らかに相違をみせ、むしろ道路を隔てた第2号住居跡に、より類似性を示している。

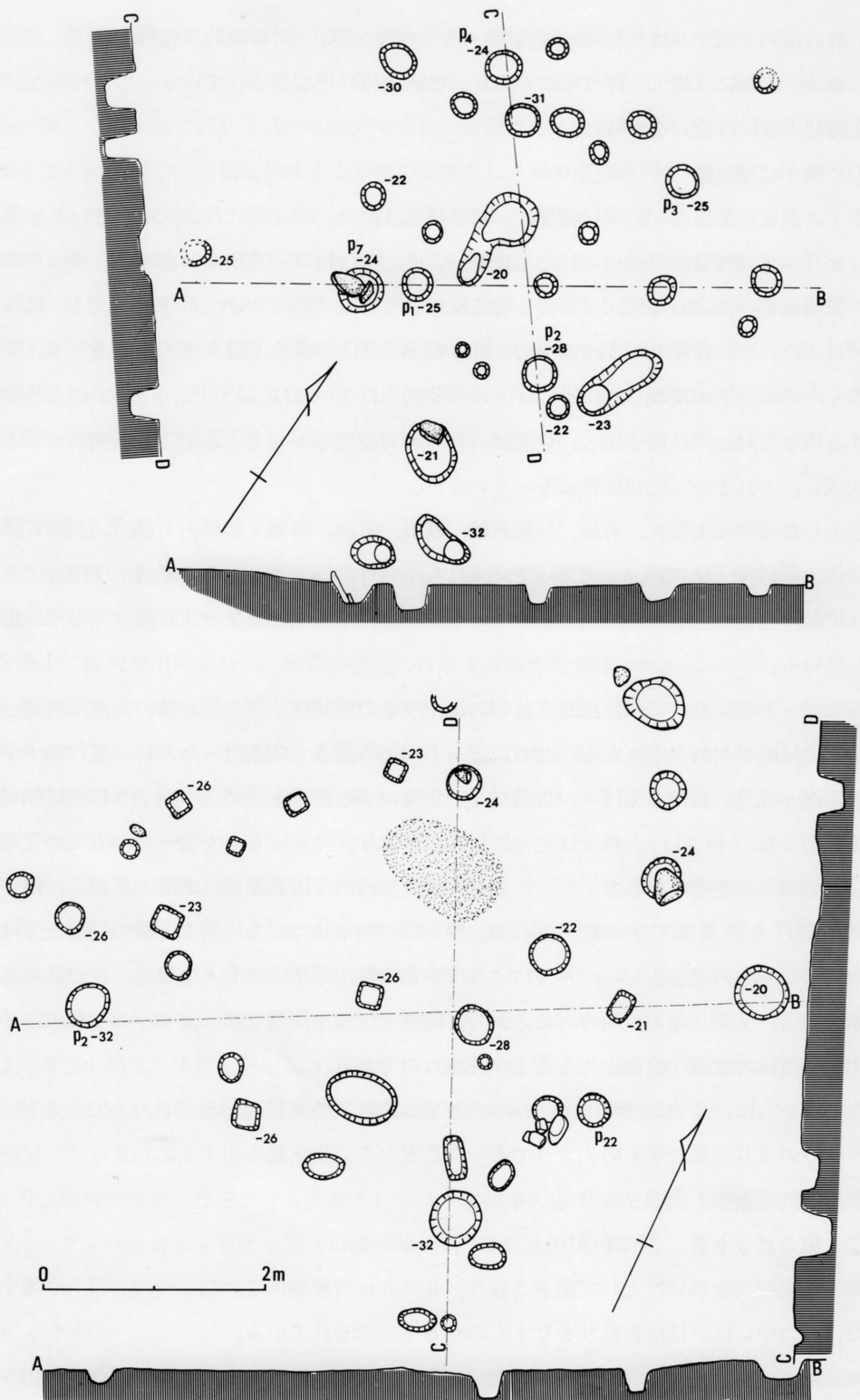
第1ピット群において特に注目されたのは、多量の植物種子等の炭化物の出土である。P1発見時までは気付かれなかったが、22日にピット内部の掘さくに当たった北村、橋戸両中学生からドングリ発見の報せを受けて、以後ワリバシ等による発掘を進め、ドングリ様の植物種子数点を検出した。(挿図11)。種子は完全に炭化しており、非常にもろくなっているため発掘にはかなりの慎重さが要求された。一方、京都平安博物館の渡辺誠講師に來高を依頼し、既に掘り上げた土にも再調査の手が加えられた。渡辺氏の到着後ただちに調査方法の指導を受け、以降全てのピット内の土をビニール袋に入れて京都の粉川昭平氏のもとに鑑定のため送られた。その結果は、V章3項で説明のあるとおり、現地では検出困難な植物皮や小さな種子、子葉等炭化植物遺体の貴重な資料を得ることが出来たのである。

なおP7からは、長径33cm、短径21cmの形をした板状の流紋岩が出土し、あたかもピットを被う蓋石の役目を果たすものようであったことから、炭化物の出土とあいまって、ピット群の貯蔵穴的な性格を色濃くみせている。

② 第2ピット群 (挿図10)

第二次発掘調査の15区として調査された、6×6mの範囲内で計33ヶ所のピットが集中していた。この中には、ほぼ角柱状をなすものが8ヶ所含まれている。

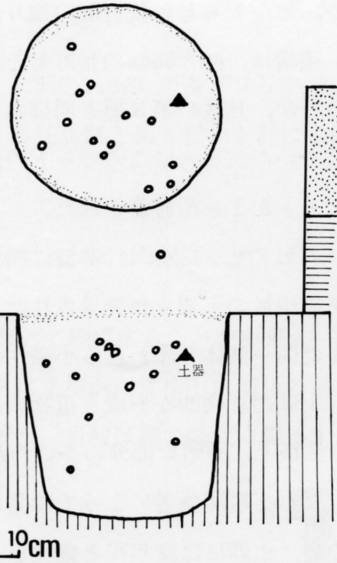
焼土は2ヶ所認められ、特に中央のものは95×75cmの比較的大きなもので、住居跡の存在が考えられるが、プラン確認は出来なかった。



挿図10 第1ピット群及び第2ピット群実測図

出土遺物はいずれも縄文中期とみなされるものであるが、角柱の存在は第3号住居跡との関連において注目される。

遺物の内容は、復元土器1，復元可能土器1，破片20，石鏃，石錘，削器，打製石斧，磨石，剥片，玉製品である。復元可能な土器は，P₂内より一括して出土した縄文のみの大型壺で，特殊な形態を持ち所属時期に問題がある。また復元された土器は，P₂の近くから出土した胴部がくびれる波状口縁深鉢土器で，信州の平出3 A式土器に比定される。この土器から90cm離れた同レベルで異形垂玉1点が発見された。植物種子炭化物も少量出土している。



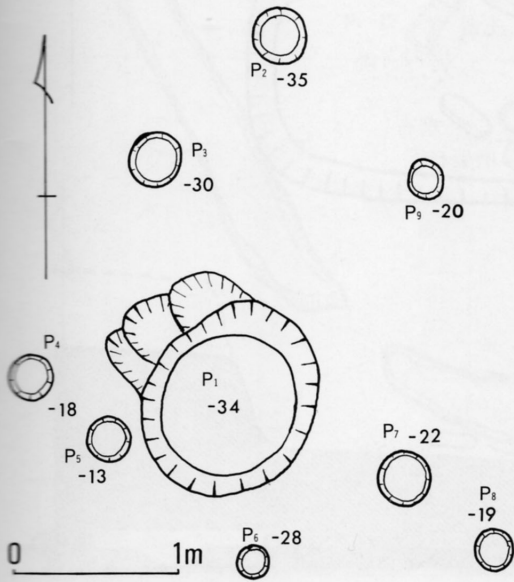
挿図11 第1ピット群 P₁内の炭化物出土状況

③. 第3ピット群 (挿図12)

第4号住居跡の北方延長上のグリッドより発見された，小規模のピット群である。直径120cmの大きなP₁を中心に8ヶ所の小ピットがこれを囲むように並び，住居跡の可能性もあるが，時間的な制約上これ以上の追求が出来なかった。

遺物はP₁から土器大破片1と磨製石斧破片1，石錘1が出土した。土器は北陸新崎式土器に類似を見る，本遺跡では最も古い部分に位置する土器である。

またP₂から採取された土壌は，粉川氏に依頼した鑑定の結果，他のピットでは検出されなかった種類の植物炭化物を含んでおり，当時の植物食を類推する上で貴重な成果を挙げることが出来た点は特筆すべきである。



挿図12 第3ピット群

6. B区南方方形土壇 (挿図13)

9月26日をもってツルネ遺跡の発掘調査は終了し，同時に待機していた土地改良工事のブルドーザーが作業を開始した。

10月2日，工事関係者からの連絡によりB区の第3号住居跡から南方へ約10m下った畑の斜面より，遺物が発見された事が明らかとなった。遺物が出土したと思われる付近はほとんど原形をとどめてはいなかった

が、ピットらしい長方形の掘り込みが僅かに認められたため、調査を行った。

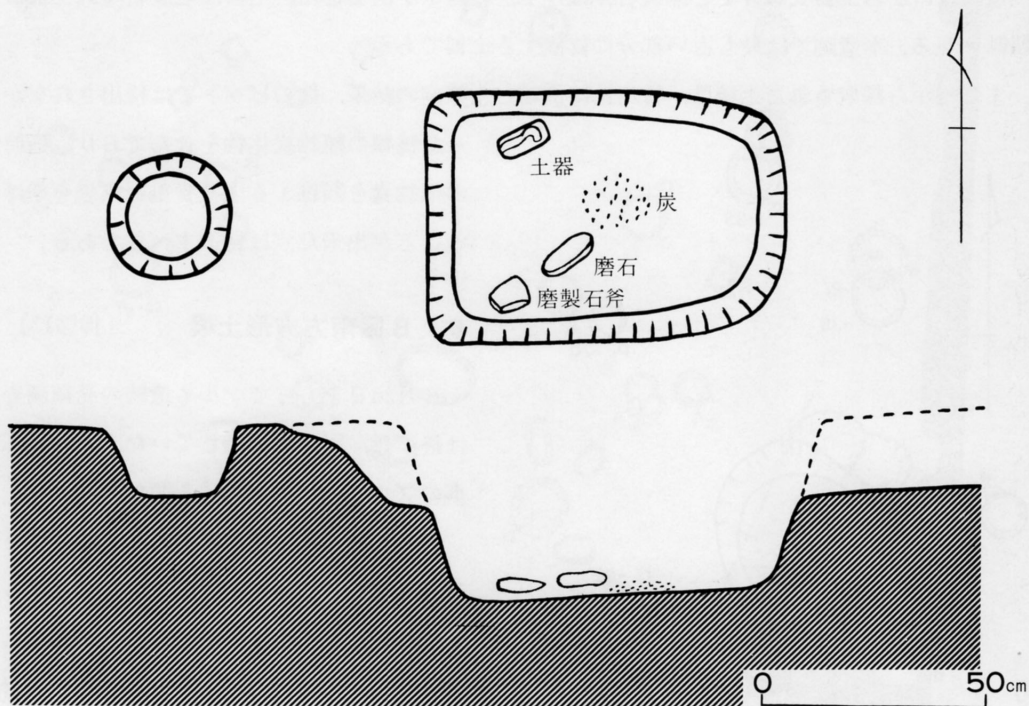
遺構は、80×55cmの長方形をなし、2隅のみやや丸味をおびる。表層からの深度は不明であったが、B区の第3層と同様の茶褐色ローム層に22cm掘り込まれ、黒褐色の土壌がこれを満たしていた。さらにこのピットの西側50cmの部分に、40cmの段差でもって径28cm、深さ16cmの小ピットが1ヶ所確認された。

方形のピット内では、基盤に接して磨製石斧1、敲石1、土器口縁部破片1が並んで出土し、更に少量の土器片が発見された。土器口縁部はキャリパー状で、レリーフ様の渦巻文を持ち、また同一個体と思われる小破片の裏面には彩朱がみられる。

土壌の意図的な形成と遺物のあり方の特殊性から類推して、墓壇である可能性が強いが、調査の性格上、不明な部分の多いのが惜まれる。

なお工事関係者によって採集された遺物は、土器片約80片、石錐、玦状耳飾片、剝片、石皿片で、土器には隆起線と縄文を主体とする船元式や勝坂式のものが見られる。

いずれにせよこの地点における遺物・遺構の存在は、調査時においては全く想像もつかず、事前のボーリング調査においても死角となっていた部分であった。完全に調査されていた場合の成果を考えると、深く悔やまれる次第である。



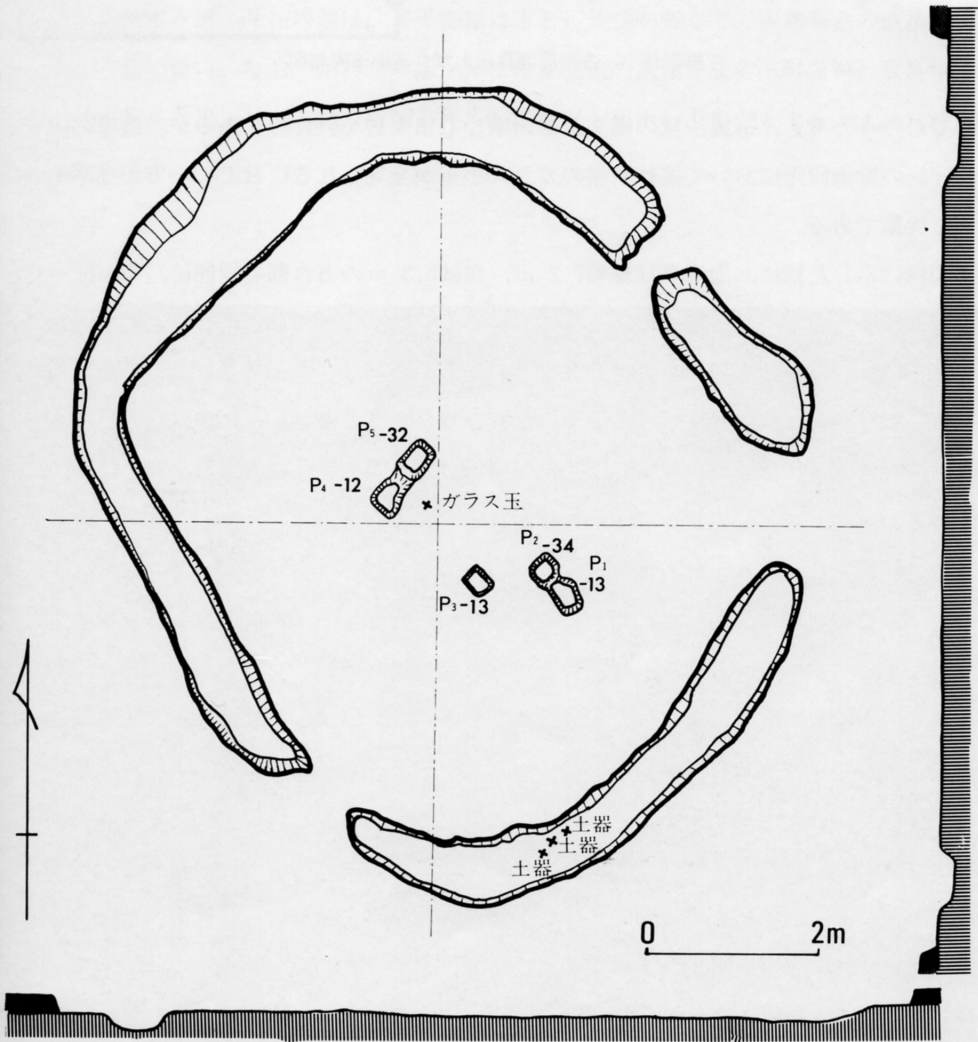
挿図13 方形土壇実測図

7. その他

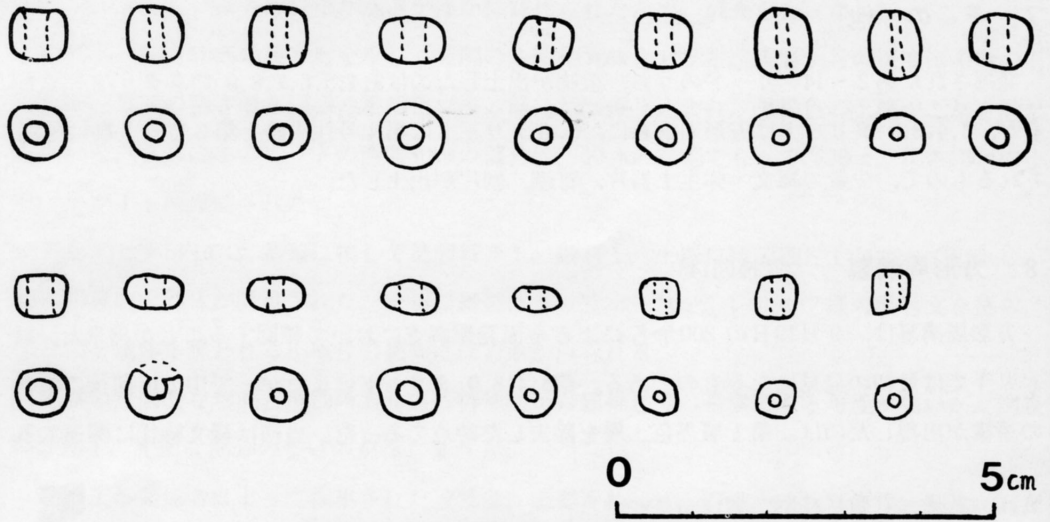
発掘された第2～14グリッドのうち、遺物が出土したのは3,4,5,6,7,8,9の各グリッドであるが、3,4,8,9グリッドは方形周溝墓に、5,6グリッドは第4号住居跡と第3ピット群に包括されるもので、少量の縄文・弥生土器片、石鏃、剥片が出土した。

8. 方形周溝墓 (挿図14)

方形周溝墓は、9月19日の200余名による全面発掘調査において確認することが出来た、岐阜県下では最初の発見になるものである。第3,4,8,9グリッドにまたがって巾1m前後の溝状の遺構が出現したのは、第1層黒色土層を除去した時点であった。当初は縄文時代に関連する



挿図14 方形周溝墓実測図



挿図15 方形周溝墓出土ガラス小玉実測図

遺構であろうと考え、事実少量の縄文土器の破片も出土していたのであるが、遺構の中央部セクションの除去段階において連結状態のガラス小玉が発見されるに及んで、方形周溝墓と確認できた次第である。

挿図14に示した様に、周溝墓は長軸7.2 m、短軸6.3 mの方台部の周囲に、巾0.6 ~ 1.3 mの周溝が巡り、北部周溝が最も巾広がっている。また東部、南部及び北東部の3ヶ所に、ブリッジと呼称される掘り残し部分が存在する。周溝の断面はU字形を呈し、茶褐色土層（町方ローム）に20cm掘り込まれている。周溝内を覆う黒色土は方台部からの流れ込みによるものと思われ、方台部には僅かながら盛り上りが観察された。調査終了時の地質調査では、方台部基盤下は町方ロームが60cm続き、高山ローム層に移行する。

土壌は検出されなかったが、方台部中央に5ヶ所の方形ピット（P₁40×30cm, P₂30×30cm, P₃34×26cm, P₄34×44cm, P₅39×40cm）が存在し、P₂内部より3点の無文土器片が出土した。ガラス小玉の出土状態からみて、この付近が埋葬施設の基底部であったと想定されるが、土壌の規模や、方形ピットの性格については不明である。また周溝の発掘過程で、東南隅周溝内に一部焼土と炭片が観察された。

遺物は、方台部中央基盤上からのガラス小玉群、東南周溝基底（表土より-57cm）より弥生後期土器片4点、P₂内より砂粒を含む暗灰色無文の粗製土器3点、及び黒色土層内に含まれていた土器片である。その内容は第3グリッド26点（うち縄文4点）、第4グリッド7点、第8グリッド4点、第4と第9グリッドの中間4点、第9グリッド9点で、縄文土器以外はいずれも薄手の暗灰色無文土器であり、一部口唇に刻目を伴うもの、ススの付着のみられるもの等がある。周溝内で得られた弥生式土器は、3孔を有する高杯脚部（挿図30-17）と、楡描波状文を持ち

1孔を有する頸部破片(同16)、及び所属時期不明の沈線文土器(同15)である。量的にも少ない資料であるためその性格は把握し難いが、強いていえば16は箱清水式土器に対比され得よう。ガラス小玉は濃いルリ色を呈し、直径5～8mmの大小をみせる完形品16個、破片2個体分が出土した。(挿図15)。巻頭写真に示したような連結状態で出土し、地表下わずか24cmの位置で、耕作等の攪乱も受けずに千数百年を経過してきた事実、少なからず驚かされる。

このように方形周溝墓は、3ヶ所に陸橋部をもつ3隅切断型であり、明瞭な盛土は観察されなかったが、ガラス小玉の出土位置から推測して、ある程度の盛土がなされていたものが流出したか、あるいは、畑地に開墾される際に平面化されたのではないかと考えるのが妥当であろう。方形周溝墓がツルネの舌状の丘陵上に他にまだ存在するかどうかについては、地形を見る限り考えられず、ただ一基のみの存在と思われる。また周溝墓を営んだ集落については全く不明であり、隣接する第3号住居跡は、若干時期は下る可能性が強くて、周溝墓との直接の関連は今のところ認め難い。なお、昭和30年頃ツルネ台地東南の水田(江名子町塩谷)改良作業中に、木の柱が何本も出土し、石鏃、磨製石斧、石剣などが出土した事例があり、大いに注目される場所である。



写真2 B区遺構作業風景

V. 遺 物

1. 石 器

磨製石斧 (挿図16~1-6 図版16)

磨製石斧は4点出土した。いずれも欠損しているが定角式である。3は方形土壌内部より敲石・土器片と共に出土した。蛇紋岩の未製品に近いものである。4は第1号住居跡出土。5はB区北方の試掘溝から単独で出土した。6は第3ピット群P1内部より出土した小型の頭部破片である。なお、1・2は昭和20年代に、土地所有者白川義則氏によって発見されたものであり、2の側面には顕著な擦切手法が観察される。

打製石斧 (挿図17-1~8 図版17)

総数11点で、内訳は撥形2点、短冊形に近いもの8点、分銅形?1点である。石質は、1の玄武岩、3の緑色片岩以外はいずれも流紋岩が使用され、1・8はb面に原礫面を残している。全体に風化、磨耗の度合が進んでおり、剝離痕はあまり明確でない。

削器類 (挿図18-1~18 同 -44~53 図版18)

34点出土した削器は、その形態・機能からいくつかに分類できる。

- イ. 剥片の一辺に直線上のリタッチを加えて刃部を作出したもの (1.2.37)
- ロ. 剥片の周辺に刃部をもつもの (5.6.8.9.10.16)
- ハ. 剥片の一部に機能部を有するもの (4.11.12.13.15.51.52.53)
- ニ. 剥片の一部にくちばし状の機能部を作出したもの (17.18)
- ホ. 小型の周辺加工品 (44.45.46)
- ヘ. 小型の一部加工品 (48.49.50)
- ト. その他 (14)

イには両刃、直線刃、内彎刃、外彎刃等の変化をみせるものがある。ハはノッチド・スクレイパーを含み、ホは小型の搔器であろう。なおトの14は、彫器様の形態を有している。本遺跡からは石匙の出土は全く見られなかったが、それに代わるものとしてこれらの削器類がその機能に応じて使用されたのであろうか。石材は主に黒雲母石英安山岩(湯ヶ峯石)が用いられているが、6~12, 13, 15~17はチャート, 10は頁岩, 11は玉髓である。また黒曜石製の小型の搔器(44~46)が比較的まとまっているが、石材の稀少性も関連しているのではなかろうか。

石 鏃 (挿図19-1~36 図版19)

総数42点で、内訳は有柄鏃1点、柳葉鏃4点、三角鏃5点、無柄挟入鏃32点である。石材は

黒曜石製が5点、チャート製2点で、他は全て湯ヶ峯石である。9はナイフ様の石器とも考えられ、また20は未製品であろう。なお1.5.10.12.17は第1号住居跡、8.20.25.27.31は第2号住居跡、29は第3号住居跡、21.22.28.33・36は第4号住居跡内出土である。他は各ピット群・グリッド及び表土層から出土した。

石 錐 (挿図19-37~43 図版19)

石錐は7点で、いずれもつまみを有するかそれに近い形態である。43のみチャート製で他は湯ヶ峯石製である。37は第4号住居跡、38.39.40.42は第2号住居跡内から出土した。特に42は、フレークの集積の中から、作成されたばかりの状態で見つされた。

玉製品 (挿図21-16.17 図版20.21)

縄文時代の玉製品としては2点が挙げられる。16は、方形土壇周辺において工事関係者によって採集されたもので、恐らくは扁平大型の塊状耳飾の半欠品であろう。全面とも良く研磨され、a面の3ヶ所に補修の為と思われるせん孔の跡が見られ、側縁は刃のように作られている。石材は白色の蛇紋岩である。17は、第2ピット群東端より、挿図30-1の土器と共に出土した黒形玉製品である。淡緑色半透明の石材を用いてほぼ円筒の棒状に研磨し、頭部は握りこぶし形で、図の下端の横方向のせん孔部から折損している。恐らく棒状に長い垂玉であろうが、あまり類例をみない遺物である。

石 錘 (挿図20-8~20 図版22)

14点出土した石錘は、全て流紋岩円礫の両端を打ち欠いた打製石錘である。重量は図内に示したが、平均重量は27.3g。13は第1ピット群P1内より炭化植物種子と共に、16は第3ピット群P1内より出土した。

第1表 ツルネ遺跡出土石器一覧表

遺物名	第1号住居跡	第2号住居跡	第3号住居跡	第4号住居跡	第1ピット群	第2ピット群	第3ピット群	方形土壇	その他	計
石 錐	6	8	1	5	8	3			11	42
石 錐		4		2		1		1		7
磨製石斧	1						1	1	1	4
打製石斧	1	1		2	3	3			1	11
磨石	2	4		2	3	1		1	1	14
凹石	1	5								6
敲石	2	1								3
石皿	1							1		2
石錘	1	4			5		1		3	14
玉製品						1		1		2
砥石		1				1			1	3
削器		5	3	9	10	4		1	2	34
剥片	3	39	1	8	6	7				64
石核	2	12		2	2	3				21
編物用おもり石			25							25
石棒?					1					1

凹石 (挿図22-2~6 図版23)

6点の出土をみた。2は安山岩円礫の両面に凹みを有するもの、4は片面のみ、3.5 長楕円形の礫の片面のみに2~4ヶ所の凹みを持つもの、6は玄武岩角礫の片面に1ヶ所の凹みをもつなど、多少の変化をみせている。いずれも飛驒地方で一般的にみられる形態であり、また2は滑らかな凹みを有する。

敲石 (挿図22-7, 同 -1 図版23)

4点のうち2点を図示した。7は折損しているが、角柱状の流紋岩礫先端部に使用の痕跡がある。1は安山岩円礫の上下端に敲打痕を残し、重量130gのハンマーストーンである。

磨石 (挿図22-7~12 図版23)

磨石は14点と比較的多量に出土した。主なもの6点を図示したが、12×8cmが平均的な大きさで、片面のみがつるつるに磨滅している。第1号住居跡から2点、第2号住居跡は4点、第4号住居跡は2点がそれぞれ出土した。石材は安山岩の円礫がほとんどであるが、7のみ流紋岩が使用されている。ドングリ類の出土とあいまって、重要な遺物と考えられる。

番号	最大長 cm	最大巾 cm	中央部巾 cm	重量 g	形状	石質	その他	
第1群	1	11.5	9.0	8.5	780	平行四辺形	砂岩	
	2	12.0	7.5	7.0	620	長方形	"	
	3	12.0	5.0	5.0	430	長方形	"	
	4	17.5	6.5	6.5	950	長方形	"	
	5	16.0	6.0	6.0	760	長方形	"	
	6	16.5	7.5	6.5	(650) (310) 960	} 長楕円形	チャート	7と接合 6と接合
	7							
第2群	8	14.0	8.0	7.5	700	長方形	砂岩	
	9	13.0	9.0	9.0	790	楕円形	流紋岩	磨石?
	10	10.0	8.0	7.5	850	方形(中央くびれ)	チャート	
	11	12.0	6.5	6.5	540	長方形(わん曲)	砂岩	
	12	13.0	7.0	7.0	920	長方形		
	13	13.0	6.5	6.5	780	長方形	チャート	
	14	15.0	9.5	9.0	950	楕円形(一端尖る)	砂岩	
	15	14.0	7.0	6.0	750	長方形	"	
	16	17.0	7.0	7.0	750	長方形(一端尖る)	"	
	17	(20.0)	(13.0)	-	(2550)	半分破損	"	無関係?
第3群	18	14.5	6.5	6.0	560	長方形	"	
	19	18.0	8.5	6.0	(440) (560) 1000	} 蝶ネクタイ形	"	
	20							
	21	(8.0)	(6.0)	(6.0)	(210)	長方形(3/4破損)	"	
	22				(160)	-	"	26と接合
	23	14.0	8.0	7.5	880	長方形	"	
	24	13.0	6.0	5.0	740	長方形	"	
	25	14.0	8.0	6.0	580	長方形(一端尖る)	"	
	26	(12.5)	(7.0)	(6.5)	(380) 540	長方形	"	22と接合
27	11.0	5.5	5.5	500	長方形	"		
28	14.0	7.0	6.0	820	長方形	"		
29	12.0	9.5	9.0	1040	方形	チャート		
		完形品の平均最大長 14.1 cm	完形品の平均最大巾 7.3 cm	完形品の平均中央部巾 6.8 cm	17を除く平均重量 765 g			

第2表 第3号住居跡出土編物用おもり石計測表

石皿 (挿図22-13 図版28)

石皿は第1号住居跡出土の破片が1点と、工事中出土の3分の1程度の破片1点の計2点にとどまった。13は安山岩製で7cmの厚さを持ち、縁は2cmの帯状に盛り上っている。推定長径30cm程度であろう。他の1点も安山岩製の、より粗雑な製作である。

これらとは別に、本遺跡からの出土として、昭和10年発行の「飛驒石器時代遺蹟地名表」に記載のある、刻文入石皿完形品が1点確認されている。

砥石

13×10cmの板状の安山岩の一部に研磨痕のあるもの1点と、砂岩製の小さな砥石破片2点の計3点が出土した。

編物用おもり石 (図版27)

第3号住居跡北側角に、3群に分かれる環状に置かれた偏長の河原石群29個は、整理後接合する個体もあって、結局25点の編物用おもり石が7、8、10個の3群に分けられた。内容は別表に掲げたとおりで、石材は砂岩の比率が大きい。また中央部分がややくびれる形のものを用意的に集めた形跡がある。ムシロや炭俵を編むためのおもり石に関しては、最近まで飛驒地方でも用いられていた事が、国府町の民俗館に民俗資料として見る事ができる。この例によれば、8個が1組で使用され、ツルネ遺跡の場合の3群の数の平均値に近い点、また形態的にも近似する点が興味深い。

剥片 (挿図21-1~12 同20-1~7 図版24.25)

剥片は総数64点で、縦長剥片23点、横長剥片11点、その他30点。石材はほとんどが湯ヶ峯石である(2、12は黒曜石)。剥片の中には使用の痕跡をもつものがあり(1.4.6)それ自体石器として用いられた事を示している。挿図20の1~7は、第2号住居跡床面から一括して出土した剥片の接合を示す資料である。1は3点、2~5、7は2点、6は5点の剥片が接合する。石材は全て漆黒に近い良質の湯ヶ峯石で、他地区の剥片に比して風化の度合も少なく、縁辺も鋭利で良好な保存状態を示す。剥離方法は、2.4.7の如く、平坦なプラットホームから比較的規則正しく剥離している例と、1.3.6の様に盛んに打面転移を行ってフリーに剥片を取っているものが見られる。なおこれらの剥片に混って完形の石錐が1点出土していることから、石鏝や石錐を作製する素材として剥取された意図をみる事が出来よう。

石核 (挿図21-13~15 図版26)

剥片を剥取した後の残核が計21点出土した。やはり湯ヶ峯石がほとんどで、14のみ黒曜石である。ある程度打面を整えている例(14、15)と、全く自由に剥片を取りつくした例(13)とがある。

石冠状置石 (図版31)

第1号住居跡床面のP₃に接して置かれていた、石冠様の形態をもつ安山岩自然石で、底部に敲打痕が観察される。高さ17cm、最大長径17cm、短径14cmで、第2号住居跡内の立石と同様に住居跡内におけるこれらの遺構の存在が何らかの意味を持つものである事は確かであろう。

石 棒? (図版30)

工事終了後、A地区表面より採集された、大型石棒頭部と思われる遺物である。高さ21cm、長径19cmの流紋岩製である。

銅 銭

第1トレンチ5区表土層より銅銭破片1個(宣和通寶 宋徽宗 宣和元年1119年)が出土している。後世の混入であろう。



写真3 B区遺構

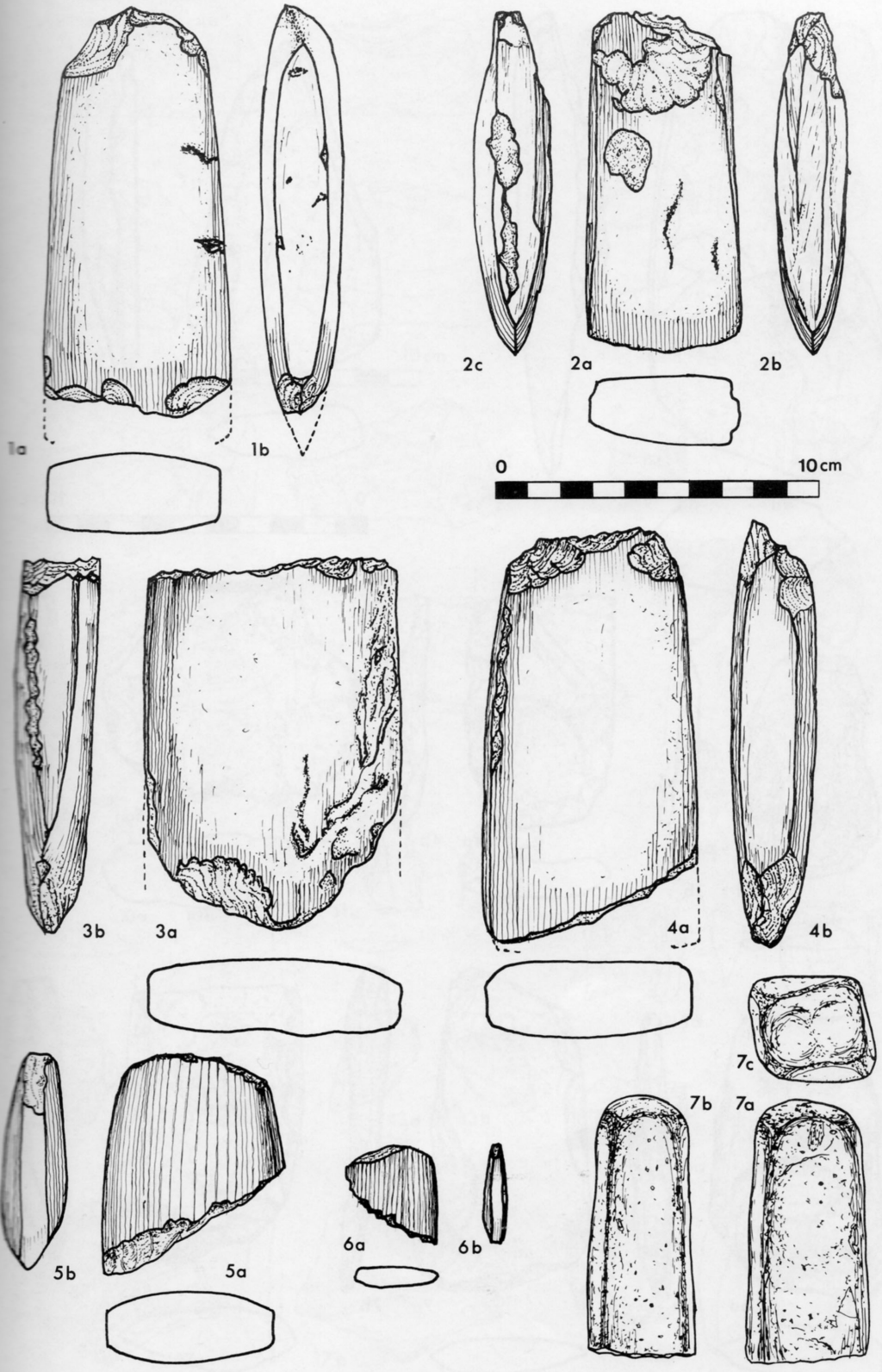
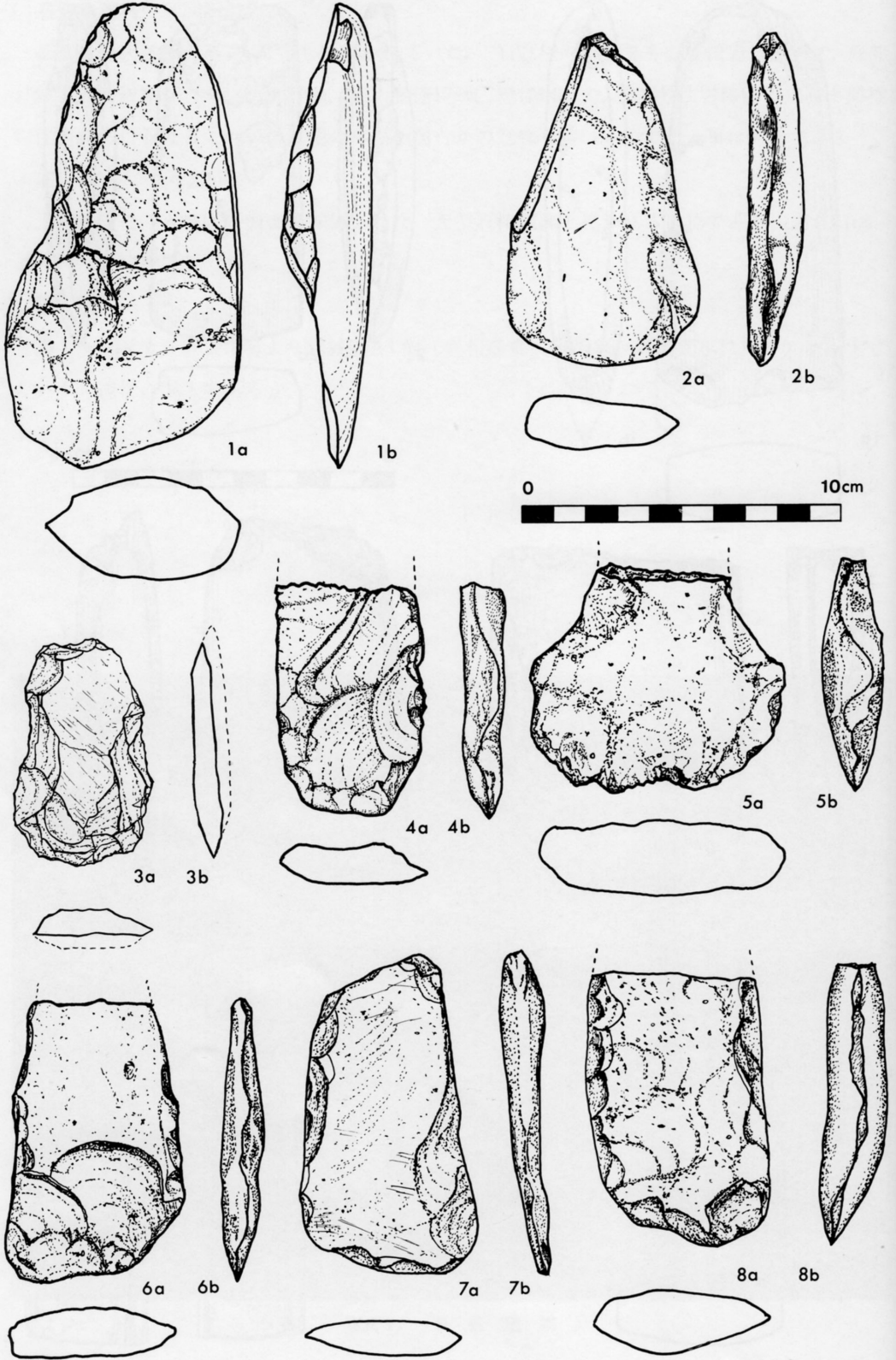


插图17 打製石斧尖測圖



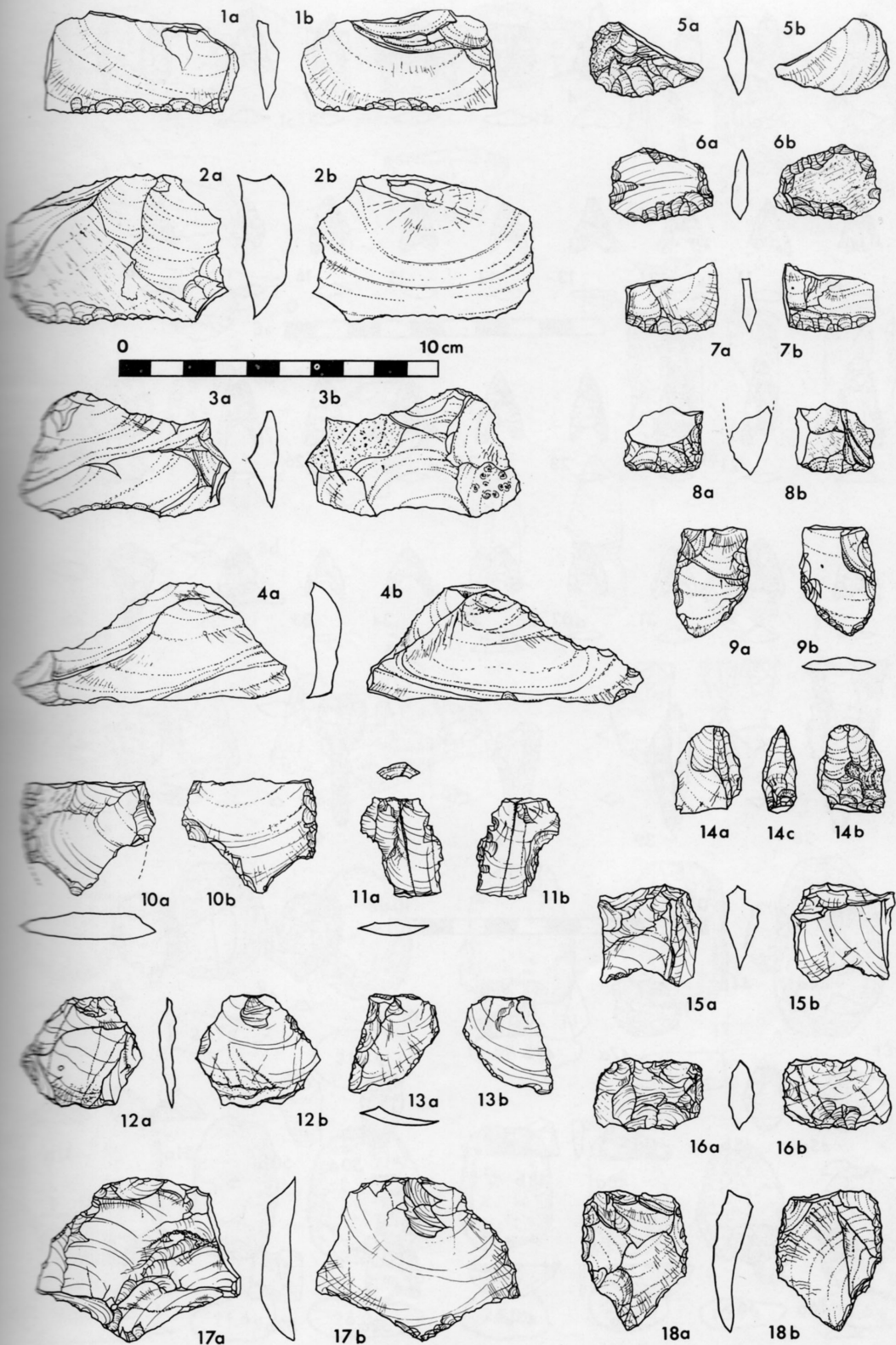
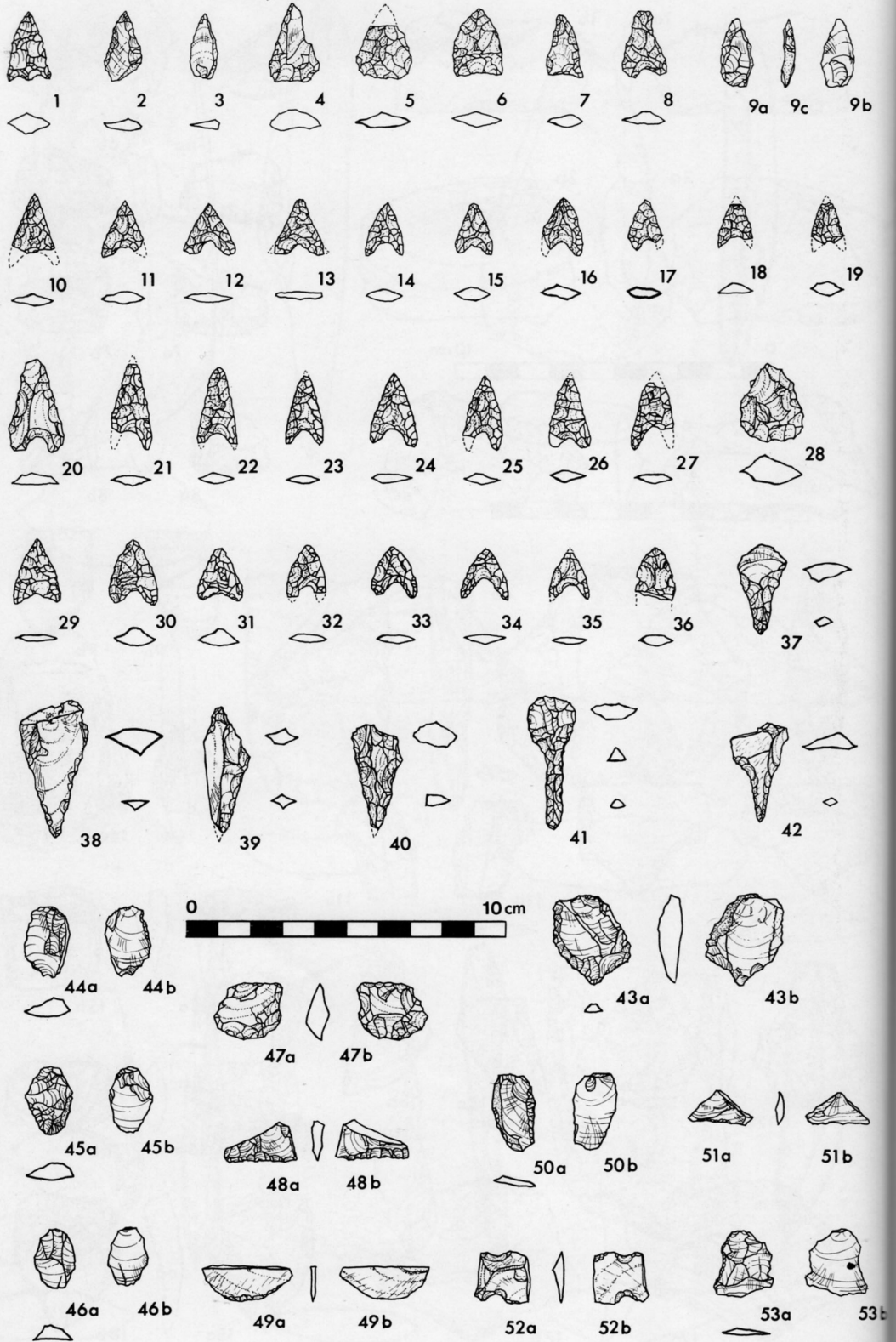


插图19 石鏃, 石錐實測圖



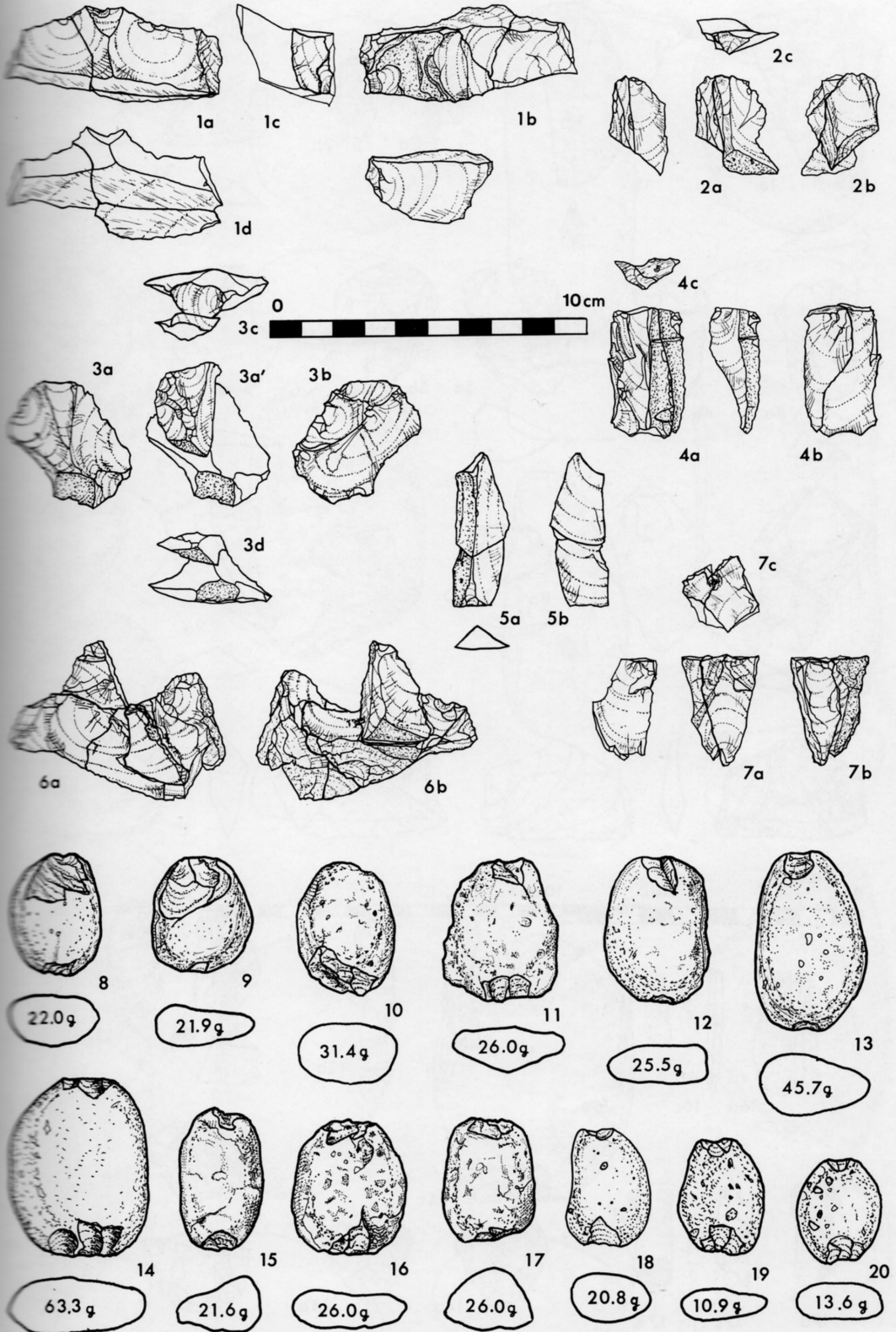


插图21 剥片，玦状耳饰，异形垂玉实测图

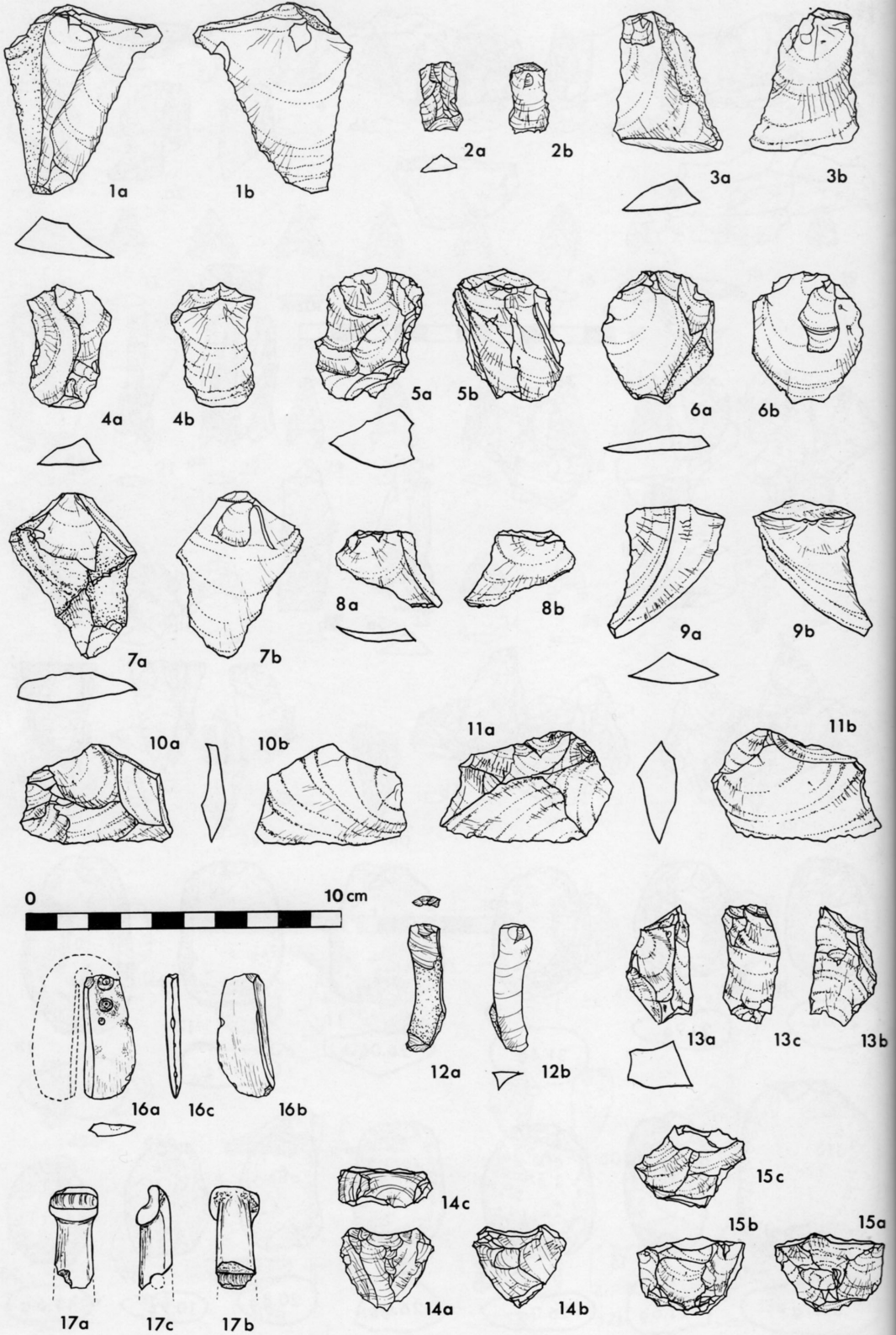
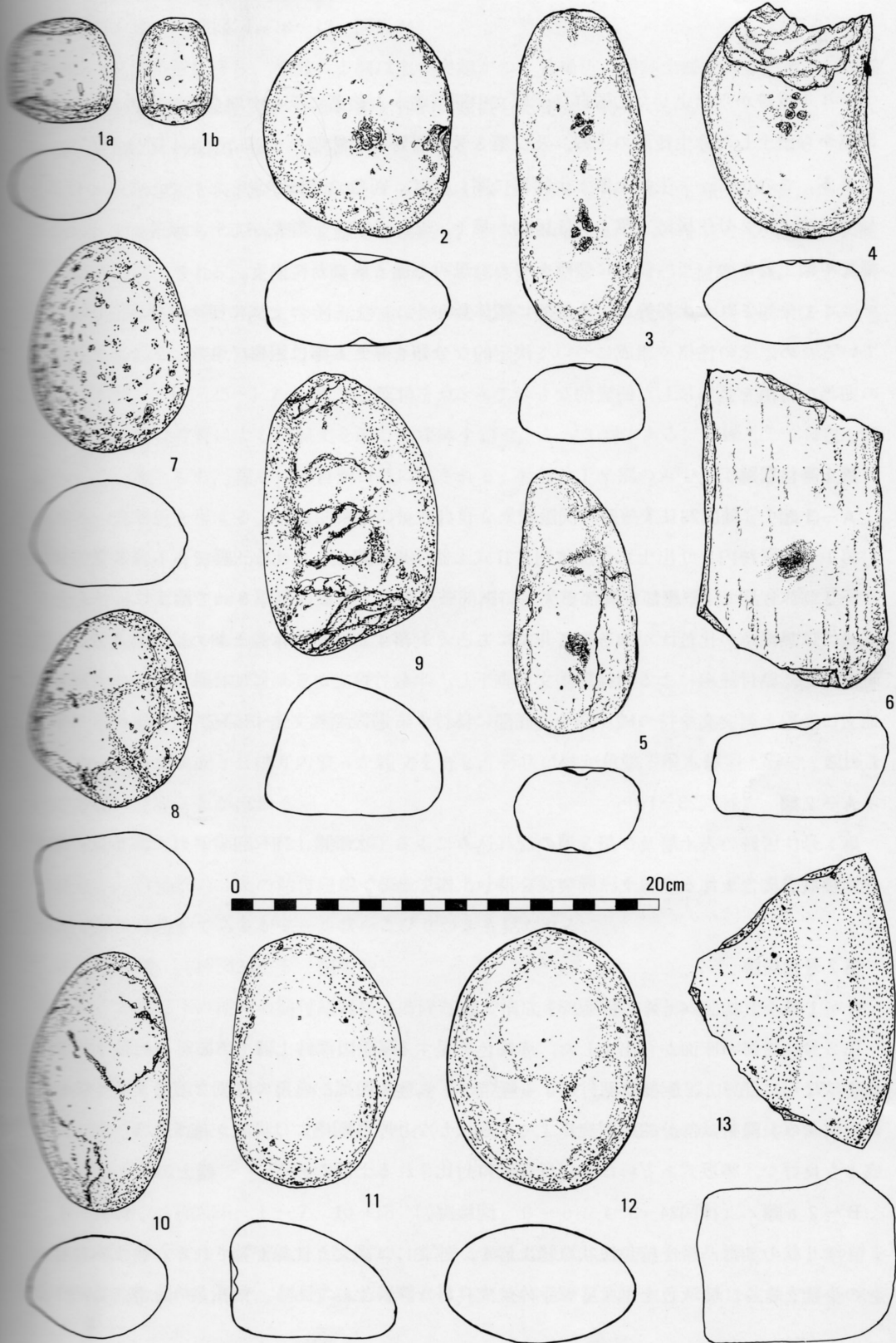


圖22 凹石，磨石，敲石，石皿實測圖



2. 土 器

ツルネ遺跡から出土した土器群は、縄文中期前葉から後葉に至る中期全般のものと、方形周溝墓から出土した弥生後期の土器、及び第3号住居跡の土師器の3群に大きく区分することができる。このうち、弥生式土器と土師器に関しては、別項で既に詳説したので、ここでは第1号住居跡、第2号住居跡、第4号住居跡、第1、2、3ピット群及び方形土壇等から出土した縄文中期土器について、個々に分類を与え、説明を加えることにする。

ここで分類された土器群は、一般的に個体数が少ない上、その文様に種々の要素を併せ持っているため、その性格や組成について決定的な分類を与える事は困難であり、あくまで施文上の顕著な特徴を基準にした便宜的なものである点を付記しておく。

第1号住居跡

A-1類 (挿図23-1~9 図版32)

第1号住居跡内より出土した加曾利E II式土器の単純組成をみせる一群である。数量的には2~3個体程度で、口縁部・底部を欠き、胴部破片のみである。器厚9mmで胎土に砂粒を含み器壁には黒褐色の化粧土が施されて非常にもろく剥落する。文様は縦と斜めに沈線を交互に配する間を、貼付紐線による曲線懸垂文が垂下し、半截竹管文がこれに加えられる。また縄文を地文に隆線と刺突文を持つ破片(3)や、底部に移行する過程で無文化する破片(4.6.8)等がみられる。

A-2類 (挿図23-19)

第1号住居跡の表土層及び第3層の流れ込みによる二次堆積土内に包含された、少量の破片で、勝坂式に含まれる隆線文・刺突文を持つ土器である。

第2号住居跡

B-1類 (挿図24-1 図版33)

第2号住居跡の床面から出土した、赤褐色を呈する厚手の深鉢土器である。口縁は平坦で、かまぼこ形に肥厚し、胴部は貼付による隆帯が、渦巻や円弧、三角の区画などをダイナミックに形成する。隆帯は部分的に刺突によって波状となり、区画内には縄文が施される。胎土・焼成とも良好な、勝坂式あるいは井戸尻II式に対比される土器である。

B-2a類 (挿図24-3.4 6~9 図版34)

クサリ状の刻目凸帯を持つ波状口縁土器で、地文には縄文と沈線が施される。胎土内には白色の小礫を含み、暗灰色を呈する厚手の焼成良好な深鉢土器である。信州系の土器であろう。

B-2 b類 (挿図24-10~12 図版34)

同様の刻目凸帯を持ち、平縁に1個以上の突起がつく黄褐色の深鉢土器である。地文は竹管による孤線が配せられ、B-4類の船元II式に類似した要素を持っている。

B-3類 (挿図25-10 図版35)

ボタン状貼付文と波状口縁を特徴とする深鉢土器で、第4号住居跡にも類例をみる。10は、3個の波状突起をもつ口縁部に文様帯を構成し、胴部はゆるくふくらみを見せて、全面にR撚りの縄文が施文される。文様帯は隆線と細かい半截竹管で菱形・半月形に区画され、ボタン状貼付の周囲にも竹管が巡る。半月形内部は斜めの沈線で埋められ、楕形文に近い様相をみせる。全体に暗褐色で、焼成はあまり良くない。

B-4類 (挿図25-1.2.4.9 図版37)

縄文の地文に竹管による孤線文を配した深鉢土器で、2~3個体ある。平縁もしくは部分的に山形の口縁をもち、細かい刻目が口唇に施される。竹管は上半部のみで、下半部は縄文だけになる。黄褐色を呈する、比較的薄手の焼成良好な土器で、関西船元II式に比定される。

B-5 a類 (挿図25-3, 6 図版38)

縄文のみで構成される厚手の深鉢土器である。口縁は平坦で帯状に肥厚し、胎土中に砂礫を含む。焼成は普通であるが熱を受けてもろくなっており、底部(6)内にはタール状のこびりつきが観察される。3個体以上ある。

B-5 b類 (挿図25-5 図版39)

非常に良好な焼成とR撚りの整った縄文を有し、帯状口唇が角張る植木鉢型土器で、類例を沖田遺跡に見ることが出来る。

B-5 c類 (挿図25-12 図版36)

縄文と、口縁部の3条の貼付紐線で構成される小形深鉢の完形土器で、胎土に雲母片を含む。口唇内部には僅かであるがタール状のこびりつきも見られる。

B-5 d類 (挿図24-5 図版39)

縄文と、口縁部下の波状の貼付紐線による隆起線で構成される植木鉢形の土器である。

B-6類 (挿図24-15, 16 図版40)

竹管による沈線で方形に区画された文様をもつ、キャリパー形浅鉢土器口頸部で、灰青色の地肌に白色の長石粒を含む。北陸系天神山(上山田)式に比定されるもので1個体のみである。

大ピット内の土器

B-7類 (挿図26-1~7, 10~13 図版41)

住居跡外の大ピット深部より出土した、平出3類A式土器に比定される一群である。砂粒を含む明褐色の深鉢土器で、刻目の入る隆帯によって文様帯が区画され、口縁は波状で隆線が垂

下し、胴部中央は少しくびれをみせる。上部文様帯は菱形の区画と縦位の沈線・隆起線、下部は懸垂して連なる刻目入隆線で構成され、他は無文である。楕形文の破片(10, 11)も見られる。

B-8類 (挿図26-14, 15 図版42)

同じく大ピット深部より出土した縄文を主体とする土器である。14は口唇上にも縄文が施される。15は平縁で口唇が帯状にふくらむ深鉢土器で、口縁直下に不規則な波状の浮隆線・沈線が巡り、R捩りの縄文が施された胴部はゆるやかにカーブを描いて、底部に至りわずかに張り出しをみせる。

その他の土器 (図版40)

口縁に2条の竹管文が施される土器(挿図24-13, 14)や、裏面に彩朱のある無文土器(大ピット内)、櫛状工具による沈線土器(挿図26-8)等の断片的資料である。

第4号住居跡

C-1類 (挿図27-1~6 図版44, 45)

天神山A式土器の良好な資料の一群を一括した。個体数は2~3個体であるが、多量の破片となって第4号住居跡内に散在し、一部第3グリッドと共有する破片もある。整理後の接合で胴部から上半の形を伺うことの出来る資料(1)が得られた。青灰色の良好な焼成をみせる部分と黄褐色の粗い胎土の部分があり、白色の砂粒を多く含む。厚さは平均9mm。器形は朝顔形に開いた口縁部が段をなしていくの字に内傾し、更に少し外反する立ち上りをみせる。文様は口縁下に2条の竹管による隆起線、そして最も突出した隆帯上に爪形文を施し、その端は懸垂して胴部に渦巻文を展開する。胴部は半肉彫渦巻文が余すところなく施文され、部分的に刻目が加えられる。3の土器片には2cm巾の無文帯が横に走り、下半部との境界をなしている。底部に近い部分は、縦位の太い沈線のみで構成される。(4.5)

C-2類 (挿図27-7~9 図版46)

隣接する第3グリッドと共有する1~2個体の土器を2類とした。キャリパー口縁をもつ鉢形土器で、貼付隆線によるA字形・H字形の文様のみで構成され、口唇には刻目が加えられる。褐色の色調と白色の砂粒・雲母を含むやや粗い胎土は、他の土器と容易に区別される特徴をもつ。船元Ⅲ式に対比されよう。

C-3類 (挿図28-1.2, 7~12 図版47, 48)

4つの波状突起をもつ大型の深鉢土器で、復元により全容を伺うことが出来る。文様は上部から4分の1までに集中し、以下は無文である。隆線で半月形に区画された口縁部に、特徴的なボタン状の貼付を有し、余白は縦の沈線、文様帯の下端は鎖状に連結する隆帯に、竹管によ

る1~2条の連続刺突が加えられる。胎土はやや粗く黄褐色を呈する。9, 10も同様のモチーフであるが、隆線上に刻目が入り、文様帯もかなり下降する。色調は赤味を帯びる褐色で焼成は良好、器壁は厚く白色の砂粒を含む。

C-4類 (挿図28-13 図版49)

縄文のみが施された円筒形深鉢土器で、口唇は帯状にふくらむ。底部には網代圧痕がみられる赤褐色の土器である。

C-5類 (挿図27-10, 12)

キャリパー口縁をもつ浅鉢土器2個体で、12は赤褐色を呈し、網代圧痕のある底部(挿図28-4)を伴う。10は褐色の無文浅鉢破片である。

その他の土器

口縁部に2本と口唇上に1本の沈線をもつ、よく研磨された無文の土器片(13)、表裏に条痕文ある赤褐色の堅い土器片3点、勝坂式に比定される隆線文土器1片(11)等がある。

第1ピット群

D-1類 (挿図23-11 図版51)

縄文を地文とし、竹管による孤線・平行沈線が施される明褐色の土器で、口縁はこぶ状に突出する。第2号住居跡B-4類に対応する船元式土器であろう。

D-2類 (挿図23-21, 22 図版51)

褐色薄手の波状口縁土器で、砂粒と雲母片を含む。刻目の入った細い粘土紐による菱形のモチーフと竹管文が特徴的な、B-7類に対応する平出3A土器である。

D-3類 (挿図23-10, 12~18, 20 図版52)

貼付隆線に刻目を持つ波状口縁の土器(10.12.16)が主体で、刻線や小把手がつく破片など、勝坂式としてまとめられる一群である。13~15の土器底部も含まれる。

第2ピット群

E-1類 (挿図30-1, 3~7 図版53, 54)

平出3類A土器の好資料である。わずかに外反する4つの波状口縁をもつ深鉢土器で、文様帯は上部4分の1と胴下半部に分かれ、他は無文である。上部文様帯は、口縁に貼付紐線による菱形の区画が竹管による爪形文を伴って形成され、他の部分は縦位の細い沈線で埋められる。その下には2条の沈線と1条の刻目を持つ隆線が巡る。胴部はゆるやかにくびれをみせ、再び張り出して刻目ある隆線が一巡し、更に波状に垂下する細い紐線が飾られて底部に至る。器厚7mmで、胎土は多量の粒子を含み、焼成は良く色調は明褐色を呈する。

E-2類 (挿図30-2)

P₂内部より一括して出土した、縄文のみの壺形土器である。平坦な帯状口唇をもち頸部で急激にすばまるが、胴部に至って最大径となり、ゆるやかに下部へ移行して段をなして底部となる。L撚りの荒い縄文が全面に施文され、黄褐色の焼き肌をみせる。粒子の粗い粗製土器である。胴部にはススが付着し、また輪積みの様子も観察される。他の縄文土器とは異質の形態であり、所属する時期は不明である。

第3ピット群

F-1類 (挿図29-1~7 図版55, 56)

1個の突瘤と、わずかに外傾する平坦な口縁下に、4条の竹管による隆線を配し、撚糸文が全面に施される深鉢土器(1)と、内傾する口唇部に太い竹管による爪形文を配し、交差する縦横の沈線文で構成される土器(2.5)、V字形の竹管文(6)、竹管による爪形文(7)、撚糸文に円形の刺突文が連続する土器(3.4)等、北陸系の要素をみせる土器群である。特に1は、口縁のみL撚りで胴部が2種のR撚り撚糸文が交互に配せられ、胎土は粗く白色の粒子を多く含み、もろい焼成をみせる。

方形土壇

G-1類 (挿図29-9 図版57)

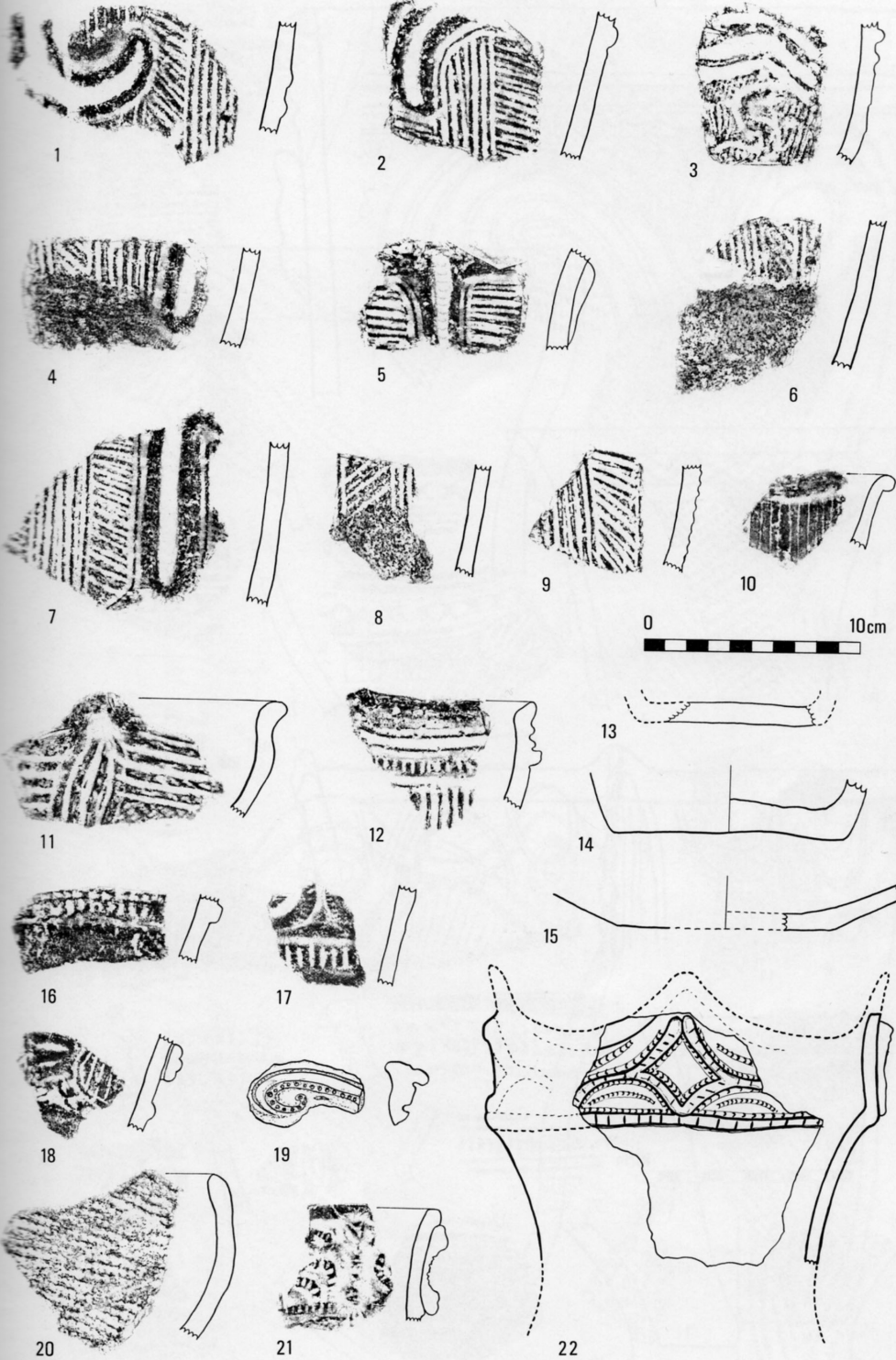
キャリパー形の深鉢土器で、文様は貼付による縦位の隆線と、胴下半部の縄文によって構成される。隆線は部分的にジグザグ状となり変化を見せている。胎土はやや粗いが、薄手の明褐色の土器で、沖田Ⅱ式(船元Ⅲ)土器に対比される。

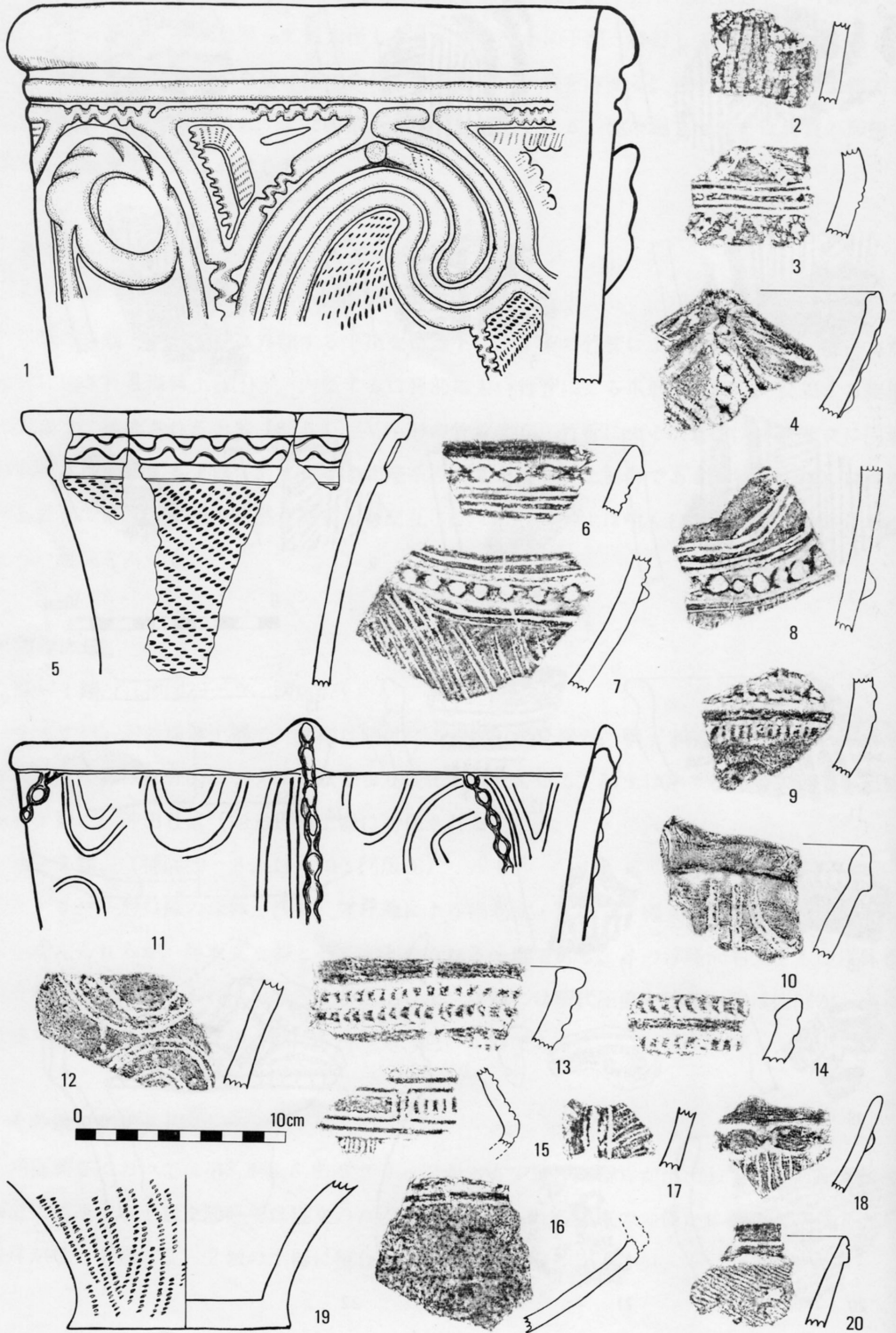
G-2類 (挿図29-8, 11~19 図版58)

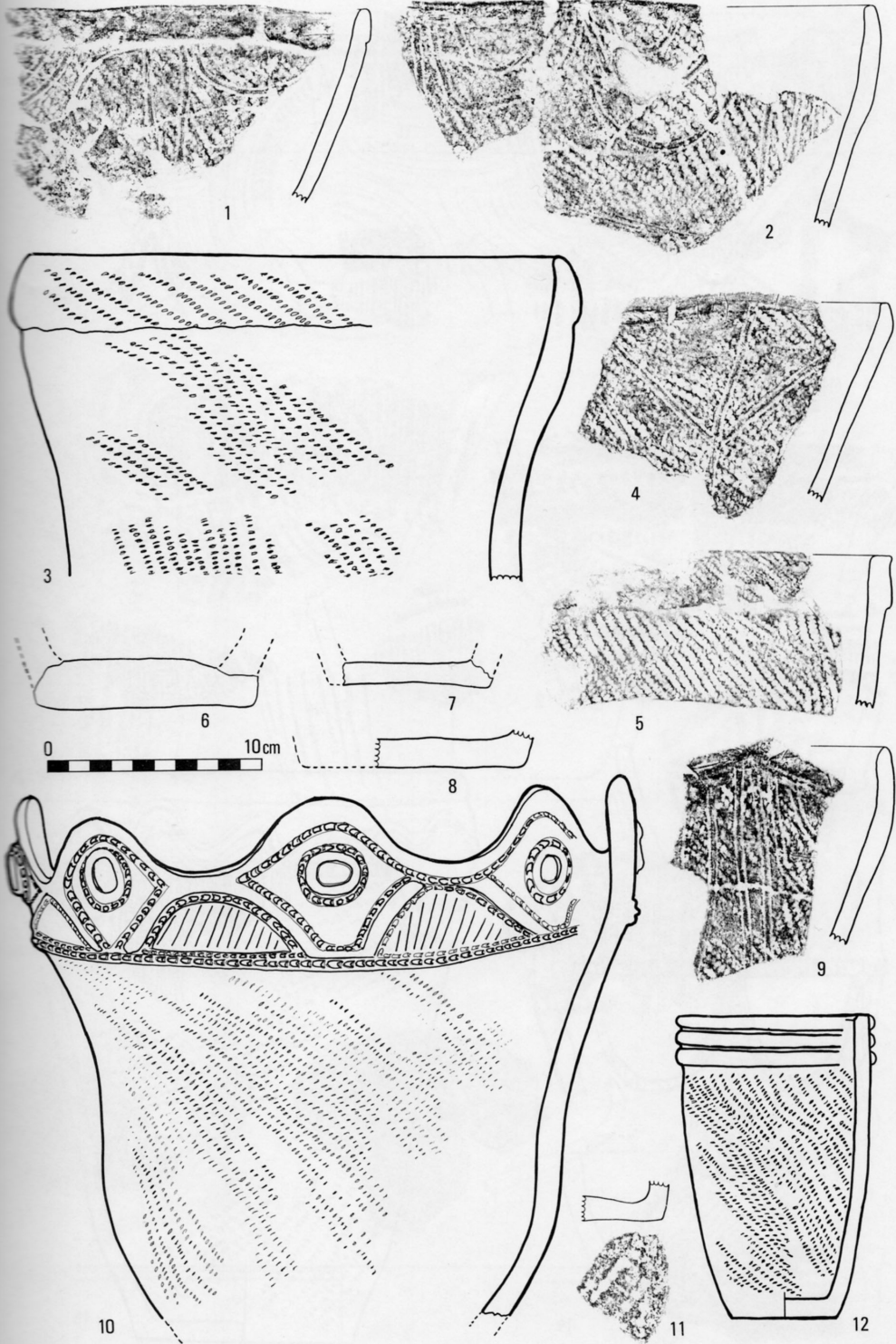
キャリパー形口縁の深鉢・浅鉢、隆起線による渦巻文・沈線分・縄文等、種々のバリエーションがみられるが、勝坂式土器としてまとめられる一群である。8の浮隆渦巻文をもつ浅鉢土器は裏面に彩朱がみられ、土壇内より出土した。底部には網代圧痕が残る。10は底部がわずかに盛り上り、沈線と粘土紐の貼付を持つ赤褐色の土器である。

その他のグリッド

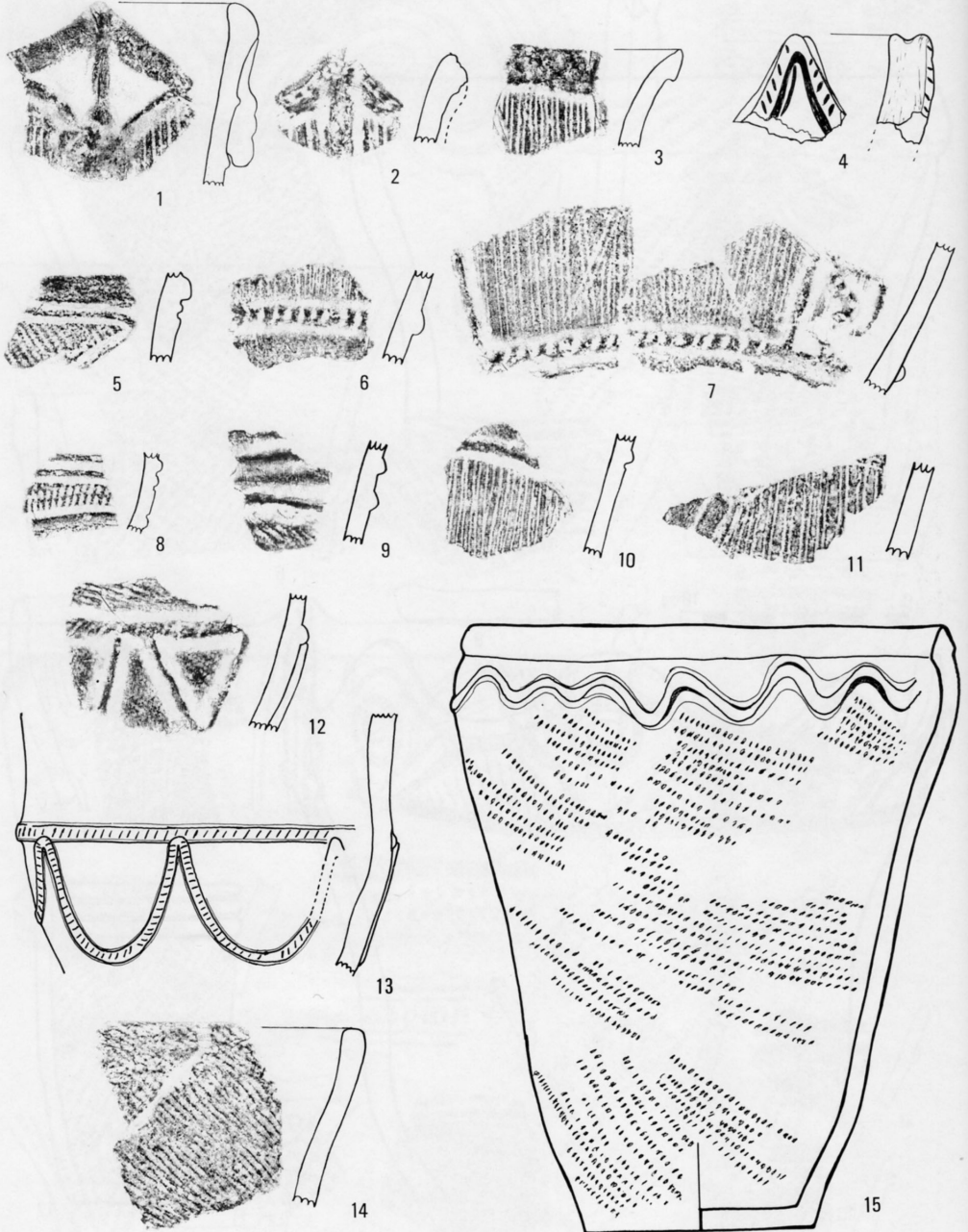
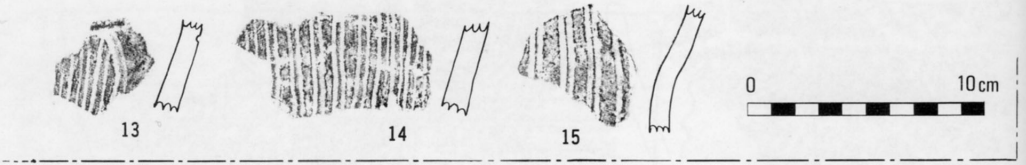
発掘調査においては第3.4.5.6.8.9グリッドからも少量の土器片が出土しているが、方形周溝墓に関連する土器を除いては縄文のみの小破片がみられる程度で、僅かに第3グリッドの土器片がC-1類、C-2類の土器に接合する。

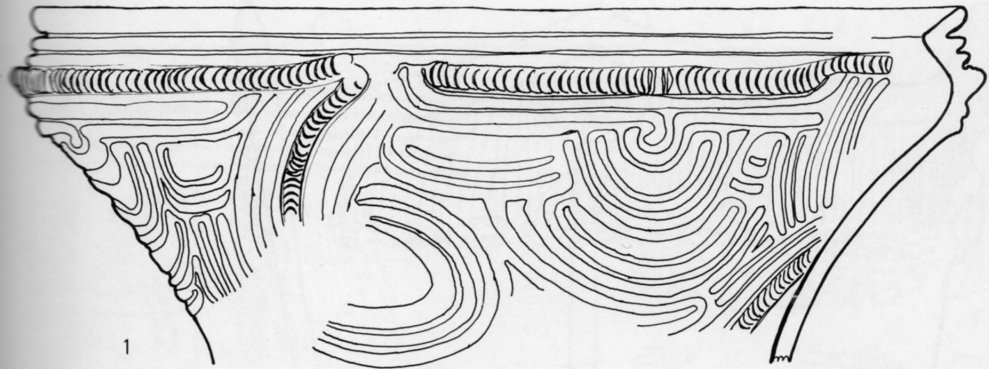






挿図26 第2号住居跡出土の土器及び大ピット内の土器

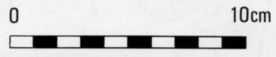




1



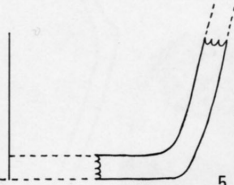
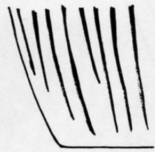
2



3



4



5



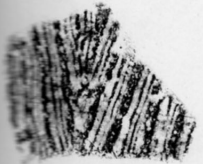
6



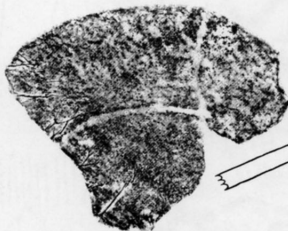
7



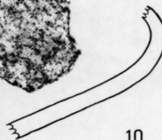
8



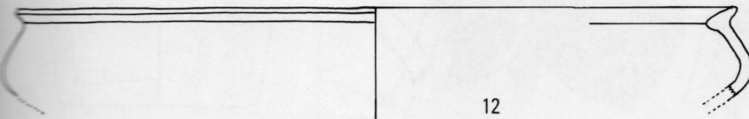
9



10



11

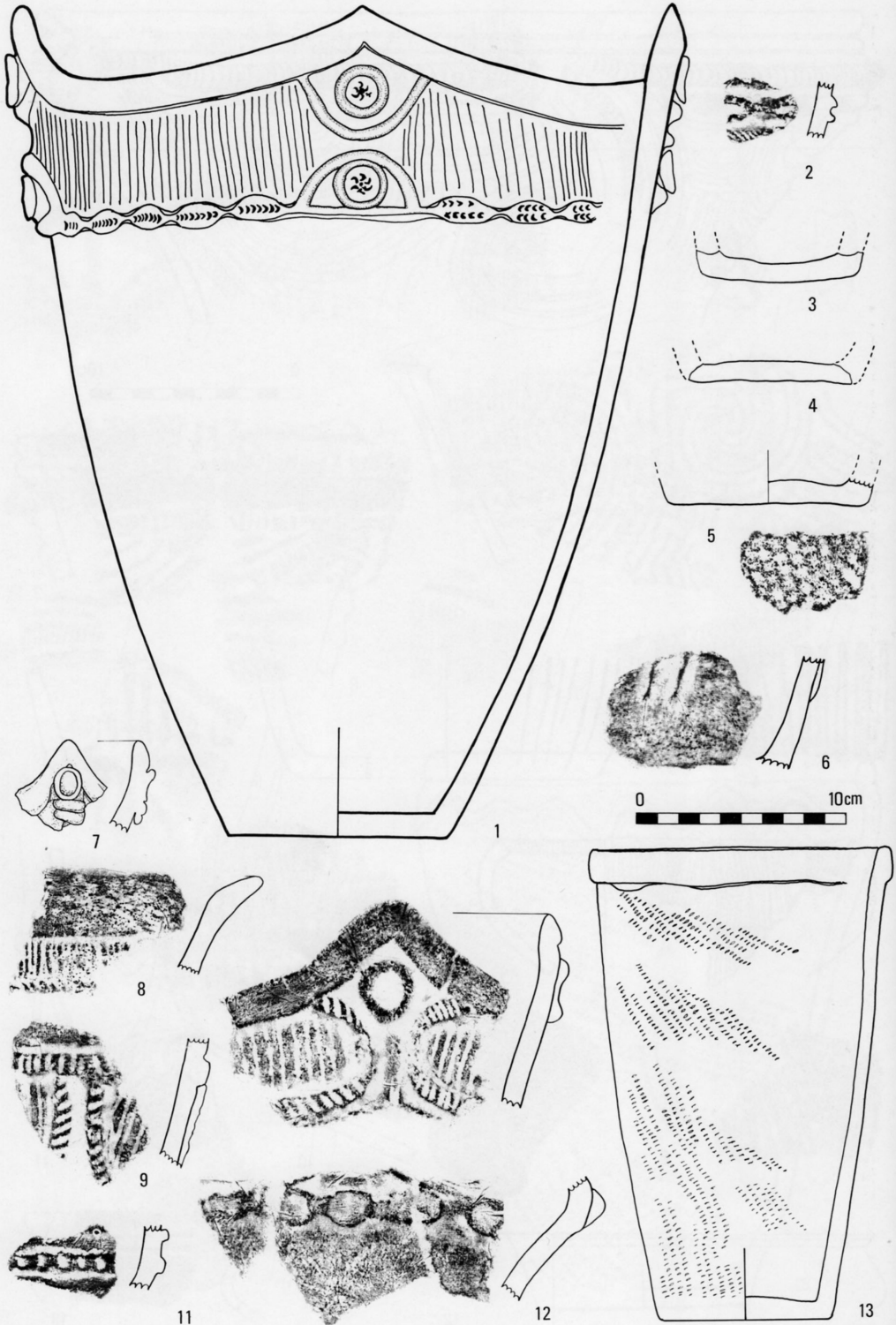


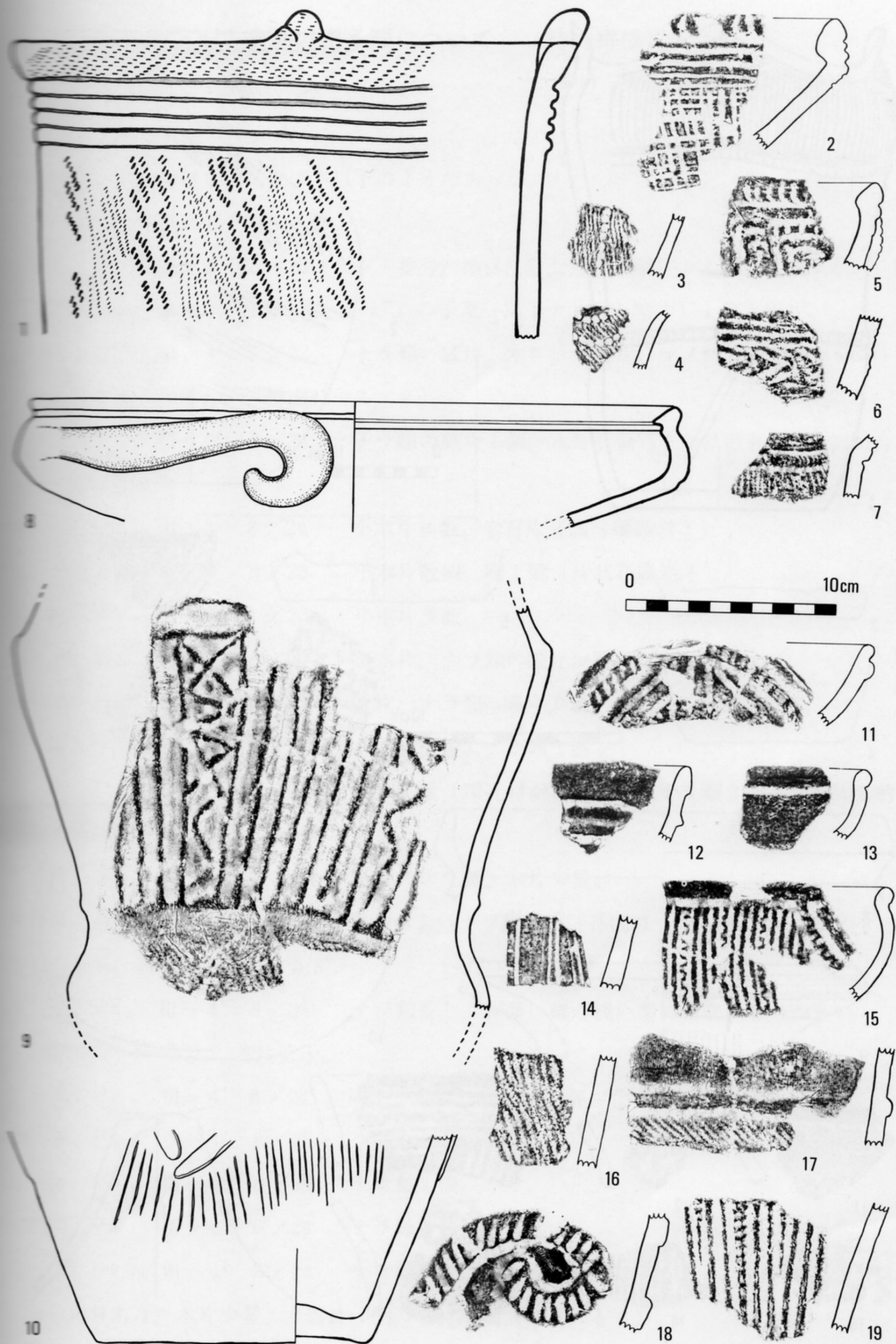
12



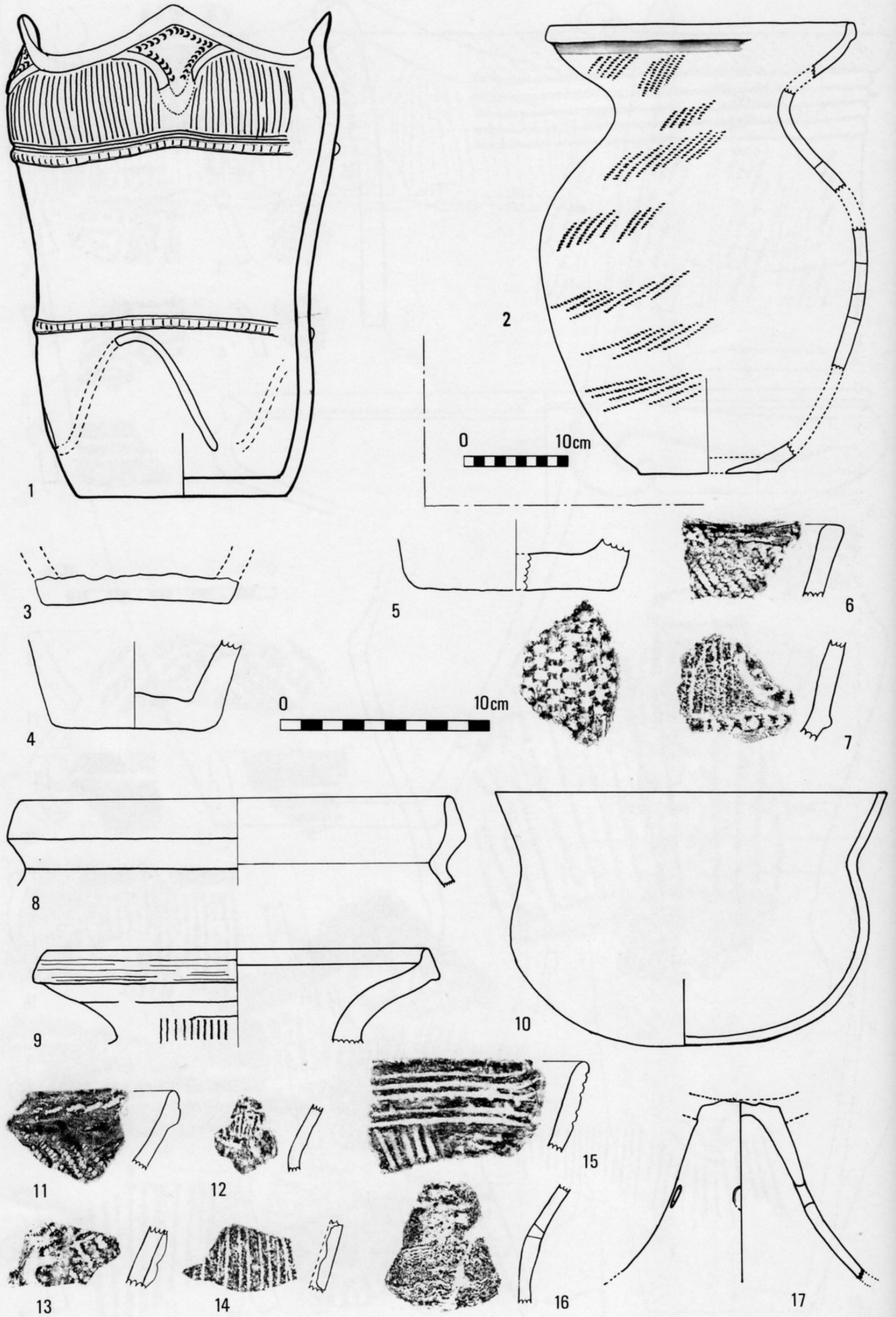
13

挿図28 第4号住居跡出土の土器





挿図30 第2ピット群、第3号住居跡及び方形周溝墓内出土の土器



3. 自然遺物

高山市ツルネ遺跡の種子類について 〈特別寄稿〉

粉川 昭平 (大阪府立大学理学博士)

多数の試料を検討した結果は、以下のようであった。

A 第1次発掘の第1ピット群

- A-1 : P1, III-3' 8/23 (ピット番号, 地区, 出土月日の順) ナラ (或はカン) 類
(*Quercus sq. s. l* 所謂“ドングリ”) の子葉 (以下ナラ類と略す) 1枚と破片。
- A-2 : P1, III-3' 8/22 ナラ類の破片。木片。土器片。マメ科 (*Leguminosea*)
の種子2個 (後述)。 (挿図31-1・2)
- A-3 : P1, III-3' 8/24 ナラ類の破片1個。木片2個 (1つは散孔材)。岩石片1
個 (硬砂岩?)。
- A-4 : P1, III-3' 8/24 小木片多数。岩石片2個 (硬砂岩?)
- A-5 : P2, III-3' 8/23 小木片数個。礫1個 (片状花崗岩?)
- A-6 : P3, III-4' 8/23 小木片多数。
- A-7 : P3, III-4' 8/23 小木片, ナラ類の破片少量。石片少量。
- A-8 : P3, III-4' 8/23 木片, ナラ類の破片少量。赤土は多量にあり。
- A-9 : P4 付近, III-4 8/23 木片少量。ナラ類1個
- A-10 : P4, III-4 8/24 木片少量 (環孔材が目立つ)。ナラ類2個。岩石片2個
(1つは黒曜石である)
- A-11 : P4, III-4 多くのナラ類。木片少量。
- A-12 : P4, III-4 8/23 保存のよいナラ類多数 (挿図31-3~7)。1個だけ先端
とがらず, 異状なものがある(3)。
- A-13 : P5, III-4' 8/23 ナラ類多し。背面に縦の浅い溝が目立つものが多い
(挿図31-8~10)。木片若干。
- A-14 : P5, III-4' 8/24 同上。木片にはごく一部炭化していない部分がある。
- A-15 : P5, III-4' 8/25 少量のナラ類と木片。
- A-16 : P8, III-4 8/24 ナラ類1個。
- A-17 : P8, III-4 8/24 ナラ類1個。
- A-18 : P8, III-4 8/24 ナラ類数個。大きく縦溝のないものと, 細長く縦溝が目立
つものとあり。木片少量。土器片4個。石片2個 (チャート?)

- A-19: P15, III-4' 8/24 木片少量。
- A-20: P16, III-4 8/24 ナラ類少量(果皮も少しあり?)。木片少量。チャートの小礫を混ずる。
- A-21: P16, III-4 8/24 ナラ類少量(果皮もあるようである)。木片少量赤土多し。
- A-22: P18, III-3' 8/24 木片少量。
- A-23: P19, III-3 8/24 木片少量。
- A-24: P24, III-3" 8/25 木片少量。広葉樹らしい。
- A-25: P27, III-4 8/25 ナラ類2個。
- A-26: P29, III-5 8/25 木片多し(環孔材あり)。ナラ類は少量。
- A-27: III-3 8/24 木片少量。
- A-28: III-4 8/24 多量の赤土中にナラ類1個あり。
- A-29: あげ土。 木片と少量のナラ類。エノコログサと見える全く炭化していない種子が1個混じていたが、これは混入とみた。

以上すべては焼けて木炭化しており(14の一部のみ例外)、そのために、ピット内のローム層中に保存されたものと見られる。

2のマメ科の炭化種子(2個、挿図31-1・2)は、直径約7mm程度の球形で、臍点(ヘソ、hilum)は保存はよくないが認められる。側面には、マメ類が焼けて木炭化した時によくみられる不規則な裂け目がみられる。形からすれば、エンドウあるいは乾燥したダイズの如くにもみえるが、臍点が残っていないためもあって、何かよくわからない。ただこのようなマメが野生種にあるとは思えない点が、注意をひくのである。

この第1ピット群では、所謂ドングリの木炭化した子葉(上記では“ナラ類”と記した)が目立ち、29試料中20試料に見られた。一方クルミ・トチ・クリといったものは一片もなかった。かわりに木材片が多い。

B 第2次発掘の第2号住居址及び第2・3ピット群

B-1: 9月5日の試掘時。 材片5個。ナラ類(シワがある)4片。不明のもの2片。マメ科の種子1個(1/3程欠けてはいるが、上記A-2のものによく似て球形をしており、幼根(radicle)がよくみえている。挿図31-11)

B-2: 第3ピット群P2内, 9/23 2個のポリ袋に入れた赤褐色のロームで、水洗して炭化物をとり出した。クリ(*Castanea crenata* S.etZ)?小破片多数。材片多数。マメ科?子葉1枚の小片。小さな種子が密接集合したタール状の塊り数個(挿図31-12)。

これには棚状らしい断面がみえているが、1個の種子を完全な状態でとり出すことが出来ず何かよくわからない。これは、松永満夫氏・松本豪氏が最近報ぜられた長野県大石遺跡の炭

化種子塊と産状がにている（『どるめん』 №13参照。）この他、高師小僧が2個あり、土中には自形の角閃石（hornblende）らしい鉱物が含まれていた。

B-3：第2号住居址2層 材片3個。クリ？破片1個。

B-4：同2層上部 材片2個。オニグルミ（*Juglans siebolbiana* MAX）？の内果皮小破片1個。土器片1個。

B-5：同住居址内，9/7~10 環孔材の破片2個。オニグルミ？の小破片1個。

B-6：同住居址内，9/10 多数の材片（環孔材目だつ）。土器2片。

B-7：同住居址内，9/10 オニグルミ破片3個。表面のこまかい網目状の管束痕が目だっている。

B-8：同住居址2層上部 クリ？の破片数個。

B-9：同住居址内 オニグルミ破片1個。ナラ類破片1個。他に木片多し。

B-10：同住居址内 少数のナラ類？。木材の破片。

B-11：同住居址内，9/7~10 ナラ類の小破片2個。材片6個。昆虫の蛹？。これは巾0.9cm，長さ1.5cmの大形のもので，さらに検討を要する。

B-12：同住居址東壁面，9/18 赤褐色の泥中に炭化物が含まれる。オニグルミ小破片，材片，その他不明のものが少数あり。

B-13：第2ピット群。9/23 たてじわのあるナラ類7片。オニグルミ破片2個。材片若干。

B-14：第4号住居址P内，オニグルミ小破片1個。

B-15：第2号住居址内，9/15 クリ？及び材の小破片。ムギ類？と見える種子1個（これは腹面に明瞭な縦溝があり，背面基部に胚状のものがあり，カワムギの特徴をそなえていると見たが，更に精査を要する）。

B-16：第2号住居址内，9/15 多数の木炭片で，多くは広葉樹材のようにみえた。クリ？破片1個。土器片1個。石片1個（チャート）。頭のとれた小甲虫一匹。

B-17：第2号住居址内 ナラ類？2個の小破片。

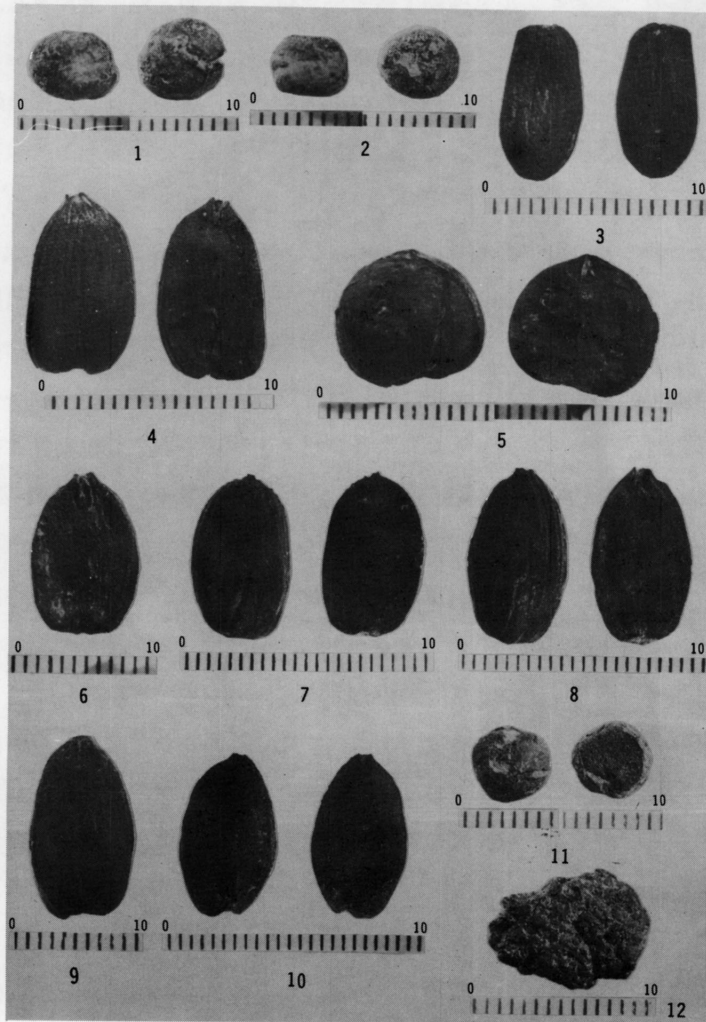
以上Bの試料では，前述のAと違って，小破片で充分にはわからぬものが多かったが，ドングリ類とともに，オニグルミ・クリが目立った。また明瞭にトチノキと見られるものはなかった。1のマメ類，2の種子集合塊，15のムギ類？などは，A-2のマメ類とともに，さらに各方面からよく検討を加えねばならない。

多数のドングリ類・オニグルミ・クリなどに混じて，ごく少数の栽培品を思わせるものが混じているようなパターンが，若干の遺跡でみられてきた。contamination（違う時代のものの混入）の問題を，どう解決するか？たしかにその時代のものであれば，各方面の既知の知識か

らして、どのように解釈しうるのか?などは、正しい同定の問題とともに今後の重要な課題である。上記マメ類などは、大阪府立大学農学部松本豪氏に見て戴いた。

所謂「特殊泥炭層」以外では、木炭化したものしか残らず、それはもろく、小破片が多いので、概して同定は困難である。木炭化したものは、一応乾燥しても大丈夫のようであるが、やはり取扱い中に割れて、小破片になってしまう事が多いので、液浸か綿にくるむなどの慎重な取扱いが必要のようであった。また問題の遺物は、複数の(多数の)専門家の意見を聞き、異論のある時は併記するなどの措置が必要との提案には、筆者も大賛成であり、多数の方々の御検討を希望している。

また重要なドングリ類(*Quercus* 属)の同定については、現在筆者は甚だ無力な状態なので将来に期している。



挿図31 ピット内出土の植物炭化種子 (単位 mm)

VI. 考 察

1. 土器群のまとめと考察

前述のようにツルネ遺跡の縄文式土器は、3戸の住居跡、3ヶ所のピット群及び1ヶ所の土壇周辺において、それぞれ各種の要素を持って複雑に入り混じった土器群として存在する。単一の組成をもつものはわずかに第1号住居跡のみであり、他はその文様形態や系統においていくつかに分類される土器群が、相互に対応しながら縄文中期前～中葉の様相を提示する。以下に若干の考察を混じえながら、分類された個々の土器群の相関関係をまとめてみたい。

まず、第3ピット群F-1類としてまとめられた土器群は、ツルネ遺跡の最古段階に位置づけられ、北陸系の新崎式土器あたりに対比される一群である。新崎式土器は飛騨においては、朝日村見釜釜野、小坂町裏垣内、萩原町桜洞、宮村亀ヶ平、古川町塩屋・御番屋敷、上宝村中野等の各遺跡で断片的にはあるが確認されており(註1) ツルネ遺跡の場合も同様の少ない比率で存在する。

次に第2号住居跡では、床面出土の勝坂式比定土器(B-1類)がその時期を決定し、多量の縄文を主体とする土器群(B-5・8類)がこれに付随する。同時にB-2a類のクサリ状隆帯文を持つ土器と、B-7類の平出3A土器が信州地方の影響下において共存し、ボタン貼付を持つB-3類が同様の要素を見せつつもツルネ遺跡個有の特徴ある土器群として、第4号住居跡C-3に受け継がれている。B-4類に分類された関西系船元II式土器も、第2号住居跡を構成する重要な土器群であり、その比率は約20%である。北陸系の土器はここでは僅か1個体、16片が姿を見せているにすぎない。他の地点との対応は第3表の如くである。

第4号住居跡は、第2号住居跡と極めて近接する時期の別個の住居跡であることが明らかとなったが、なお慎重な検討を要する。天神山A式土器(C-1類)が主体となり、ボタン貼付文を持つC-3類、船元III式土器(C-2類)がこれに次ぐ。萩原町沖田遺跡に非常によく似た組成をみせるが、ツルネ遺跡では北陸系土器が優位を占める点でやや異なる。(註2)

第2号と4号住居跡に共通する、特殊なボタン貼付をもつ波状口縁深鉢土器は、勝坂式もしくは信州方面の土器に強い関連を認め得るが(註3) 今後その類例と分布を追究して行く上のメルクマルとして、仮称ツルネI式土器と呼称しておきたい。

平出3A土器は、第2ピット群E-1類に全形を伺えるように、平出3A第4段階に位置づけられるもので(註4) 楯形文土器に発展する直前状態と考えられる。施文・胎土とも信州の資料と極めて類似し、土器そのものが持ち込まれた可能性も強い。岐阜県下では美濃加茂市の

2. 岐阜県縄文時代遺跡出土の植物遺体 <特別寄稿>

渡辺 誠 (京都平安博物館)

I. ツルネ遺跡からは、粉川昭平先生の調査結果に詳しく記されているように、問題のあるマメ類とムギを除き、オニグルミ・クリ・ドングリ類が検出された。従来岐阜県下の縄文時代遺跡において、植物遺体の検出されていたのは6遺跡にすぎなかったが(渡辺1975)近年調査された久々野町堂の上遺跡と本遺跡を加えることによって、8遺跡となった。全体からみれば豊々たる資料にすぎないが、想念のある発掘によって、近い将来に資料が急速に増加する可能性はきわめて大きい。本遺跡の発掘はその大きな契機となった。

この8遺跡の時期と植物遺体名を北から順に列挙すれば、次のとおりである。(註 挿図33)

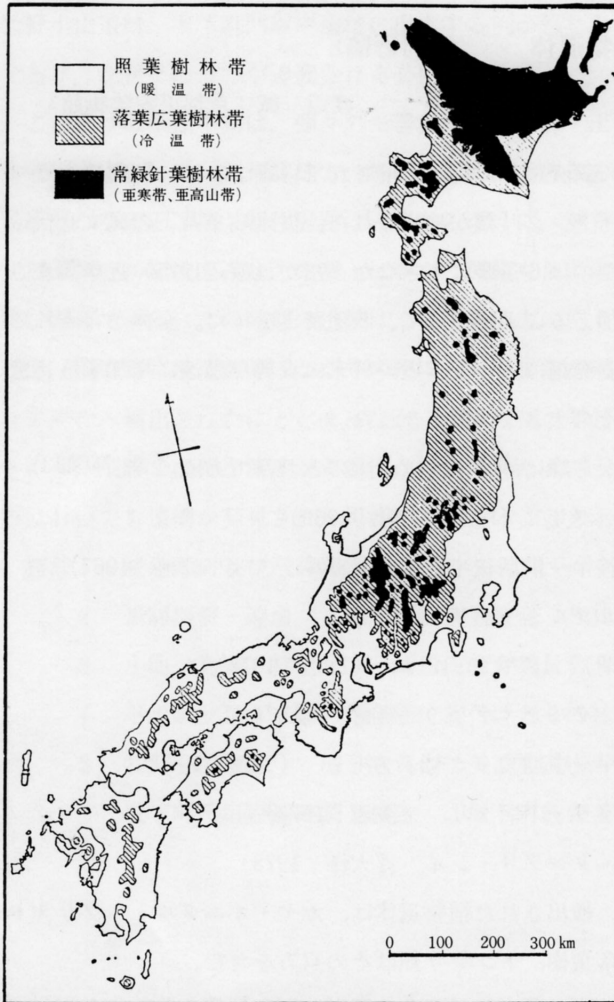
1. 吉城郡国府町村山遺跡 (前期) クリ (塩屋・大野 1960)
2. 大野郡丹生川村根方岩蔭 (早期後半～前期後半) オニグルミ (小林他 1967)
3. 高山市ツルネ遺跡 (中期) オニグルミ・クリ・ドングリ
4. 大野郡久々野町堂の上遺跡 (中期) クルミ・クリ (戸田 1977)
5. 益田郡萩原町桜洞遺跡 (後期) クルミ・クリ (紅村 他1974)
6. 益田郡下呂町ミネイチゴ遺跡 (早～中期) カヤ・クルミ (大江 1968)
7. 美濃加茂市島崎遺跡 (中期) クリ・ドングリ (渡辺 1973)
8. 各務原市炉畑遺跡 (中期) クリ・ドングリ・シイ (大江 1973)

1～6は飛驒、7・8は美濃に属す。検出された植物遺体は、カヤ・オニグルミ・クリ・ドングリ類・シイなどであり、前3者は落葉樹、ドングリ類はその双方を含む。

II. 粉川先生は、子葉のみになったドングリ類(シイを含めて)の同定は難かしい、と記しておられるので問題はありますが、シイの記載が南の炉畑遺跡にのみみられるのは興味深い。

食べ方からいえば、カヤ・オニグルミ・クリなどは困難さが少ないが、ドングリ類についてはアク抜きを伴う場合が多い。ドングリ出土のツルネ・島崎・炉畑の3遺跡が、いずれも中期の遺跡であることも注目される。著者は、ドングリ類を第4表のように分類している。岐阜県南部は愛知県に接し、濃尾平野の一角を構成しているが、多くの濃飛山地は山が深く落葉広葉樹林帯に属し、前者の潜在的な植生は照葉樹林帯であったとみなされている(挿図32参照)。したがって遺跡出土のドングリ類も、南ではよりカシ類、北ではよりナラ類に属する可能性が大きい。

カシ類(イチイガシのみ例外)とナラ類は、ともにアク抜きをしないと食べられないが、前者は水さらしのみ、後者は水さらしに加えて加熱工程がきわめて重要である(渡辺1975)。こうした処理過程での破碎・製粉作業と、すり石、たたき石、石皿などの石器群とは、きわめて



挿図32 本多静六氏による日本の植物帯図(四手井1974より引用)

緊密な関係にあると考えられる。そして石皿が濃尾平野に少なく、濃飛山地に多いことはよく知られているところであり、石皿の研究において、澄田正一先生が岐阜県下を精力的に調査しておられることも、こうした分布状態と無縁ではないのである。(澄田・諏訪1959, 他)。

ドングリ類に加えて、濃飛山地ではトチの実の利用も近年まで盛んであったが、その伝統は遠く縄文時代にまで遡ることが判明している。トチの実の遺体は、本地域では未検出であるが、他地域の例からみて検出される可能性はきわめて大きい。検出の困難なクズ・ワラビなどの根茎類も、大いに利用されていたと推定される。

III. こうした野生植物の利用は、明治初期に刊行された『斐太後風土記』のなかに、豊かに記載され

ている。他地域に稀なこのような文化遺産をかかえていることは、飛驒の縄文研究においても重要な意味をもってくるといえよう。他所と一味違う縄文研究の発達する可能性を孕んでいるのであり、高山考古学研究会に寄せる期待は大きい。

最後にドングリ類の食制に関連して、隣接する上宝村における民俗調査例を紹介しておこう。

第4表 ドングリ類分類表

種	分類		森林帯	地域	他の堅果類	ア ク
A クヌギ類	コナラ属	コナラ亜属	落葉広葉樹林帯	東日本	クルミ クリ トチ	↑ 強
B ナラ類		アカガシ亜属				
C カシ類	シイノキ属・アテバシイ属		照葉樹林帯	西日本		↓ 弱
D シイ類						

1976年9月6日、上宝村枋尾において、南 ゆきさん（明治40年生）よりうかがった話である。御案内願った寺地茂雄氏に深く感謝の意を表する次第である。

ナラには大きいドウナラ（学名ミズナラ）と、小さいホソナラ（コナラ）の2種類がある。ドウナラは、10月の中・下旬頃落ちる。

これは拾ってきたら、一たんサーッとうでる。そしてよく干しておく。これを水車でつく。実だけにして、キレイにタベル。

これを大きな釜で煮る。まんなかにはアジカのような長いものをたてて、ここからアクの出た湯をくみとって捨て、まわりから新しい水をいれる。こうして水をかえながら、1日煮る。袋につめたアクも、釜のなかにいれておく。

食べてみて洗くなければ、ショウケ（コメアゲザル）にあげて、むしろの上でかわかす。カラカラにかわかして、小豆と一緒につぶして、時には大豆もいれて、モチにして食べた。

もっともこれは大部以前のことであって、もちろん今では誰もしていないが、これをナラコウヅキといった。

飛驒では大釜で煮る話が多いが、北アルプスをはさんだ東側の信州開田村の例もこれに近い。（水西1956）

つきくだき、加熱、灰を加えることなどが重要なところであるが、これはいわば生態学的条件にもとづくものである。したがって、道具に変化があるだけで、縄文人にとって無視できない重要な作業であったはずである。やはり、すり石・たたき石・石皿などの石器群のあり方については、重大な関心を寄せざるを得ない。

それにつけても、こうした野性植物の利用に関する知識が、急速に消滅しつつある情勢には憂慮されるのである。この方面の記録保存にも、大いに参加者を得たいと思う次第である。

引用文献目録

大江まさる 1968：岐阜県ミネイチゴ遺跡発掘調査報告。考古学ジャーナル，27，15～17頁。

東京。

同 1973：炉畑遺跡発掘報告。各務原。

河西清光 1965：どんぐり食用の習俗。長野県考古学会誌，3，57～60頁。松本。

紅村 弘 他1974：飛驒桜洞，沖田。岐阜県萩原町。

小林知生 他1967：岐阜県根方岩蔭。日本の洞穴遺跡。175～187頁。東京。

塩屋政夫・大野政雄 1960：村山遺跡。高山。

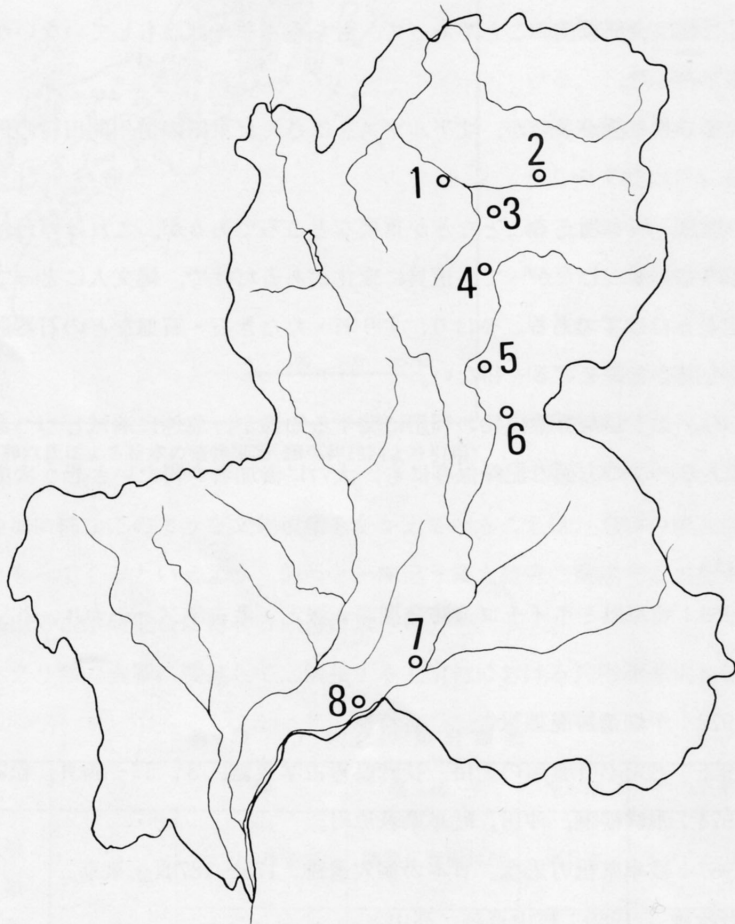
四手井綱英 1974：日本の森林。中公新書。東京。

澄田正一・諏訪兼位，1959：濃飛山地に出土する石皿の研究。名古屋大学文学部十周年記念論集。1～34頁。名古屋。

戸田哲也 1977：岐阜県久々野町堂の上遺跡の調査。考古学ジャーナル，138。10～12頁。東京。

渡辺 誠 1973：植物遺体。牧野小山遺跡。155～156頁。美濃加茂。

同 1975：縄文時代の植物食。雄山閣。東京。



挿図33 岐阜県下における植物炭化種子出土の縄文遺跡

VII. ま と め

ツルネ遺跡発掘調査の成果が、我々の予想以上に大きなものであったことは、本文中において既に充分語り尽くされたと思われるが、敢えてここで要約するならば次の3点にしばられる。

第1点は、ある程度予期されたとは言え、縄文時代中期の遺物が住居跡を伴って発見され、中期前葉～後葉の様相がかなり明確になった事である。飛驒地方、特に北部においては、縄文早・前期と中期後葉及び後期の遺跡の内容が比較的良好に知られている反面、中期前葉～中葉は空白に近い状態であった。ツルネ遺跡で出土した天神山式、平出3A式、勝坂式、船元式等の土器は、まさにその空白を埋めるに格好の資料を提供したのであり、当地方の先史時代を語る上で重要な指標となり得るであろう。

第2点は、第1点の内容にかかわるものであるが、住居跡に伴うピット群の存在、住居跡内の立石に象徴される精神生活の一面、石器製作過程を示す剥片の集積、そして当時の植物食を実際に裏付ける植物炭化物の発見である。これらの事例は決して目新しいものではなからうが正式の発掘調査なればこそ確認され得た成果であろう。不幸にも、何ら調査の手が加えられないうまま消滅していった、数多くの遺跡の事を思うにつけ、この感は深まるばかりである。

第3点は、岐阜県下で最初に発見された方形周溝墓と、土師器住居跡の検出である。周溝墓の出現は実に青天の霹靂であり、予備知識のない発掘関係者にとって全てが初めての経験であった。従ってその出現段階においては、必ずしも万全の調査体制でなかった事が反省される。ともあれ県下ではじめての方形周溝墓は、10数個のガラス玉を伴って、弥生終末期の墓制を我々の前に具現した。その被葬者の年齢、性別は推測の沙汰ではないが、少なくともツルネ遺跡の周辺地域を生活基盤として集落を営む農耕社会の有力者あるいはその家族であったことは確かであろう。他方その墓制が神社の起源にどのように関わっていくかという問題も興味深いものがある。土師器を出土した第3号方形住居跡は、方形周溝墓との直接のつながりは確認されていないものの、極めて接近した時間内に位置づけられ、立地上の問題とあいまって、編物用おもり石等の新たな資料を提供した。

以上に要約した発掘の成果は、同時に一つの大きな問題点を内包した形において語られなければならない。言うまでもなく、産業開発と文化財保存の問題である。ツルネ遺跡は第1号住居跡と第1ピット群を理蔵保存するという配慮がなされたが、三軒の住居跡と一基の方形周溝墓を含むB地区の遺構は滅失し、記録のみを残す結果となったことは真に残念であった。ごく少量の表採資料と遺跡文献を手がかりにした理蔵文化財に対する熱意が、方形周溝墓の発見にまで拡大される原動力となったのであり、それが説得力のある内容であったことは実に僥幸で

あった。その意味でツルネ遺跡の場合はまだ「運が良かった」のであろう。

改めて言うまでもなく、開発か保存かという二者択一法が取られる限り、文化財保存の問題は解決されるどころか、遺跡群の急速な減少と貴重な文化財の消滅をもたらすのみであらう。

高山市の埋蔵文化財を記載した遺跡台帳における滅失遺跡は、遺跡総数の約50%を占めるといふ今日、何らかの対策が講じられる必要性に迫られている。

今回の発掘は、その意味で大きな教訓を残したといえよう。

ツルネ遺跡の立地する江名子の丘陵一帯は、まさしく「遺跡の丘」である。この美しい自然と文化遺産を子孫に残すために、我々市民に課せられた責務は何か、改めて真剣に取り組まねばならない問題であらう。

完



写真4 B区発掘風景

B地区

A地区



图版 1

遗迹远景

A地区

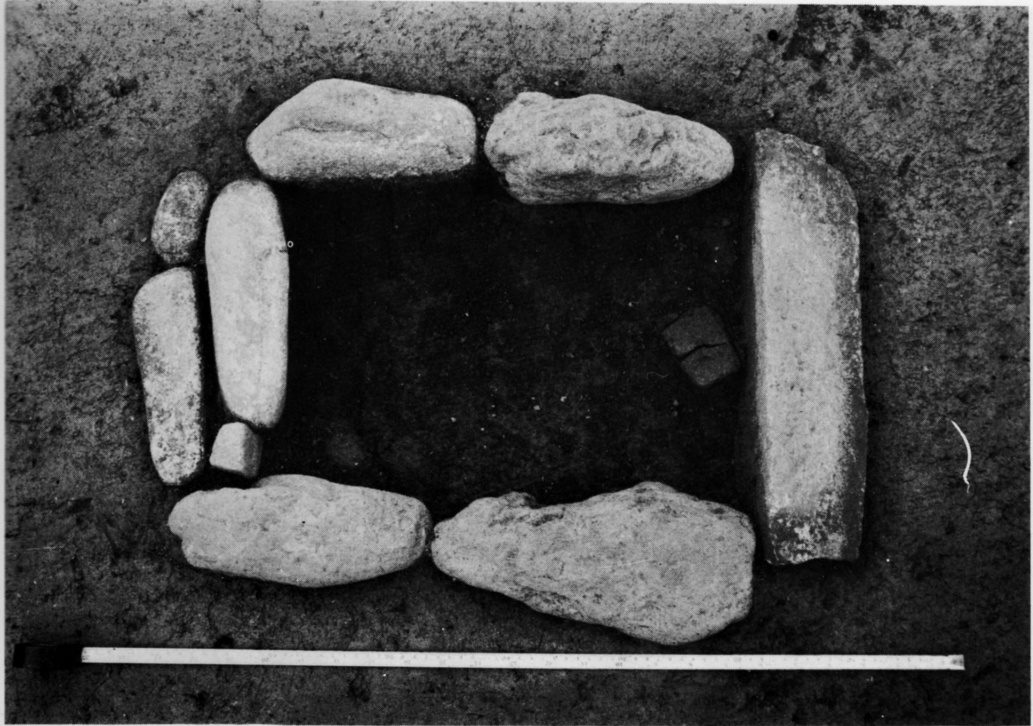


图版 2

B区全景



図版 3
第1号住居跡



図版 4
炉跡



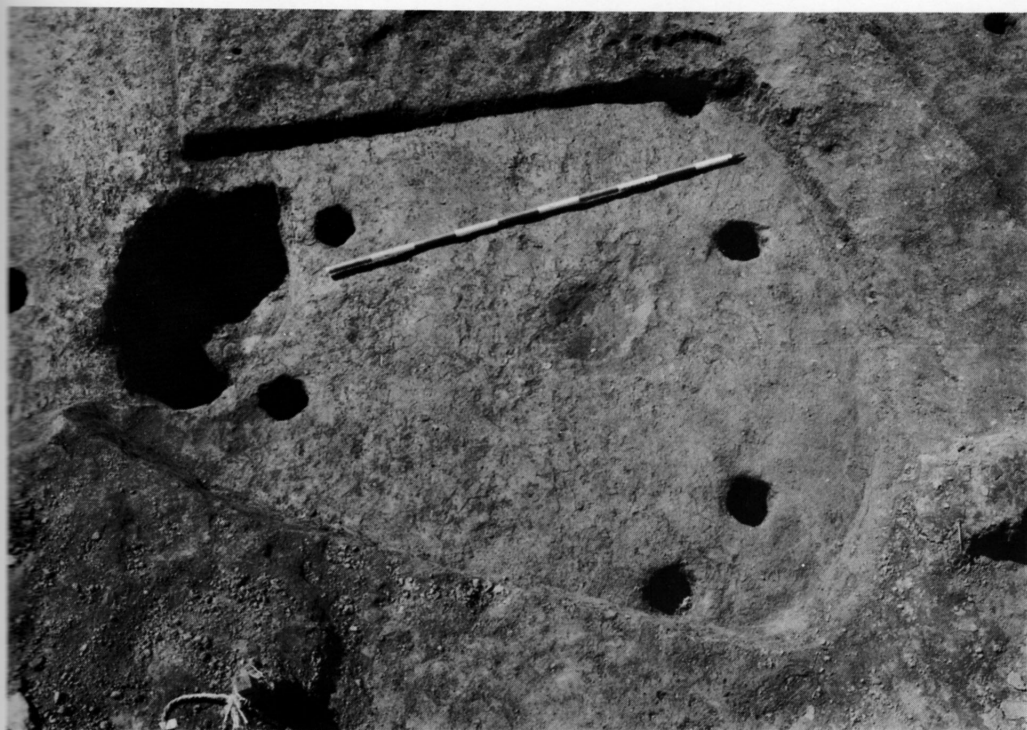
图版 5

第2号住居跡



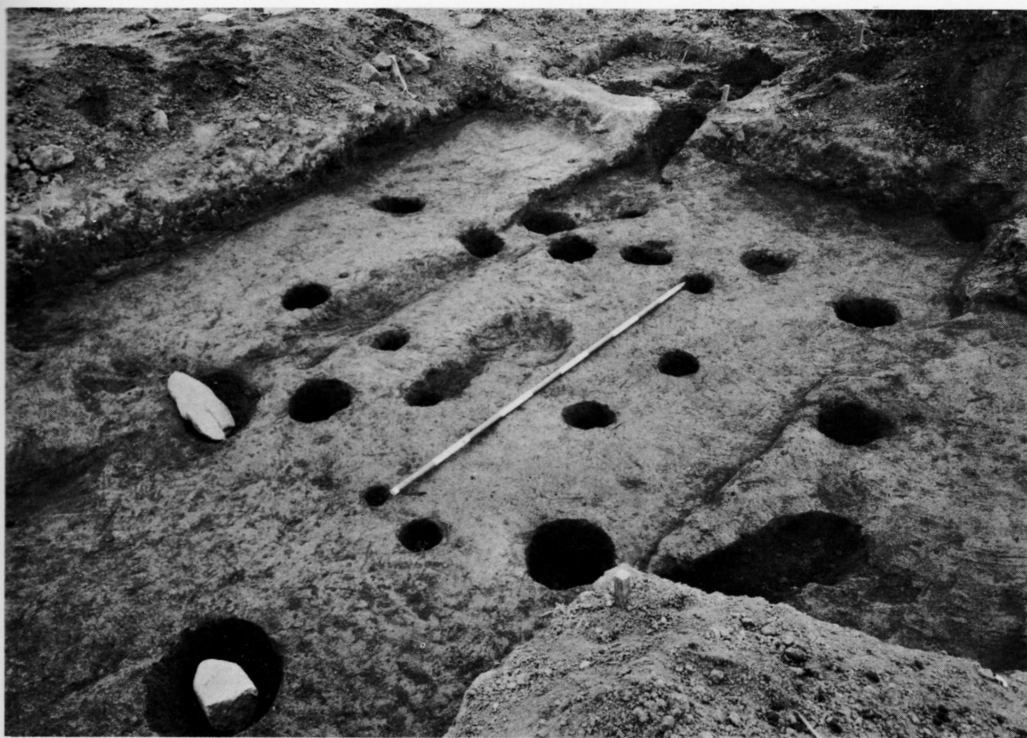
图版 6

第3号住居跡



図版 7

第4号住居跡

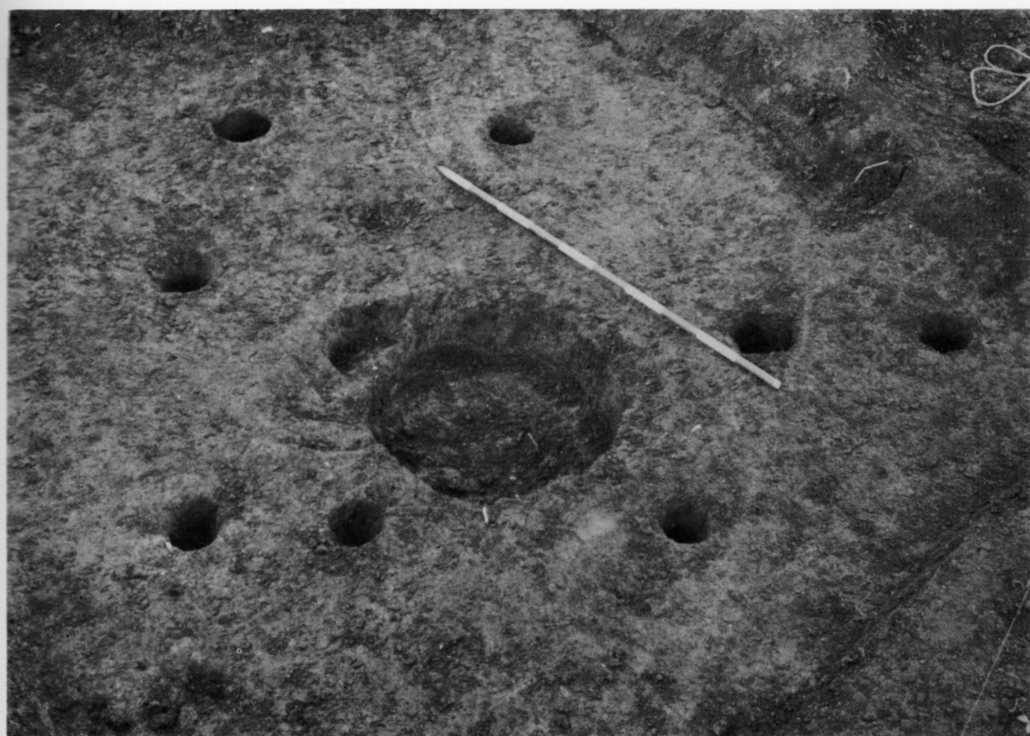


図版 8

第1ピット群



図版 9 第2ピット群



図版 10 第3ピット群



11



12

図版 11 方形土壇
図版 12 剥片の集積状態(第2号住居跡)



図版 13 第2号住居跡の立石と第3号住居跡の編物用おもり石

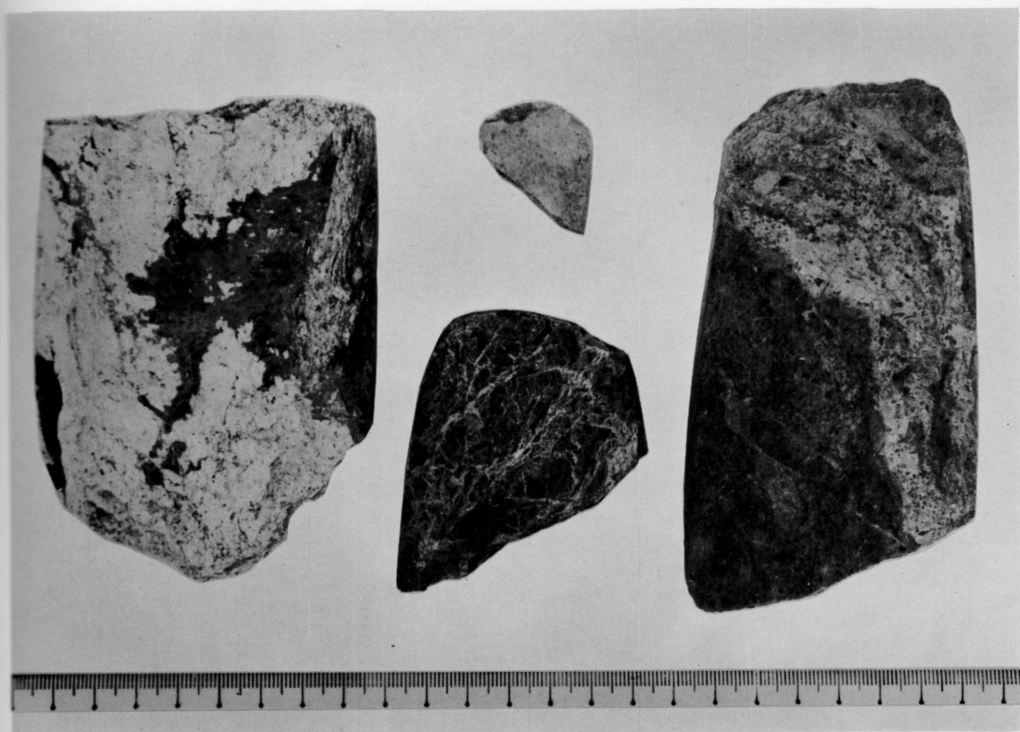


图版 14 第4号住居跡土器出土状态

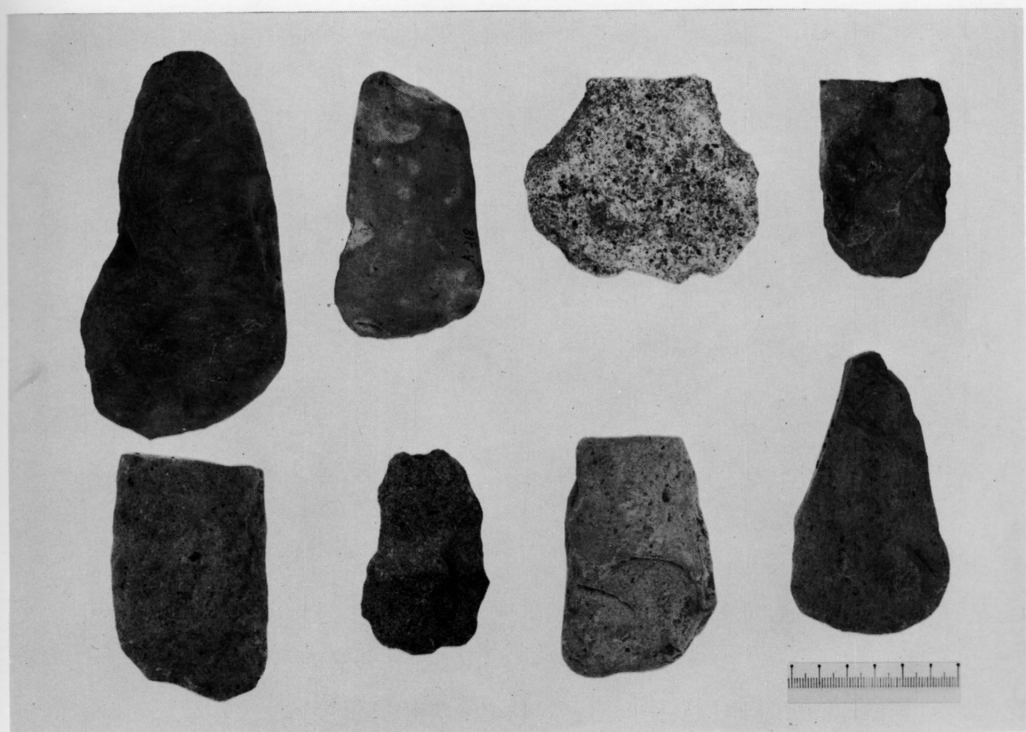


图版 15 第4号住居跡土器出土状态

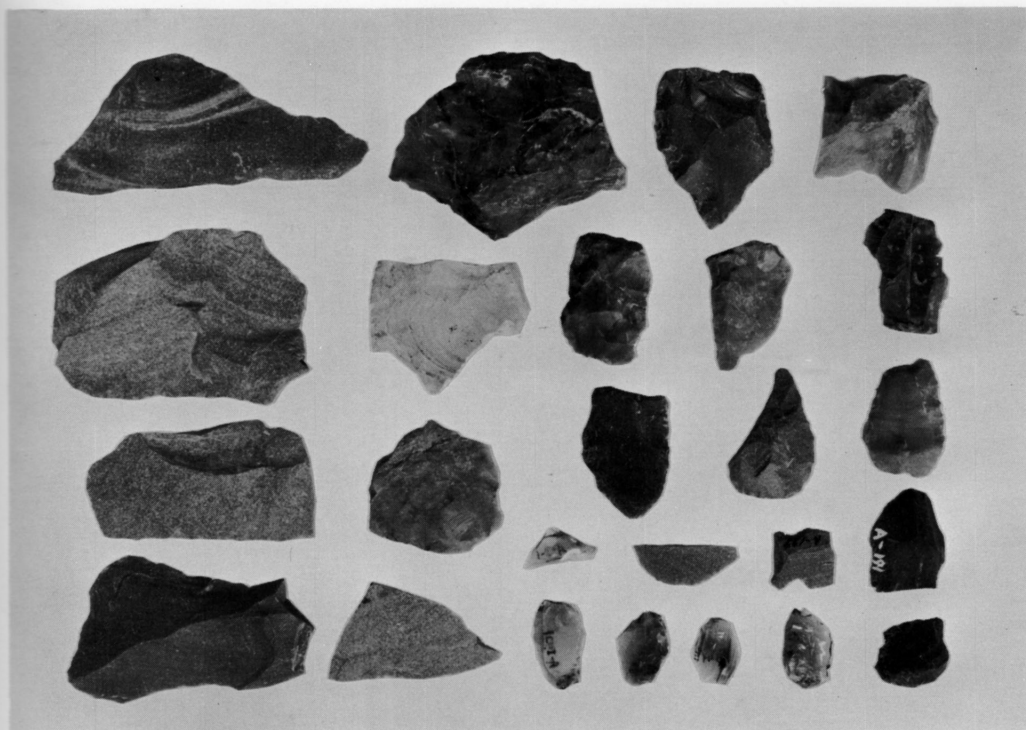
图版 16
磨製石斧



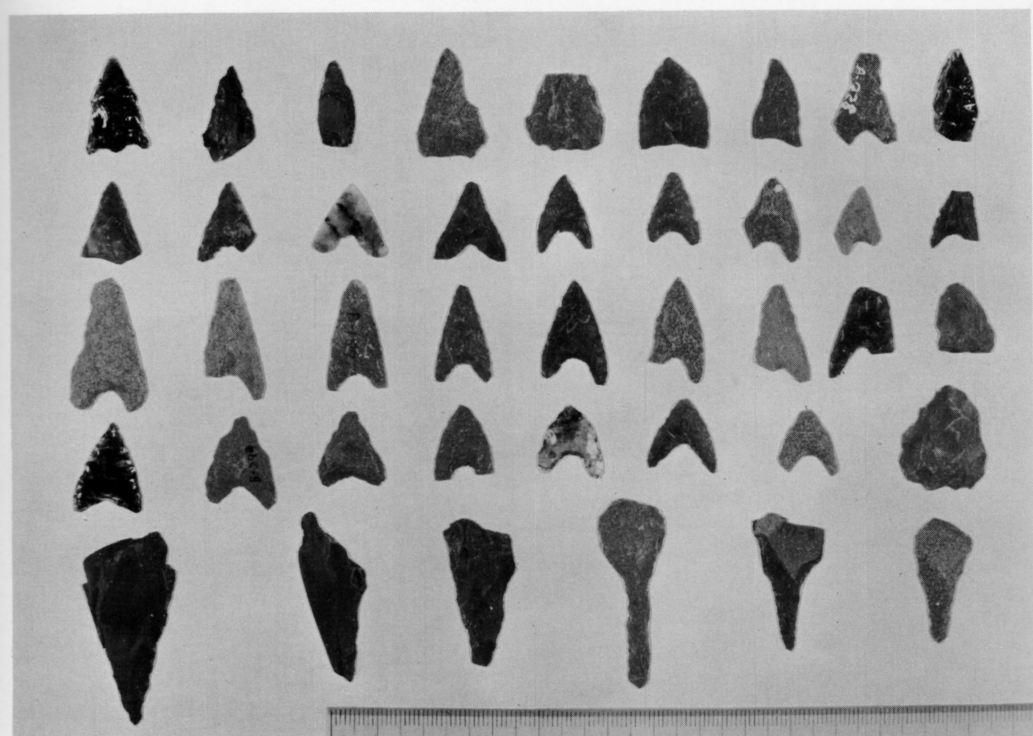
图版 17
打製石斧



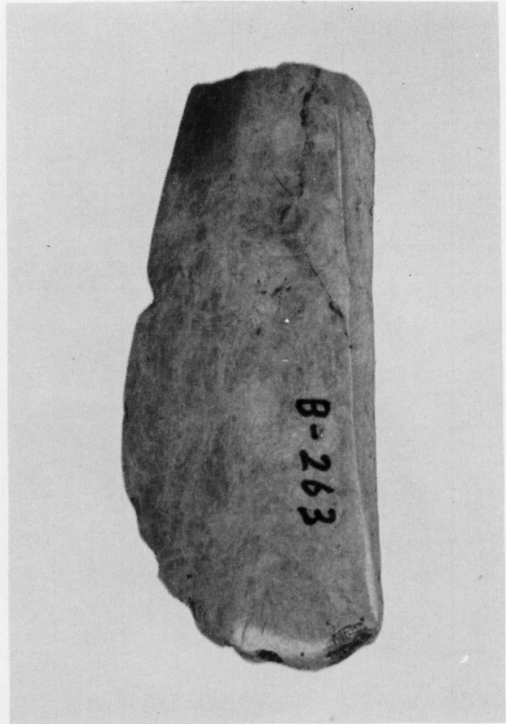
図版 18 各種削器



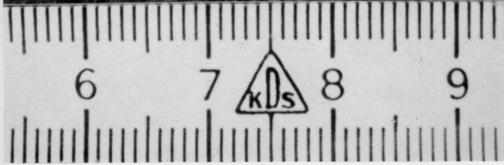
図版 19 石鏃・石錐



図版 20
块状耳飾



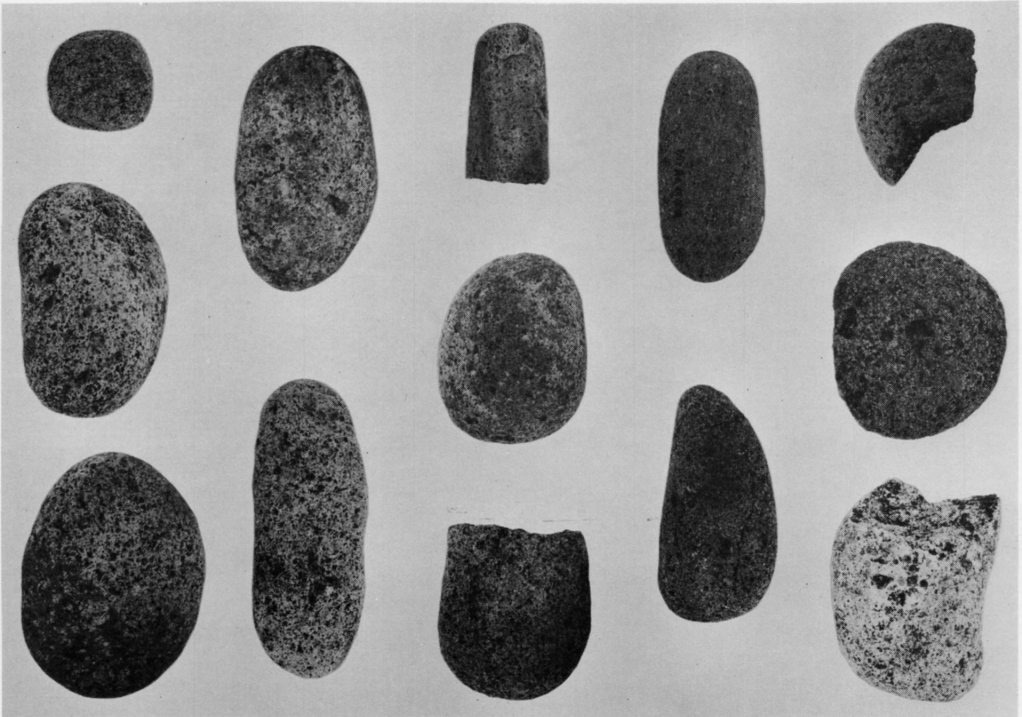
図版 21
異形垂玉



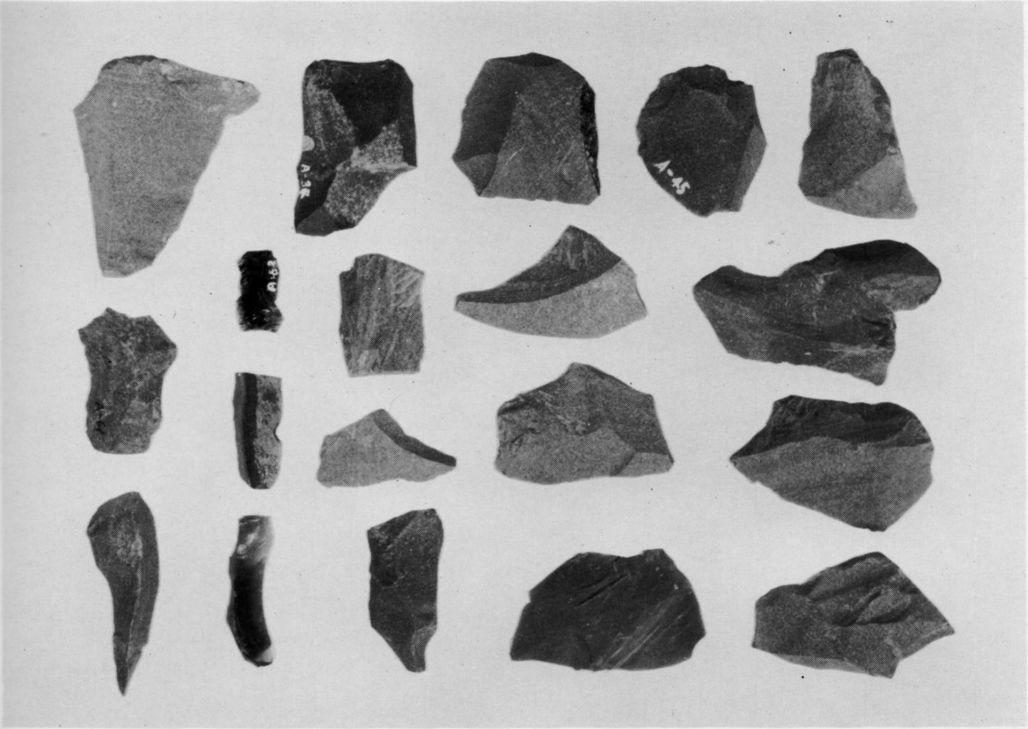
図版 22
石 錘



図版 23
凹石・磨石・敲石



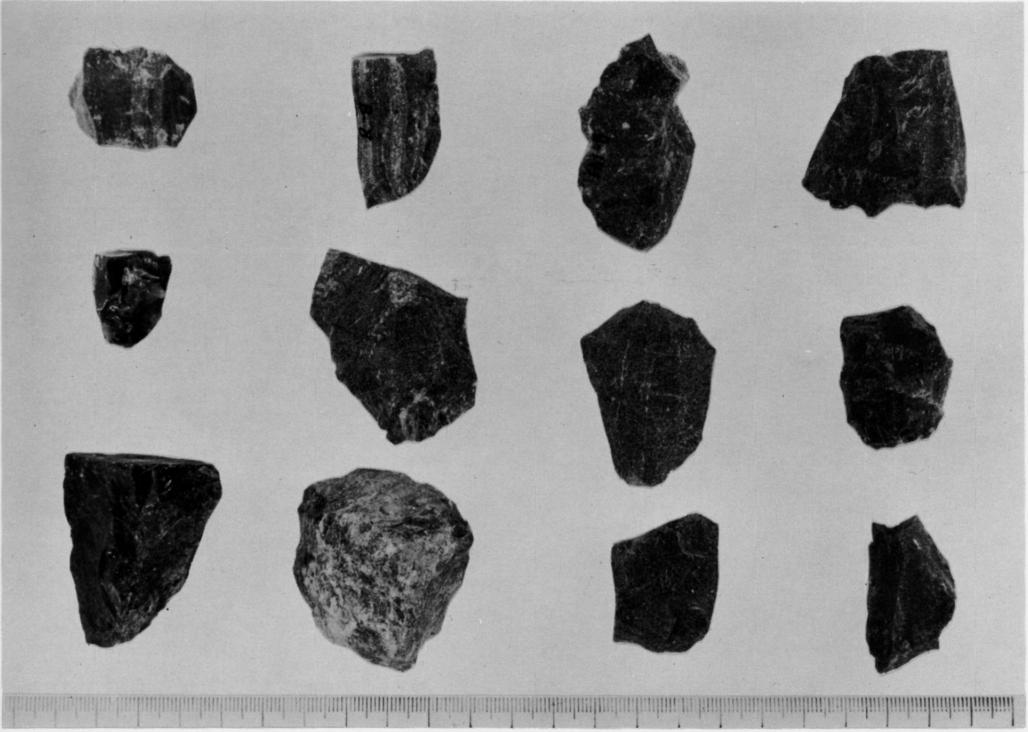
図版 24 剥片



図版 25 接合する剥片(第2号住居跡)

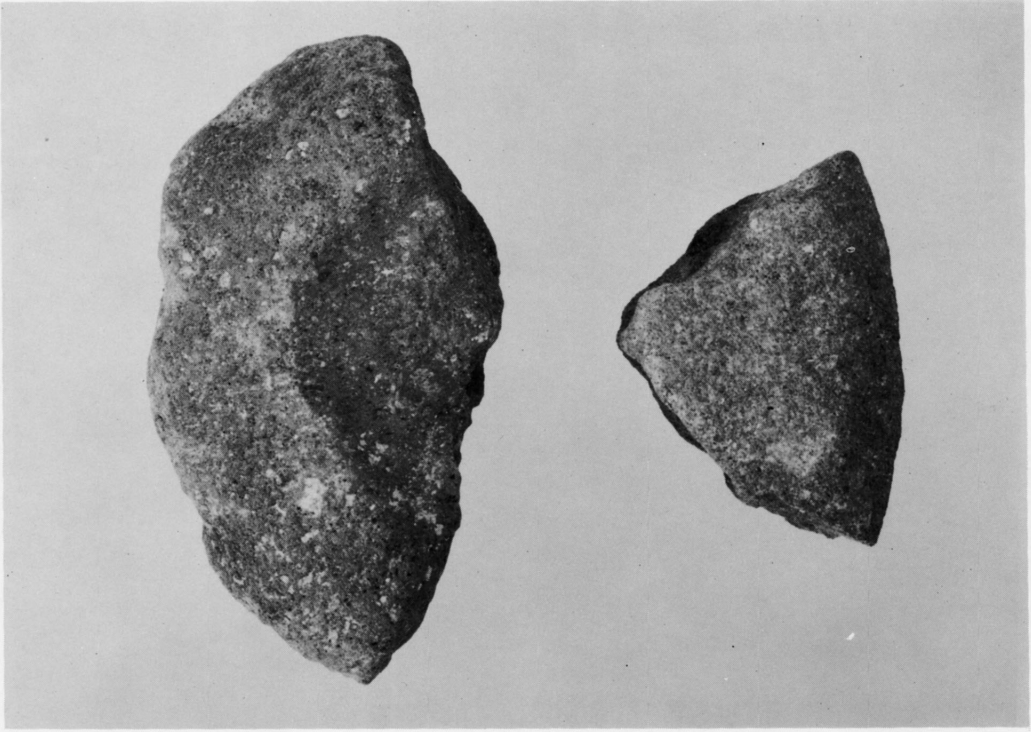


図版 26
石
核

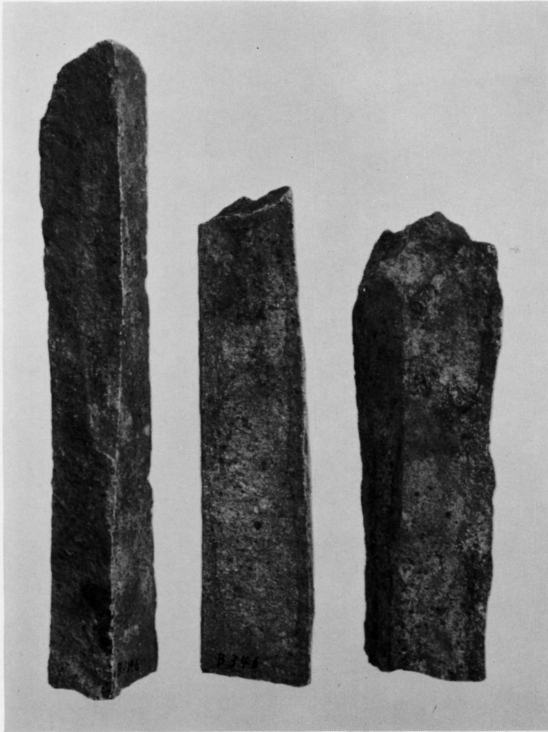


図版 27
編物用おもり石

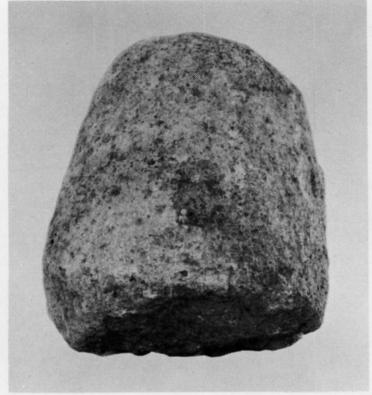




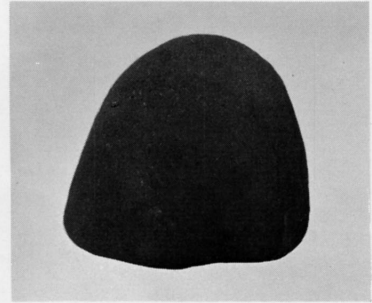
図版
28
石
皿



29・30

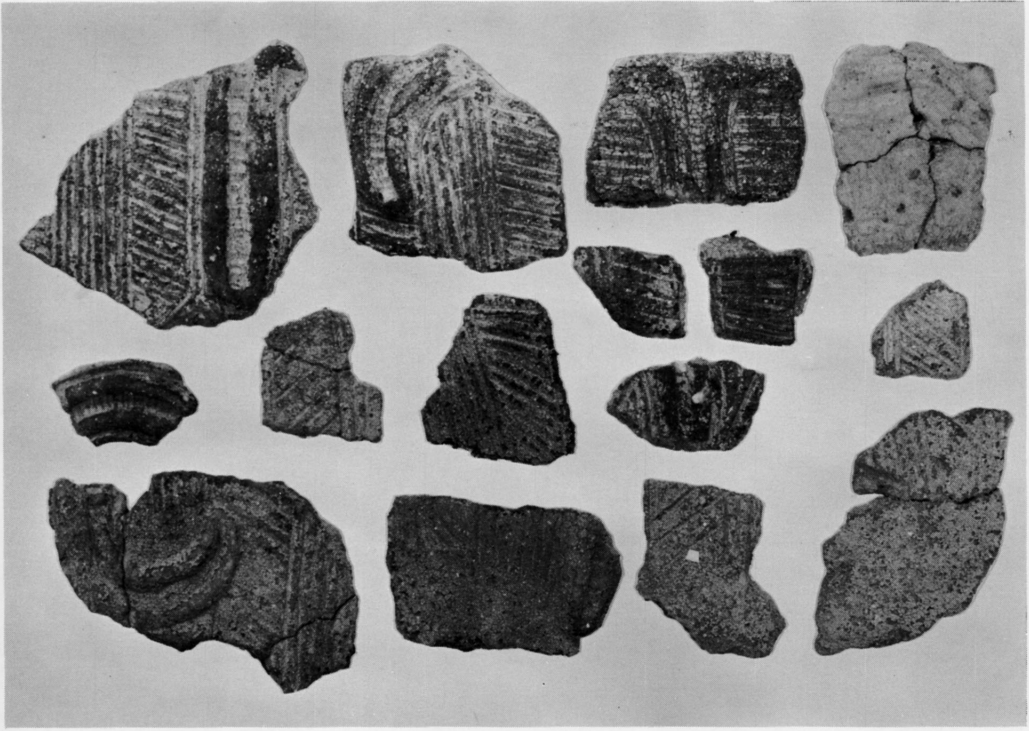


図版
29 30
石棒頭部
流紋岩角レキ
左端立石



図版
31
石冠形置石

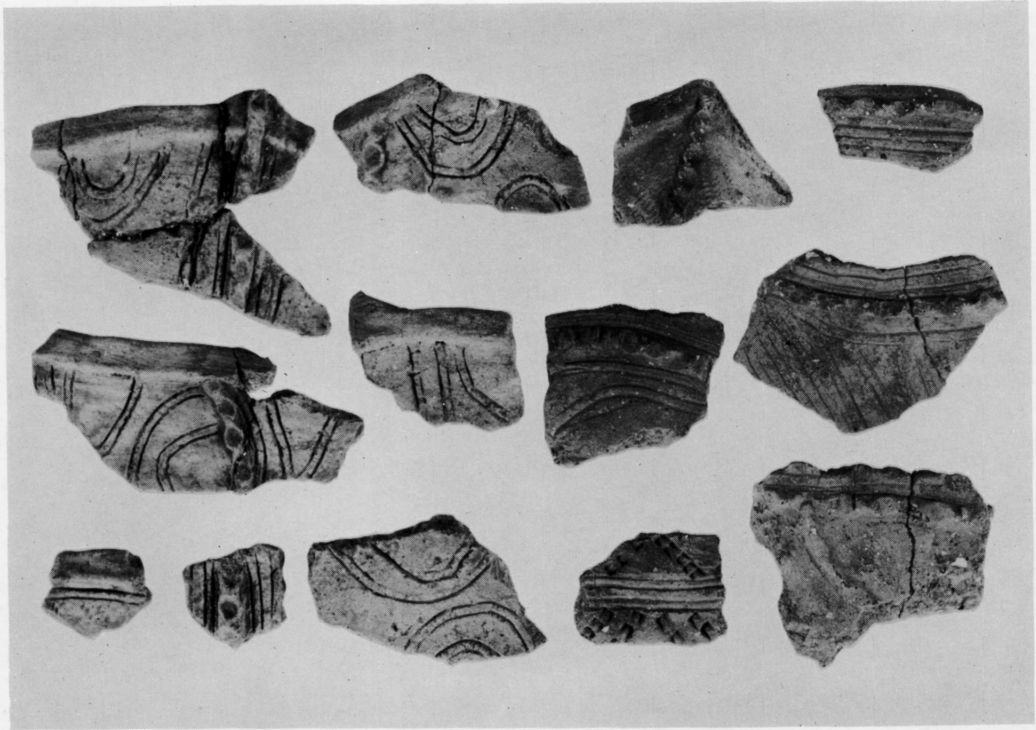
31



図版 32 第1号住居跡 A1類



図版 33 第2号住居跡 B1類



図版 34

第2号住居跡

B 2 a · 2 b 類



35



36

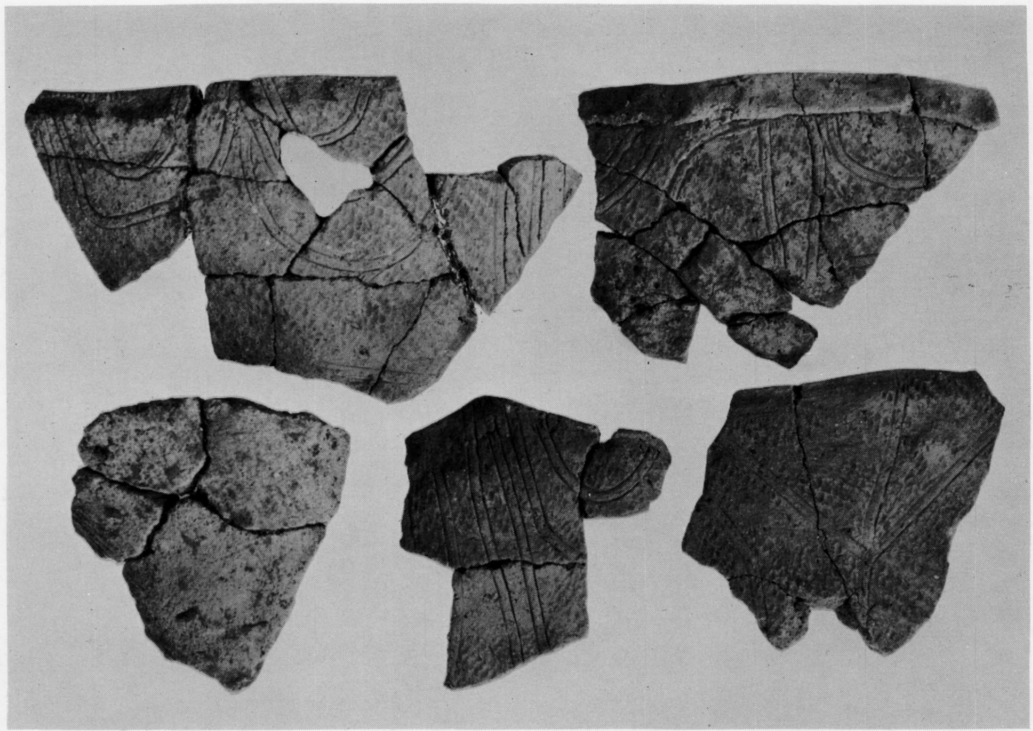
図版 35

第2号住居跡

B 3 類

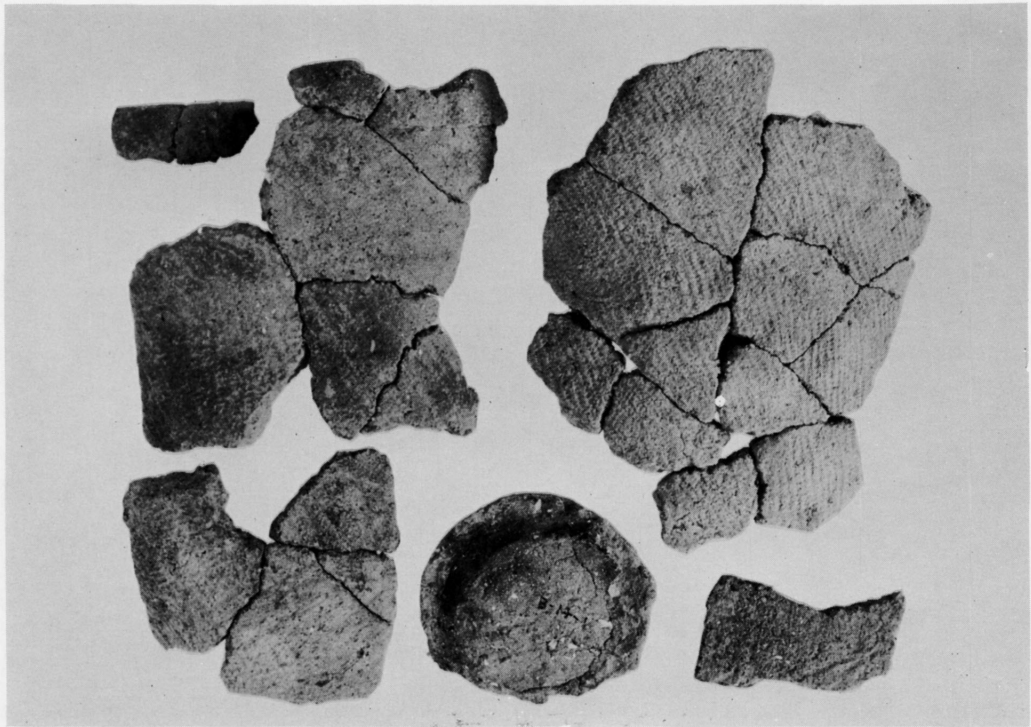
図版 36

B 5 c 類



図版 37

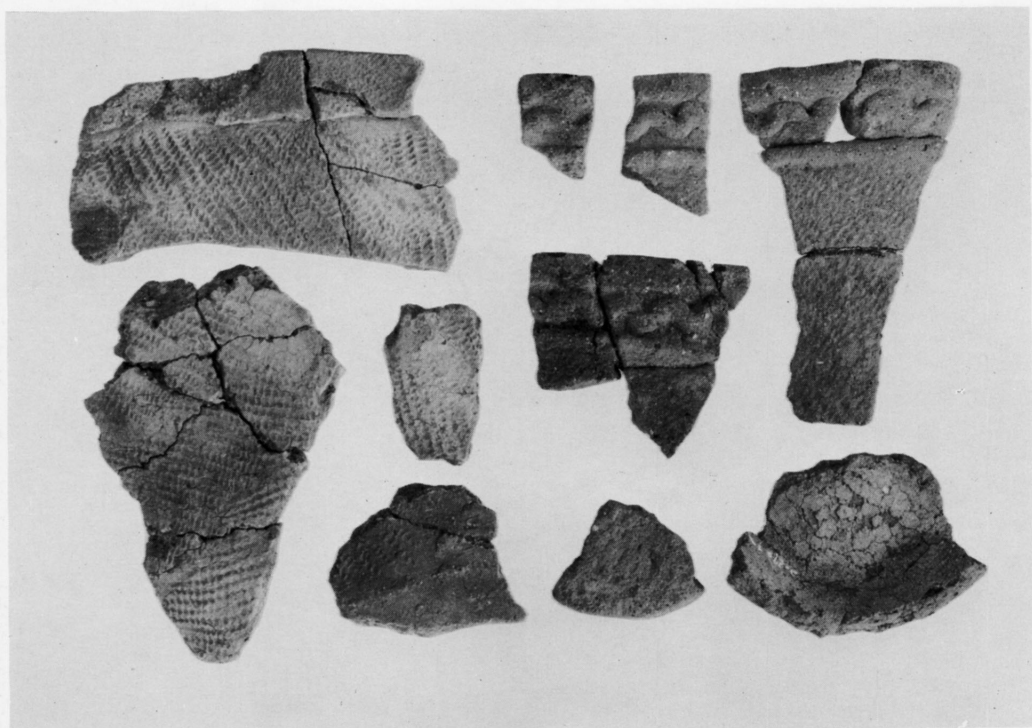
第2号住居跡
B 4類



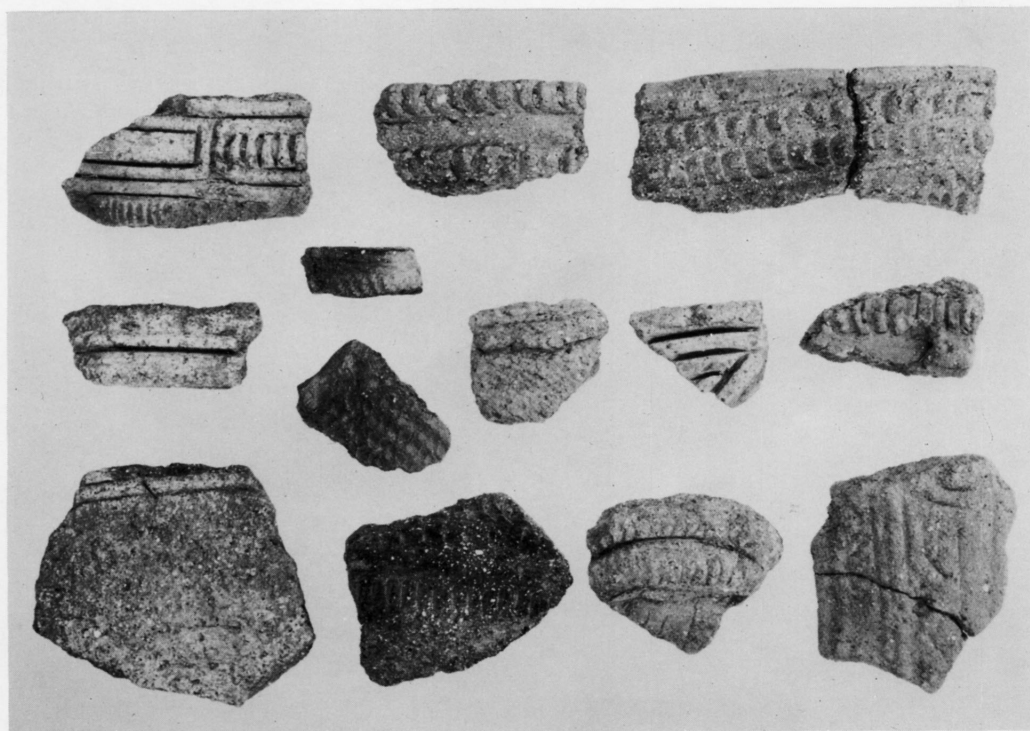
図版 38

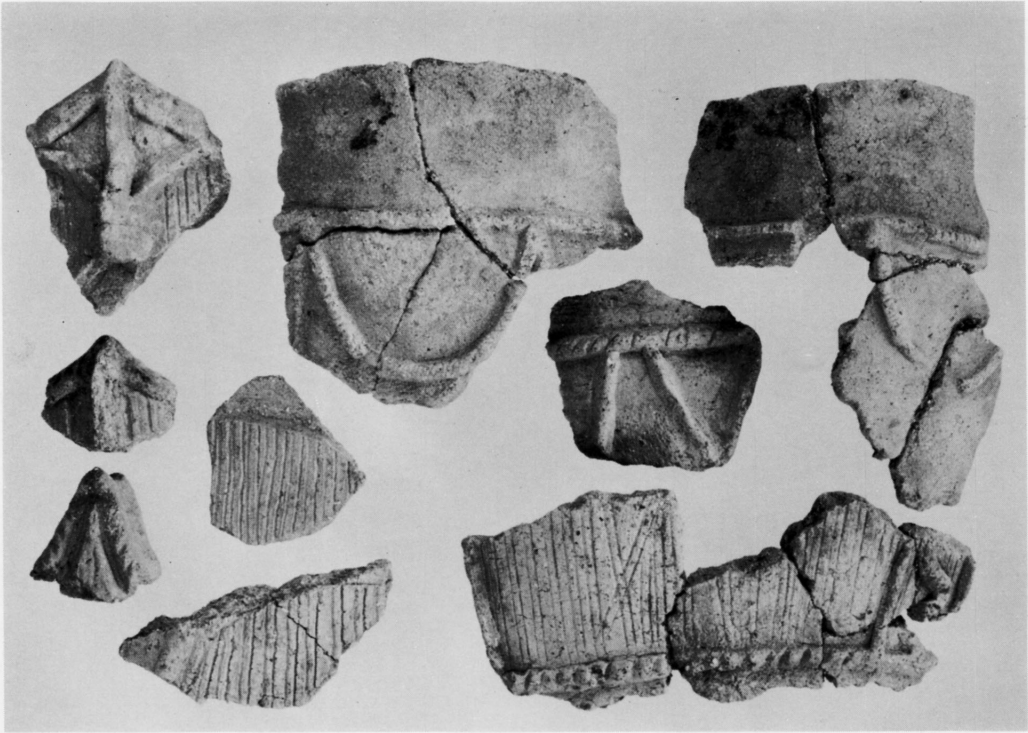
第2号住居跡
B 5 a類

図版 39 第2号住居跡 B5b・5d類



図版 40 第2号住居跡 B6類・その他





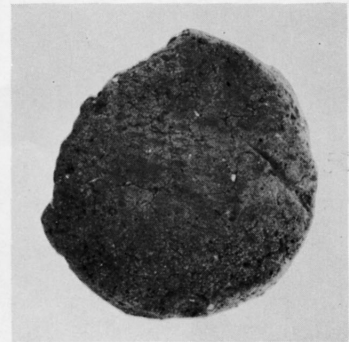
図版 41
大ビット内 B7類



42

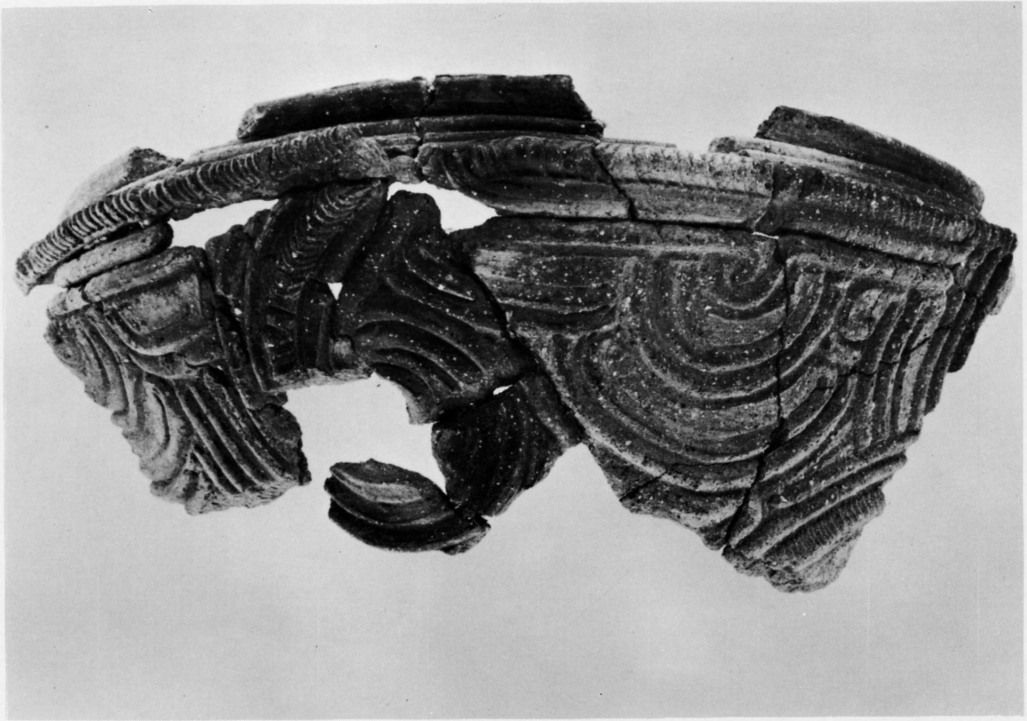


図版 42
大ビット内 B8類



43

図版 43
第2号住居跡土器底部



図版 44
第4号住居跡
C1類

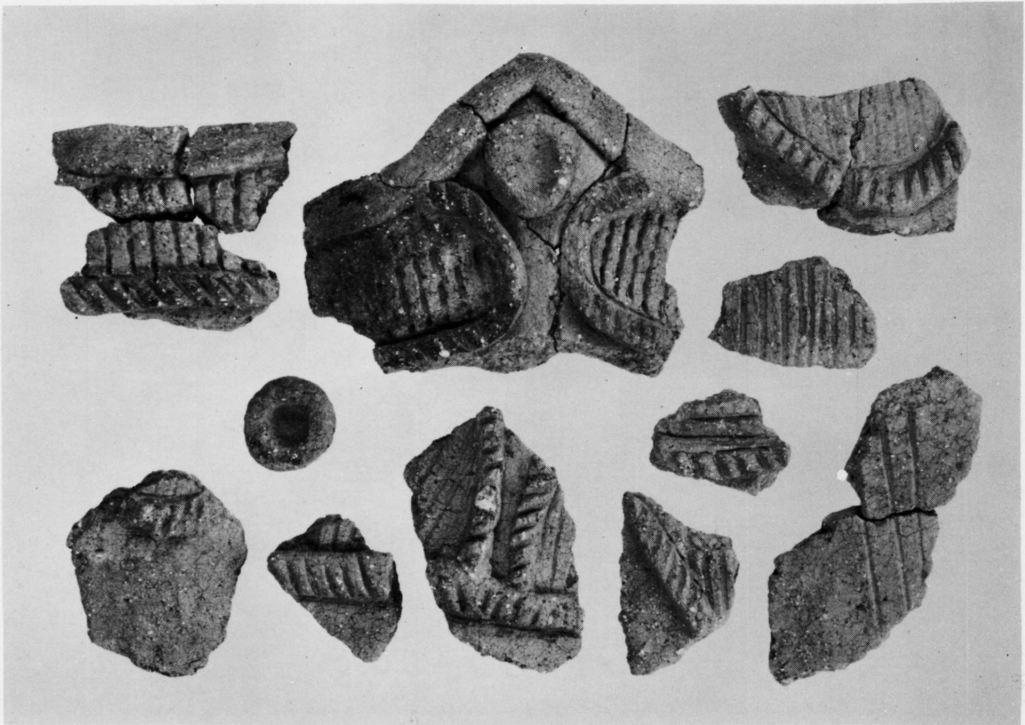


図版 45
第4号住居跡
C1類

図版 46
第4号住居跡
C2類

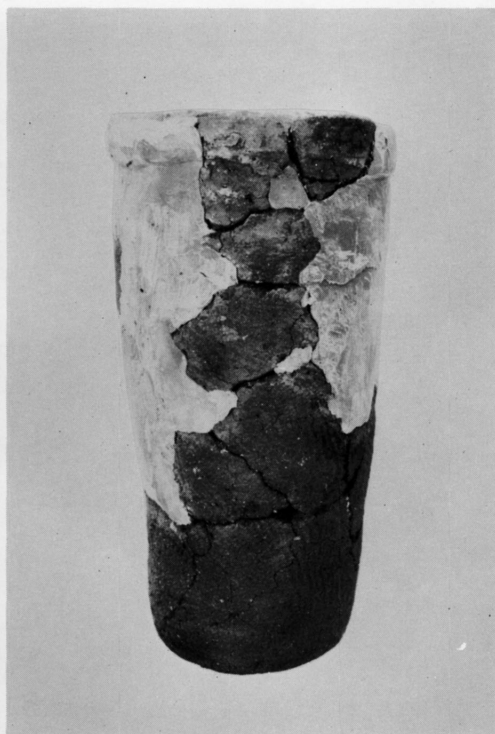


図版 47
第4号住居跡
C3類





48



49

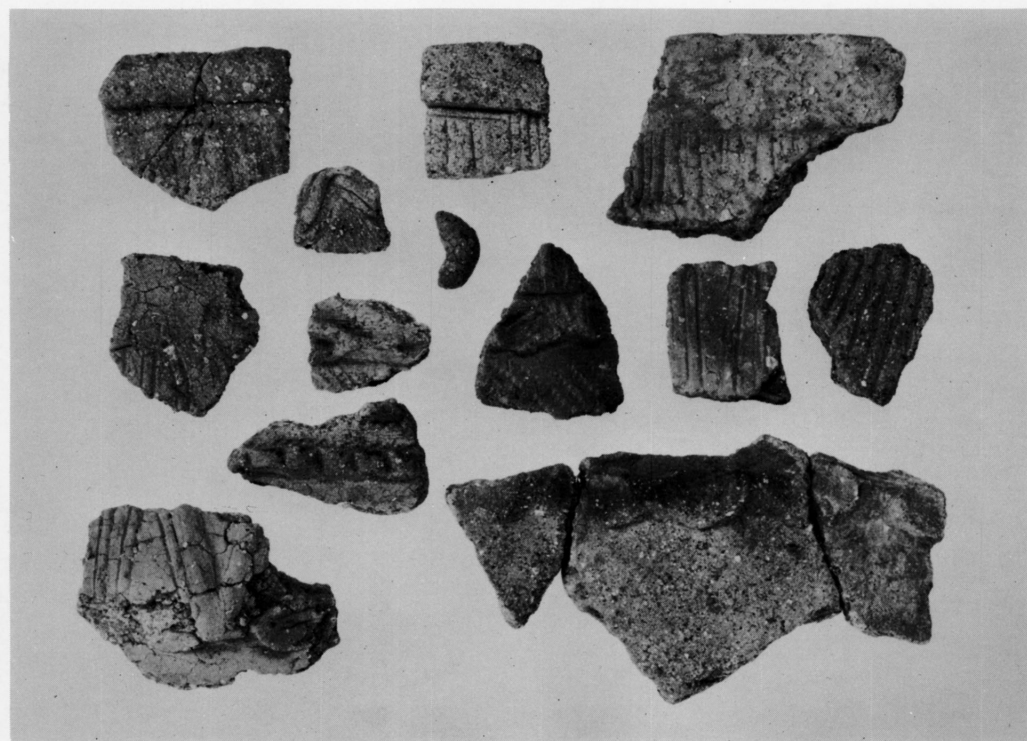
図版
48

第4号住居跡

C3類

図版
49

C4類



図版
50

第4号住居跡

C3類

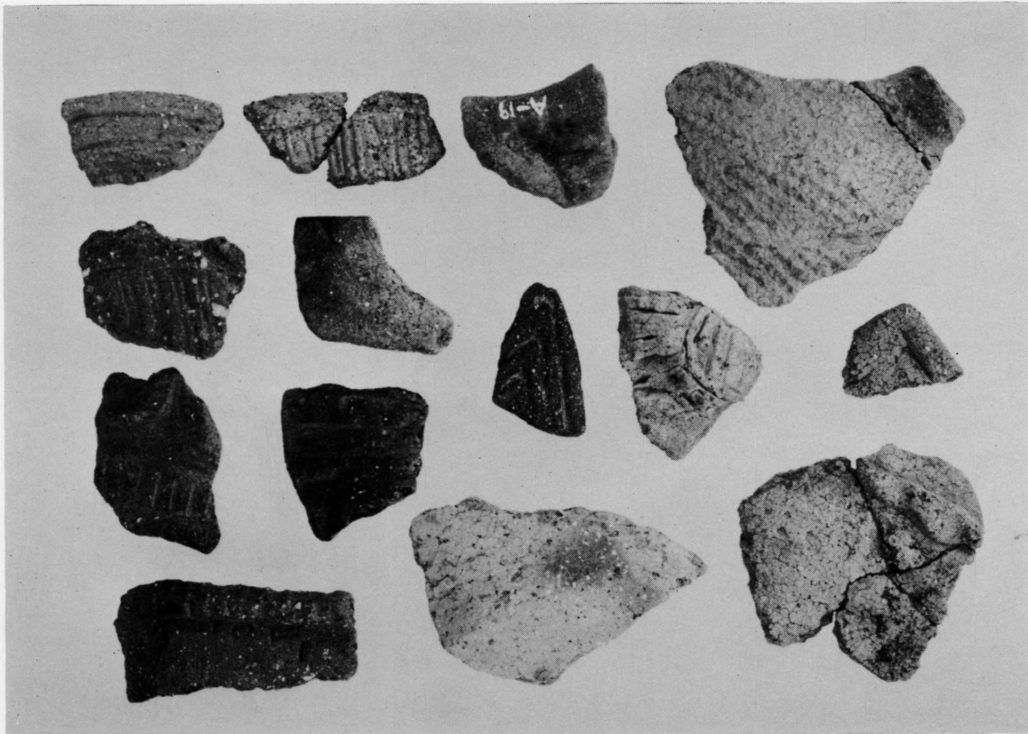
図版 51

第1ピット群
D1・2類



図版 52

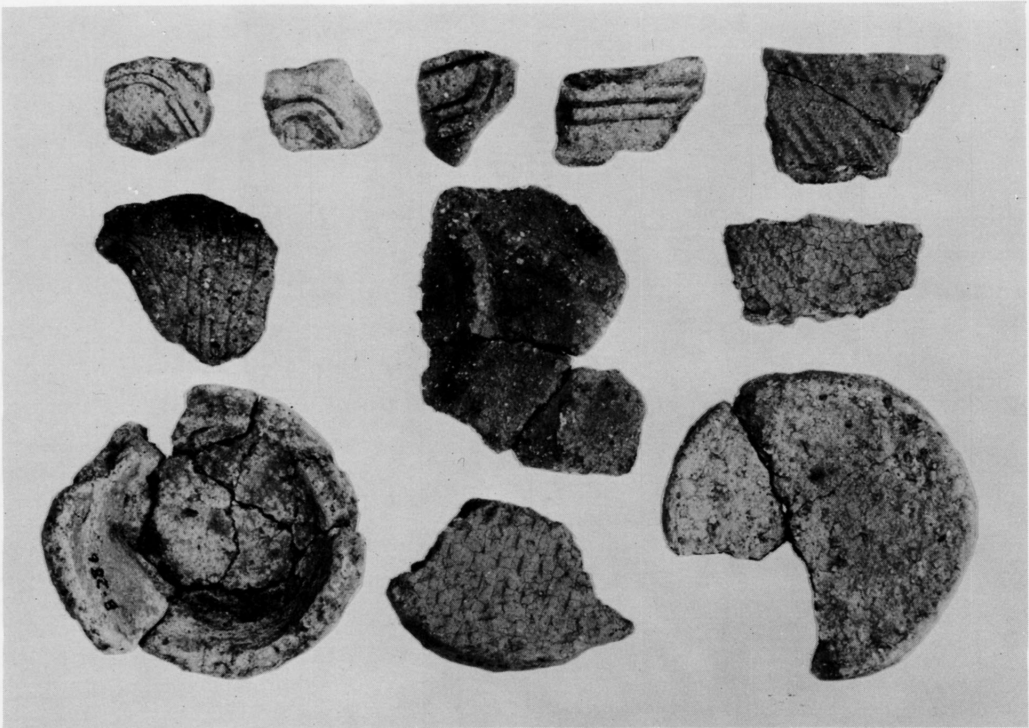
第1ピット群
D3類



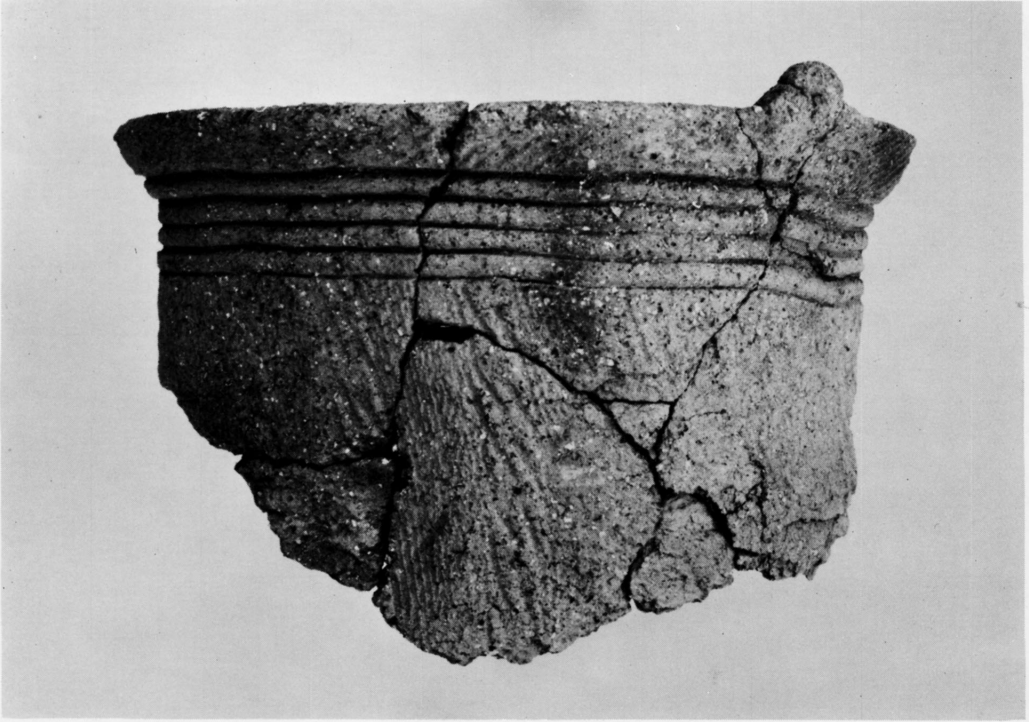
図版 53
第2ピット群
E1類



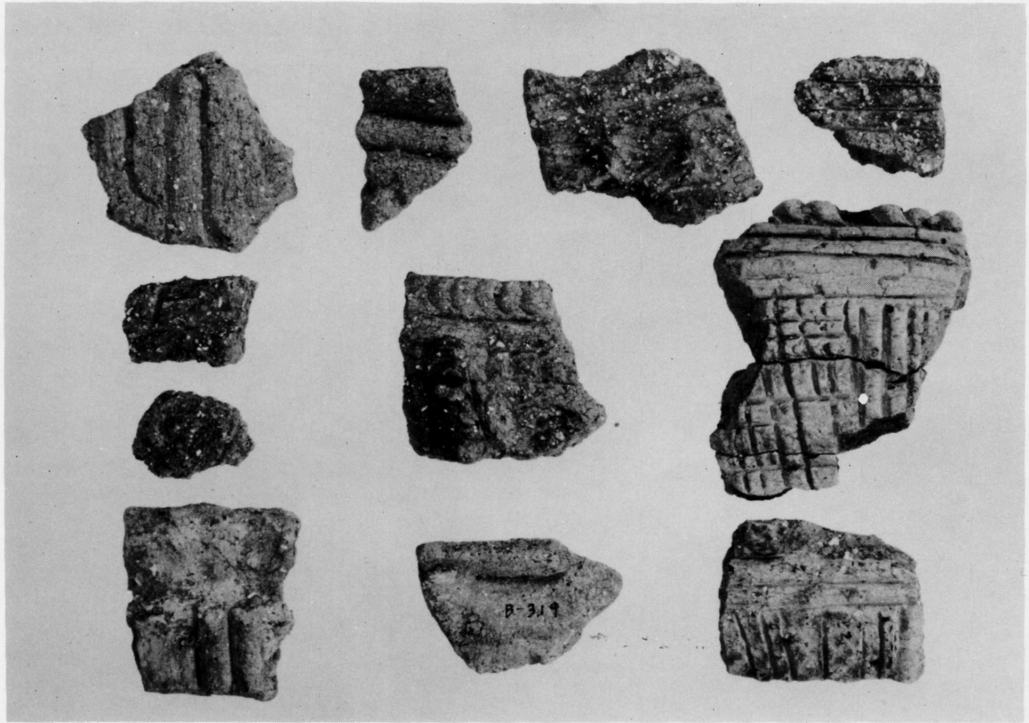
図版 54
第2ピット群
E1類

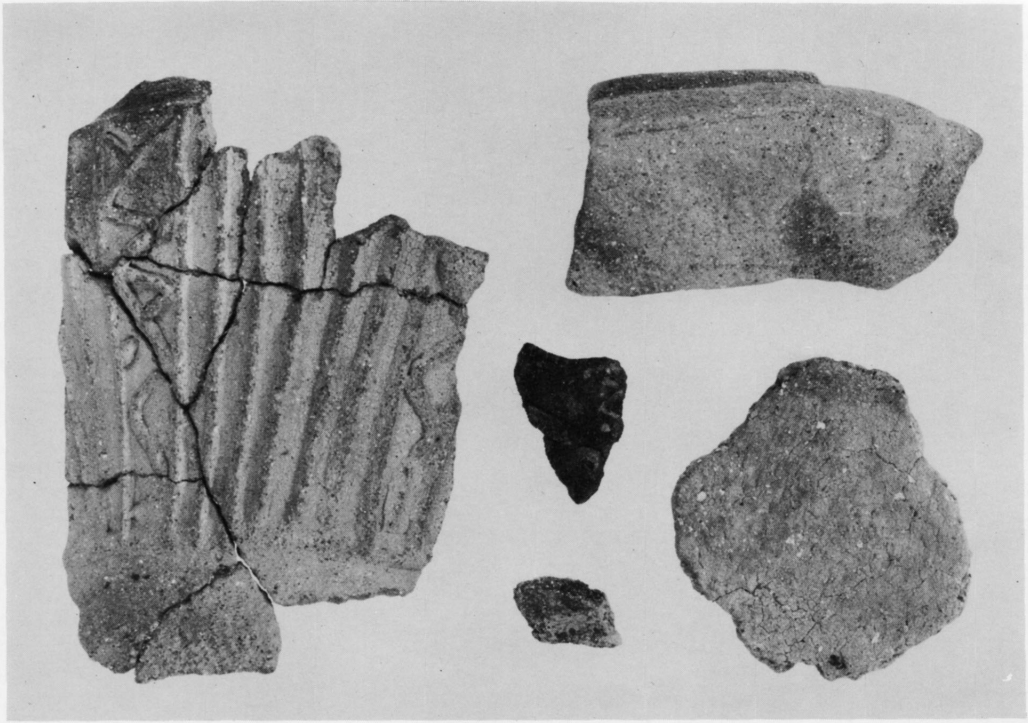


図版 55
第3ピット群
F1類



図版 56
第3ピット群
F1類

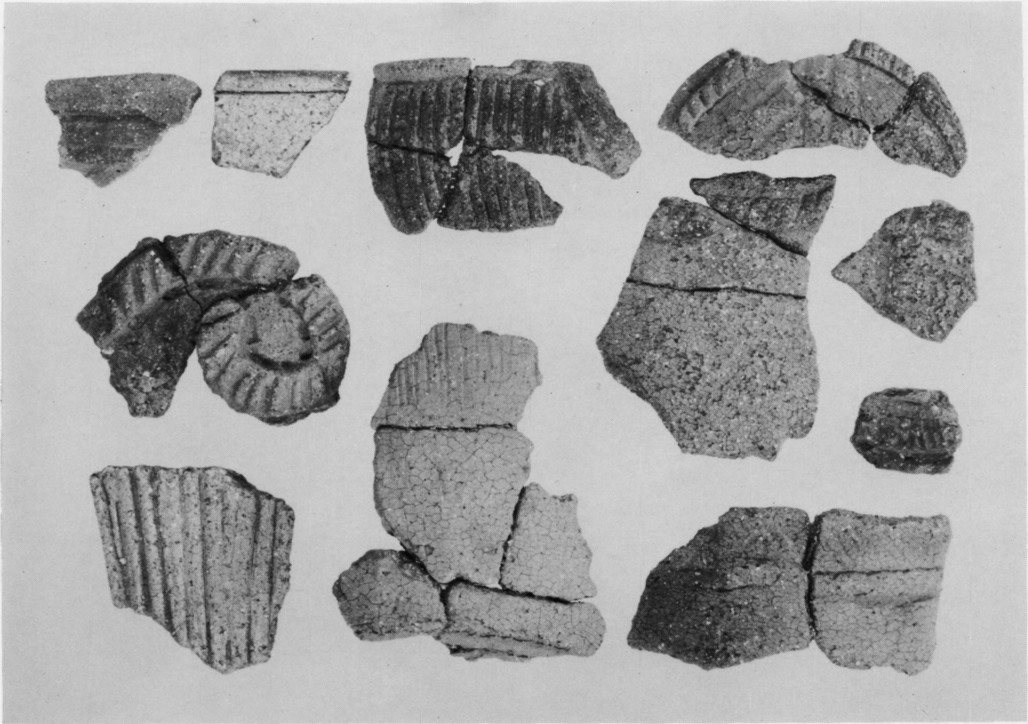




図版 57

方形土塊

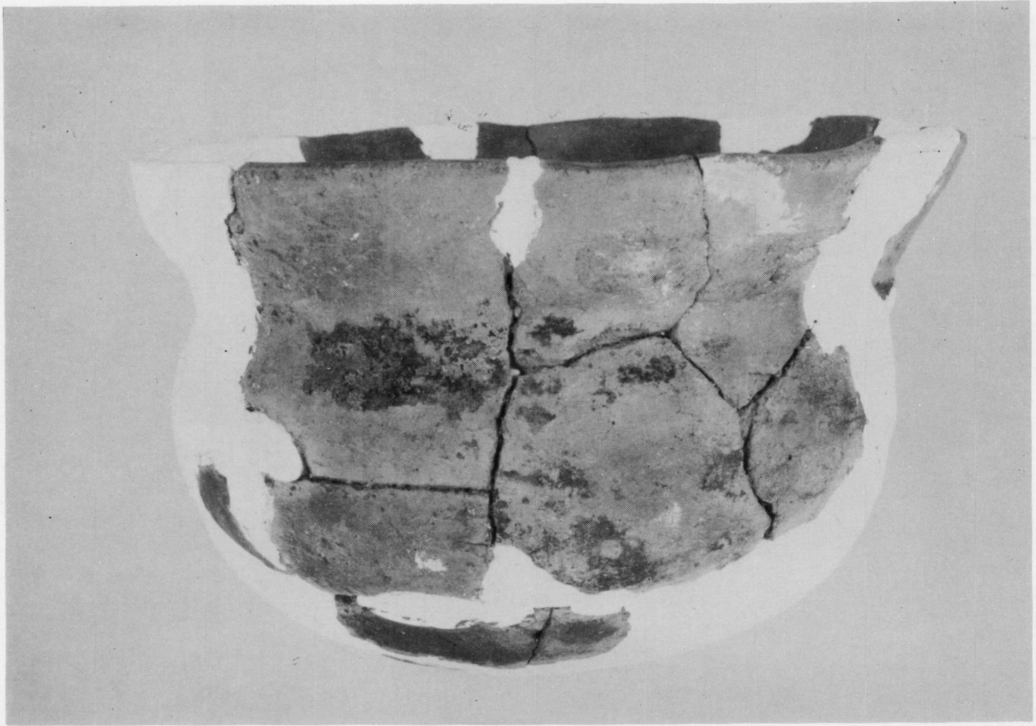
G 1類



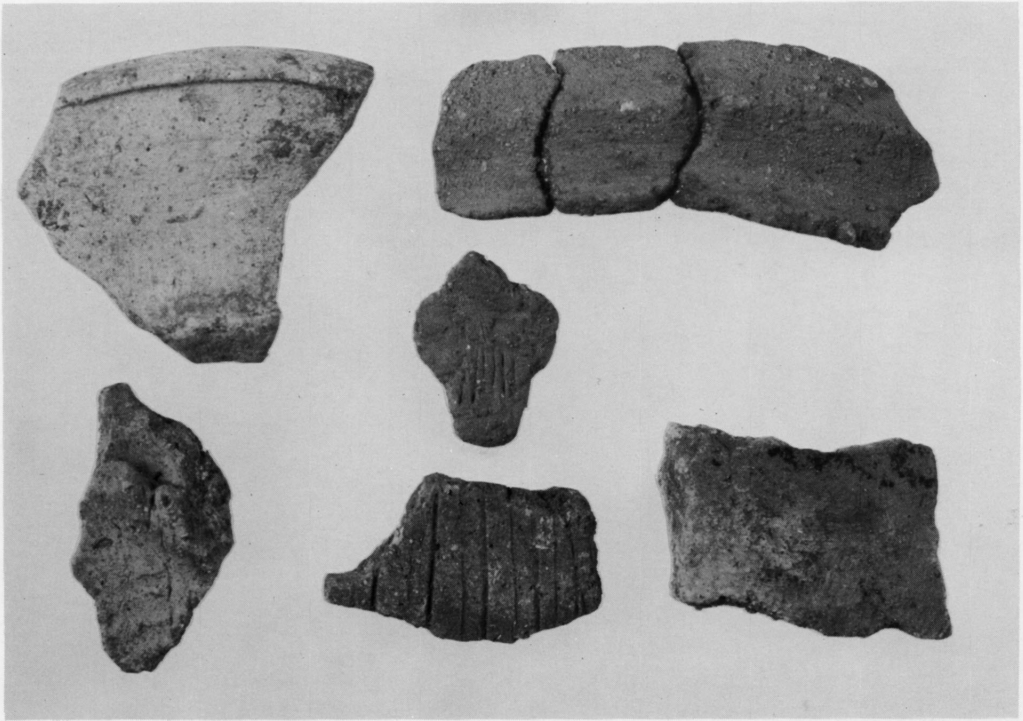
図版 58

方形土塊

G 2類



図版 59
第3号住居跡
土師器



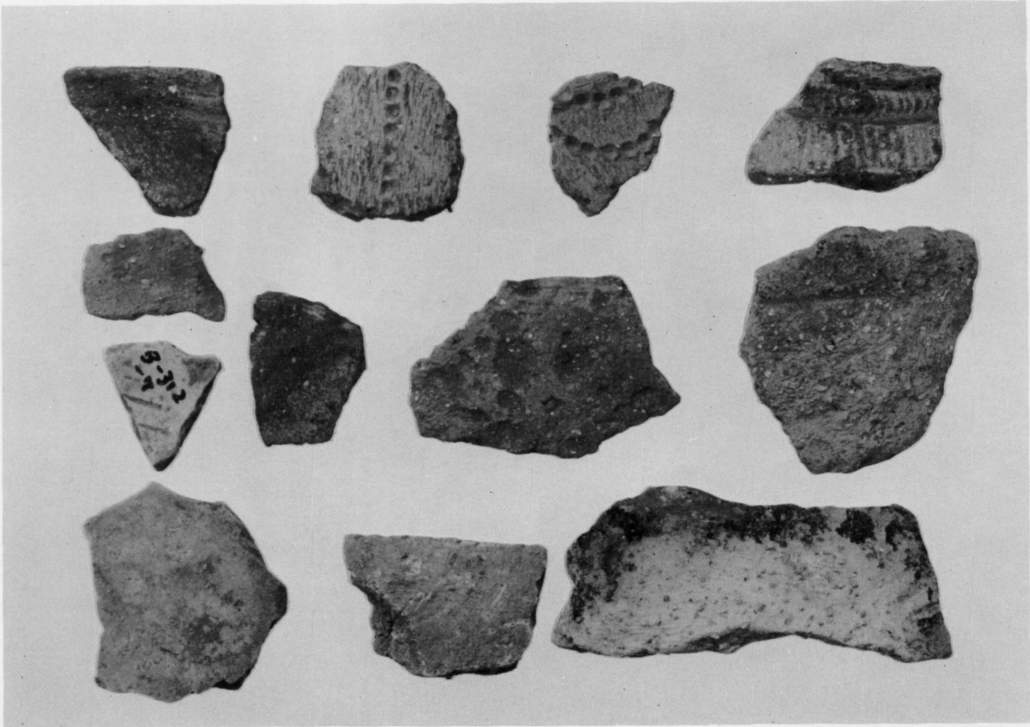
図版 60
第3号住居跡出土の土器



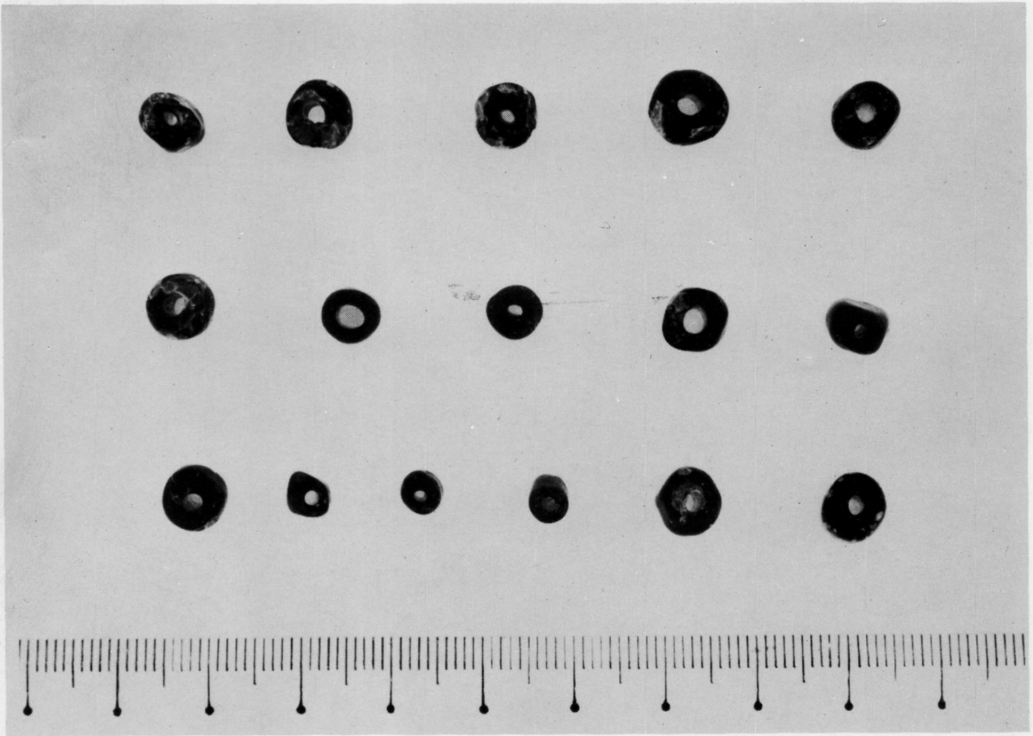
61



62



図版 64
方形周溝墓
ガラス小玉



図版 65
ビット内出土
炭化植物種子



つるね遺跡発掘調査報告書

昭和53年3月 発行

編集	高山考古学研究会
発行	高山市教育委員会
印刷	大進社 高山市有楽町40番地